ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

Ⅶ－5

1980

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

Ⅶ－5

1980

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

はじめに

県下のほ場整備事業に伴う発掘調査も、新たな展開として蒲生、神崎郡が加わり、調査件数が増大しつつある。同時に新たな資料の増加は、調査結果をまとめ、社会に還元する作業というか、義務の遂行が困難さを増してきた。しかし整理の結果は、遺跡の所在する各々の地域はもちろん、県内において、今後、近江の生い立ちを考えるうえで重要な課題を提示するものが多くあった。

本報告書の作成にあたって、調査から整理までの一貫の作業の中で、地元教育委員会、地元住民、先生諸氏、学生諸君の絶大な指導、助言、援助を得た。ここに記して謝意を表したい。

昭和55年3月

滋賀県教育委員会
文化財保護課
課長　沢　悠光

例　　言

1．本報告書は、昭和54年度の県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、湖東地区（愛知郡・神崎郡・蒲生郡・近江八幡市）の調査成果を収載したものである。

2．本調査は、滋賀県農林部耕地建設課からの依頼を受け、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。

3．本調査は本県教育委員会文化財保護課技師近藤滋を担当者とし、現地調査は財団法人滋賀県文化財保護協会技師谷口徹(小川遺跡)と補助員に北川浩（毛入堂、常安寺北遺跡他)、石原道洋（目加田遺跡)、山本一博（大日溝遺跡他)、石橋正嗣（綾戸、庄地遺跡他)、辻広志（宮ノ前遺跡）の参加を得て実施した。

4．調査にあたっては県の関係機関の各位はもとより、地元各市町村役場、教育委員会、区長等から種々の協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

5．本報告書は近藤が編集し、第１、２章は北川浩、第３章は石原道洋、第４章は山本一博、第５章は近藤、第６章は石橋正嗣、第７章は谷口徹、辻広志と近藤が執筆し、各々文末に文責を明記した。

6．本調査にかかわる図画、写真、出土遺物は滋賀県教育委員会で保管した。

目　　次

序
例　　言

第１章　愛知郡秦荘町毛入堂遺跡

１．はじめに……1
２．位置と環境……2
３．遺　　構……2
４．遺　　物……9
５．まとめ……12

第２章　愛知郡秦荘町常安寺北遺跡

１．はじめに……13
２．位置と環境……13
３．遺　　構……15
４．遺　　物……15
５．まとめ……16

第３章　愛知郡秦荘町目加田遺跡

１．はじめに……17
２．位置と環境……18
３．遺　　構……18
(1)　水路②トレンチ……18
(2)　水路①トレンチ・北拡張区１……21
(3)　第１～６トレンチ・南拡張トレンチ……23
４．遺　　物……25
５．小　　結……30
６．まとめ……31
７．出土遺物観察表……32

第４章　愛知郡湖東町大日溝遺跡

１．はじめに……37
２．位置と環境……37
３．遺構と遺物……38
４．まとめ……38

第５章　近江八幡市七ツ屋遺跡

１．はじめに……39
２．位置と環境……40
３．遺構と遺物……40
４．まとめ……40

第６章　蒲生郡竜王町綾戸遺跡

１．はじめに……43
２．位置と環境……44
３．遺　　構……44
４．遺　　物……46
５．小　　結……47
６．まとめ……48

第７章　神崎郡能登川町小川・宮ノ前・庄地遺跡

１．はじめに……50
２．位置と環境……50
３．小川遺跡……53
　(1)　検出遺構……53
　(2)　出土遺物……58
　(3)　小川遺跡の獣骨について……59
　(4)　小　　結……60
４．宮ノ前遺跡……73
　(1)　検出遺構と遺物……73
　　イ．第２号支線排水路……73
　　ロ．暗渠用水路……73
　　ハ．第19号小排水路……74
　(2)　小　　結……77
５．庄地遺跡……78
　(1)　検出遺構と遺物……78
　(2)　小　　結……78
６．まとめ……78

挿図目次

第１章　毛入堂遺跡

第１図　位　置　図……1
第２図　トレンチ配置図……2
第３図　遺構実測図(1)……3
第４図　遺構実測図(2)……4
第５図　断面実測図(1)……4・5
第６図　断面実測図(2)……5
第７図　ＳＢ04実測図……6
第８図　ＳＢ05・06、ＳＡ02実測図……7
第９図　出土遺物実測図(1)……10
第10図　出土遺物実測図(2)……11
第11図　ピット１出土木製品……12

第２章　常安寺北遺跡

第１図　位　置　図……13
第２図　遺物出土状況図……14
第３図　出土遺物実測図……16

第３章　目加田遺跡

第１図　位　置　図……17
第２図　トレンチ配置図……20
第３図　水路②トレンチ平面図……20・21
第４図　水路②トレンチ西壁断面図……20・21
第５図　水路②ＳＤ－１、ＳＤ－５西側断面図……20・21
第６図　水路①トレンチ概略図……21
第７図　南部地区トレンチ配置図……23
第８図　南部地区トレンチ平面図……24
第９図　出土遺物実測図……26
第10図　出土遺物実測図……27
第11図　出土遺物実測図……28
第12図　出土塼実測図……29

第４章　大日溝遺跡

第１図　位　置　図……37

第５章　七ツ屋遺跡

第１図　位　置　図……39
第２図　トレンチ配置図……41

第６章　綾戸遺跡

第１図　位　置　図……43
第２図　トレンチ配置図……44・45
第３図　トレンチ断面図……44・45
第４図　七ツ塚平面・断面図……45
第５図　出土土器実測図……46
第６図　N－０出土須恵器大甕 ……47

第７章　小川・宮ノ前・庄地遺跡

第１図　位　置　図…… 49
第２図　トレンチ配置図…… 51
第３図　トレンチ配置図（小川・宮ノ前）…… 52
第４図　支線道路敷地区（小川）遺構全図…… 53
第５図　木棺墓ＳＫ06実測図（小川）…… 55
第６図　遺構断面図（小川）…… 56
第７図　畑地試掘調査実測図…… 60
第８図　出土遺物実測図(1)…… 61
〃　〃　〃
第19図　出土遺物実測図(12)…… 72
第20回　暗渠用水路遺構実測図……73
第21図　水路敷地（宮ノ前）遺構全図…… 74
第22図　ＳＸ242・245平面図及び断面図…… 75
第23図　出土遺物実測図…… 76
第24図　トレンチ配置図（庄地）…… 78
第25図　T_1遺構平面・断面図 …… 78
第26図　T_2遺構平面・断面図 …… 78
第27図　T_1、ＳＤ４(B)出土板塔婆 …… 79

図版目次

第３章　目加田遺跡

図版１　１：水路②トレンチ１区（東から）
　　２：　　同　上　　（南から）
図版２　１：水路②トレンチ４区、ＳＤ-２（東から）
　　２：　　同上　　６・７区　　（東から）
図版３　１：水路②トレンチ７区（東から）
　　２：　　同上　　８区（南から）
図版４　１：水路②トレンチ８区（東から）
　　２：　　同上
図版５　１：水路②トレンチ９区、ＳＤ-５（北から）
　　２：　　同上　　（西から）
図版６　１：水路②トレンチ11区　　（北から）
　　２：　　同上　　11区、ＳＥ-２（北から）
図版７　１：水路①トレンチ１区　　（東から）
　　２：　　同上　　３区、ＳＢ-１（南から）
図版８　１：水路①トレンチ５～７区（東から）
　　２：　　同上　　６～７区（南から）
図版９　１：水路①トレンチ８～９区、ＳＢ-２（南から）
　　２：北拡張区１　　ＳＢ-２　　（西から）
図版10　１：北拡張区１・２（南から）
　　２：　同上　１　　（西から）
図版11　１：北拡張区１、ＳＫ-３（西から）
　　２：　同上　２　　（南から）
図版12　１：北拡張区２（東から）
　　２：第１～６トレンチ調査前風景
図版13　　出土遺物
　〜　　〜
図版17　　出土遺物

第６章　綾戸遺跡

図版18　１：Ｎ－０　北壁断面
　　２：Ｎ－１　東壁断面
図版19　１：Ｎ－０　須恵器大甕(8)出土状況
　　２：Ｎ－０　同上 坏蓋(7)　同上
図版20　１：Ｎ－10　完掘状況
　　２：Ｓ－１　須恵器坏蓋(1)出土状況
図版21　１：Ｓ－２　須恵器坏出土状況
　　２：Ｓ－２　同上 坏蓋(4)出土状況
図版23　１：Ｓ－３　須恵器坏身出土状況
　　２：Ｓ－４　完掘状況
図版23　１：七ツ塚調査前状況
　　２：Ｅ－３　完掘状況
図版24　１：Ｅ－３　周溝北東コーナー状況
　　２：Ｅ－４　完掘状況
図版25　１：Ｗ－６　トレンチ状況
　　２：Ｗ－６　出土弥生式土器

第７章　小川・宮ノ前・庄地遺跡

図版26　１：小川地区全景
　　２：土壙（ＳＫ03）・不定形落ち込み（ＳＸ01・ＳＸ02）付近（南より）
図版27　１：土壙（ＳＸ03）・不定形落ち込み（ＳＸ01・ＳＸ02）付近（西北より）
図版28　１：トレンチ中央付近（西北より）
　　２：方形土壙（ＳＫ05）・土壙墓（ＳＫ06）付近（北より）
図版29　１：溝（ＳＤ01）・方形土壙（ＳＫ05）・土壙墓（ＳＫ06）付近（東より）
　　２：沼沢地・土壙（ＳＫ01）付近（西北より）
図版30　１：沼沢地土層サンプリング状況
　　２：掘立柱建物（ＳＢ01）検出状況（南より）
図版31　１：（上）柱穴（Ｐ02）断面
　　（下）柱穴（Ｐ03）断面
　　２：（上）柱穴（Ｐ04）断面
　　（下）柱穴（Ｐ05）断面
図版32　１：掘立柱建物（ＳＢ01・ＳＢ02・ＳＢ03）検出状況（西北より）
　　２：掘立柱建物（ＳＢ02・ＳＢ03）検出状況（南西より）

図版33　1：土壙（ＳＫ04）全景（西北より）

　　2：土壙（ＳＫ04）壺出土状況

図版34　1：土壙（ＳＫ04）甕出土状況

　　2：土壙（ＳＫ04）甕出土状況

図版35　1：方形土壙（ＳＫ05）（北より）

　　2：木棺墓（ＳＫ06）全景（南より）

図版36　1：木棺墓（ＳＫ06）歯出土状況

　　2：溝（ＳＤ03）断面

図版37　1：溝（ＳＤ09）断面

　　2：溝（ＳＤ12）全景（南より）

図版38　1：溝（ＳＤ13）断面

　　2：溝（ＳＤ13）土器出土状況

図版39　1：不定形落ち込み（ＳＸ04）断面

　　2：畑地試掘トレンチ設定状況

図版40　1：出土遺物

図版41　1：出土遺物

図版42　1：出土遺物

図版43　1：出土遺物

図版44　1：出土遺物

図版45　1：Ａ区調査トレンチ全景（南西から）

　　2：　　同上　　（北東から）

図版46　1：Ｃ区検出遺構遠景（南西から）

　　2：　　同上　　近景（西から）

図版47　1：Ｃ区検出遺構（ＳＸ200）近景（南西から）

　　2：　　同上

図版48　1：Ｃ区検出遺構近景（北西から）

　　2：　　同上　　（西から）

図版49　1：Ｃ区検出遺構上層（南東から）

　　2：　　同上　　下層（南東から）

図版50　1：Ｃ区検出遺構上層（南西から）

　　2：　　同上　　（南東から）

図版51　1：Ｃ区検出遺構上層（南東から）

　　2：　　同上　　下層（南東から）

図版52　1：Ｄ区検出遺構近景　　（南東から）

　　2：Ｃ・Ｄ区境の平安時代の溝（北西から）

図版53　1：Ｄ区検出遺構近景（南西から）

　　2：　　同上　　（南西から）

図版54　1：D区検出遺構（ＳＸ213）全景（西から）

　　2：　同上　　断面（南から）

図版55　1：D区検出遺構上層（南東から）

　　2：　同上　　下層（南東から）

図版56　1：D区検出遺構（ＳＸ242）上層（北から）

　　2：　同上　　下層（西から）

図版57　1：D区検出遺構（南西から）

　　2：　同上　　（南西から）

図版58　1：D区検出遺構　　（南西から）

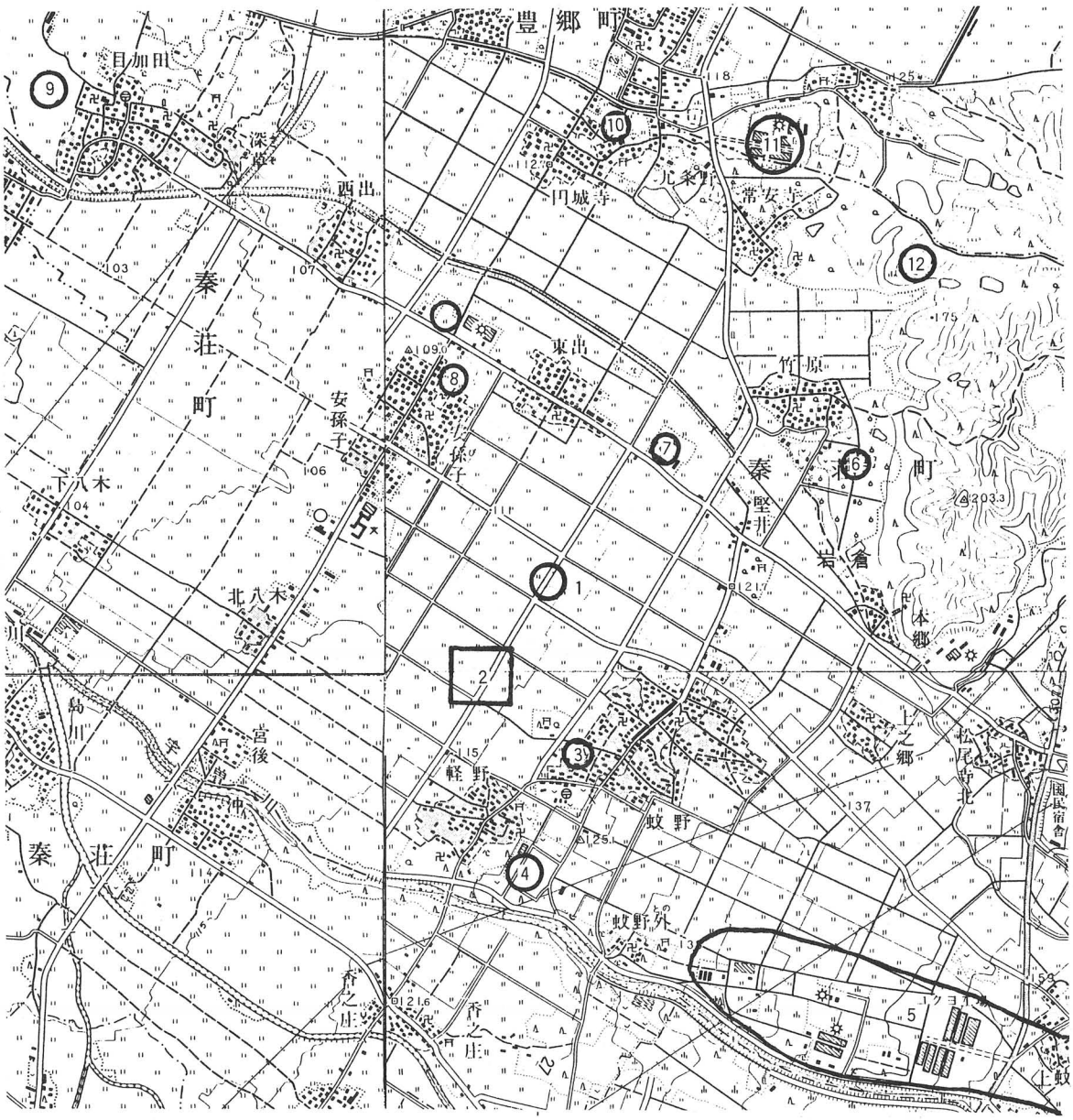
　　2：D区工事着工後の状況（南東から）

第１章　愛知郡秦荘町毛入堂遺跡

1．はじめに

愛知郡秦荘町蚊野に所在する毛入堂遺跡は、従来より古墳時代から平安時代にかけての土器の散布が知られ、集落跡あるいは、地名にちなむ寺院跡の存在が予想されていた遺跡である。

調査は、県営ほ場整備事業に先立ち実施したものであるが、夏期施行、冬期施行と工事の都合により春秋２回に分け実施した。春期の調査はＡ・Ｂ各トレンチを、そして秋期調査で他のトレンチを設定した。特にＢトレンチは、本来、さらに北へ延ばすべく、当初は考えていたが、地形的に谷地への下り勾配となっていたため中断し、秋期は東へ延ばすこととなった。



1　毛入堂遺跡　　5　金剛寺野古墳群　　9　目加田遺跡
2　軽野塔塚廃寺　　6　竹原古墳群　　10　常安寺北遺跡
3　狩野城跡　　7　東出遺跡　　11　北条野古墳群
4　軽野正墳遠跡　　8　安孫子遺跡　　12　高坪山窯跡

第１図　位　置　図

現地調査には、山本一博・林定信・宮川弘・川南隆・北川浩他の参加があった。

また、調査に際しては、秦荘町教育委員会をはじめ地元の方々、ほ場整備関係機関の方々には色々とお世話になった。ここに記して謝意を表したい。

2．位置と環境

毛入堂遺跡は、宇曽川の右岸に位置する扇状地に立地し、標高は約116mを測る。遺跡の東部は、地割に愛知郡条里の遺構を遺すが、西部では旧河道に伴う変化が認められる。

遺跡の南西には塔ノ塚廃寺が位置し、昨年度の調査により奈良時代初頭から平安時代後期まで存続した寺院跡であることが判明しており、２町域の寺域が想定されている。また、寺域の南側では古墳時代の方形周溝墓や集落跡も確認されている。

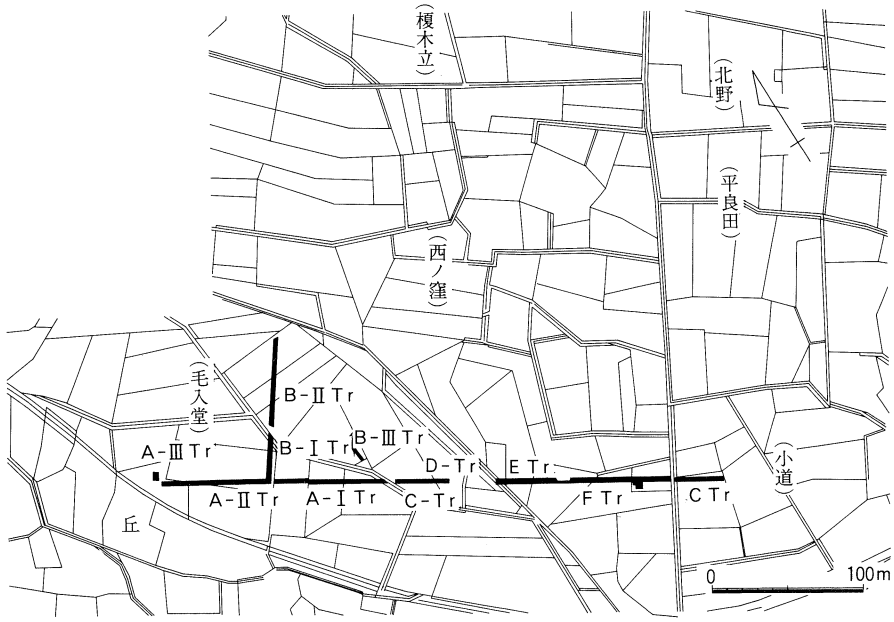
古墳時代の集落跡は他に軽野正境遺跡や狩野遺跡があり、東方には、湖東地方では最大規模の金剛寺野古墳群（約300基）が存在する。また、当該遺跡の北東には深田遺跡があり、弥生時代から平安時代の遺物の出土が知られている。

この一帯は、天平宝子６年５月の正倉院文書によれば、愛智郡蚊野郷であり、東大寺の所領となっている。

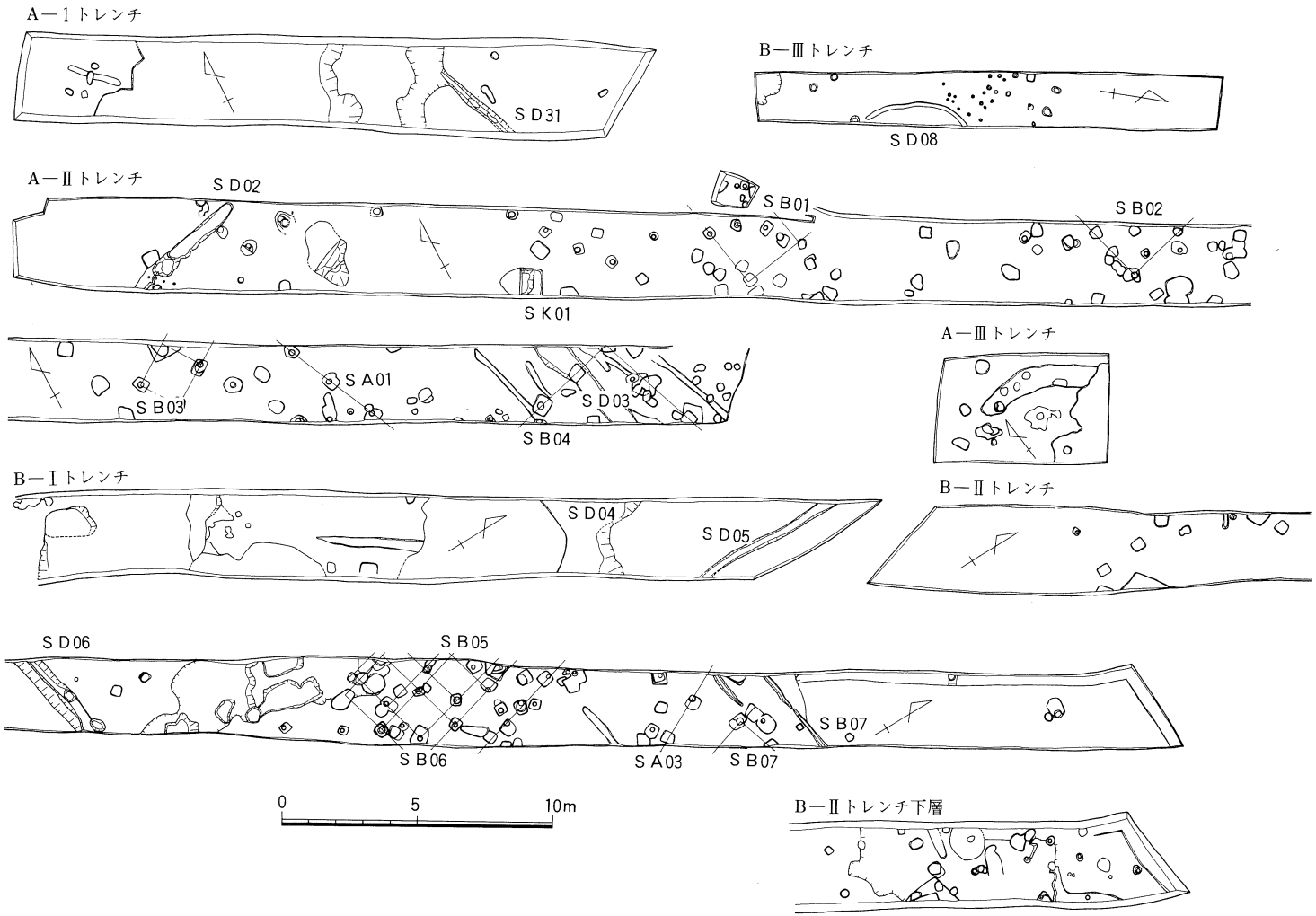
また、蚊野付近は、愛知郡を本拠地とした愛智秦氏と肩をならべる蚊野氏の本拠地と考えられており、上記の遺跡との関連性が注目される。

3．遺　　構

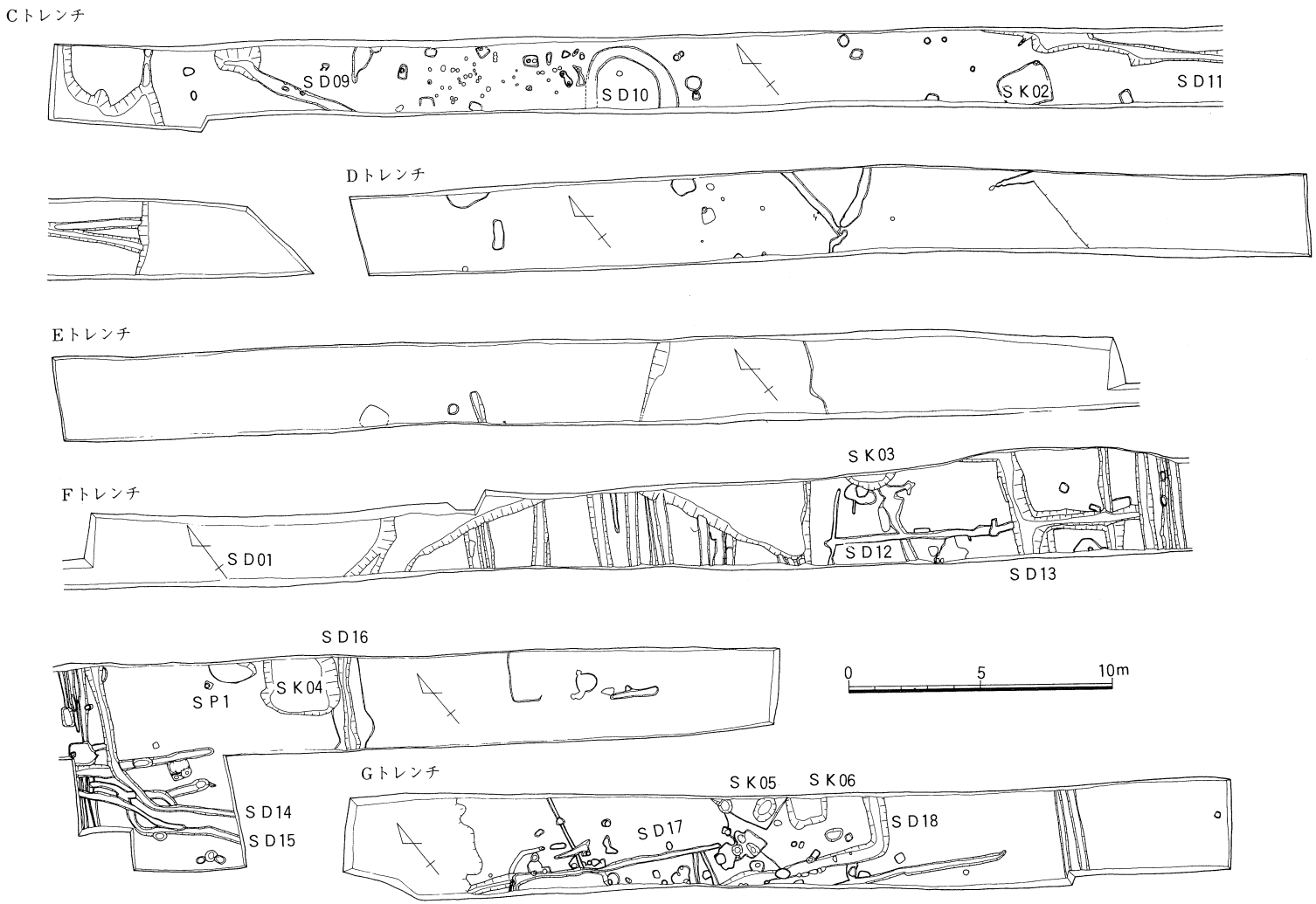
遺構は狭小なトレンチによる調査であったにも関わらず多数検出され、遺跡の性格を知る手掛りとなる資料が多く得られた。



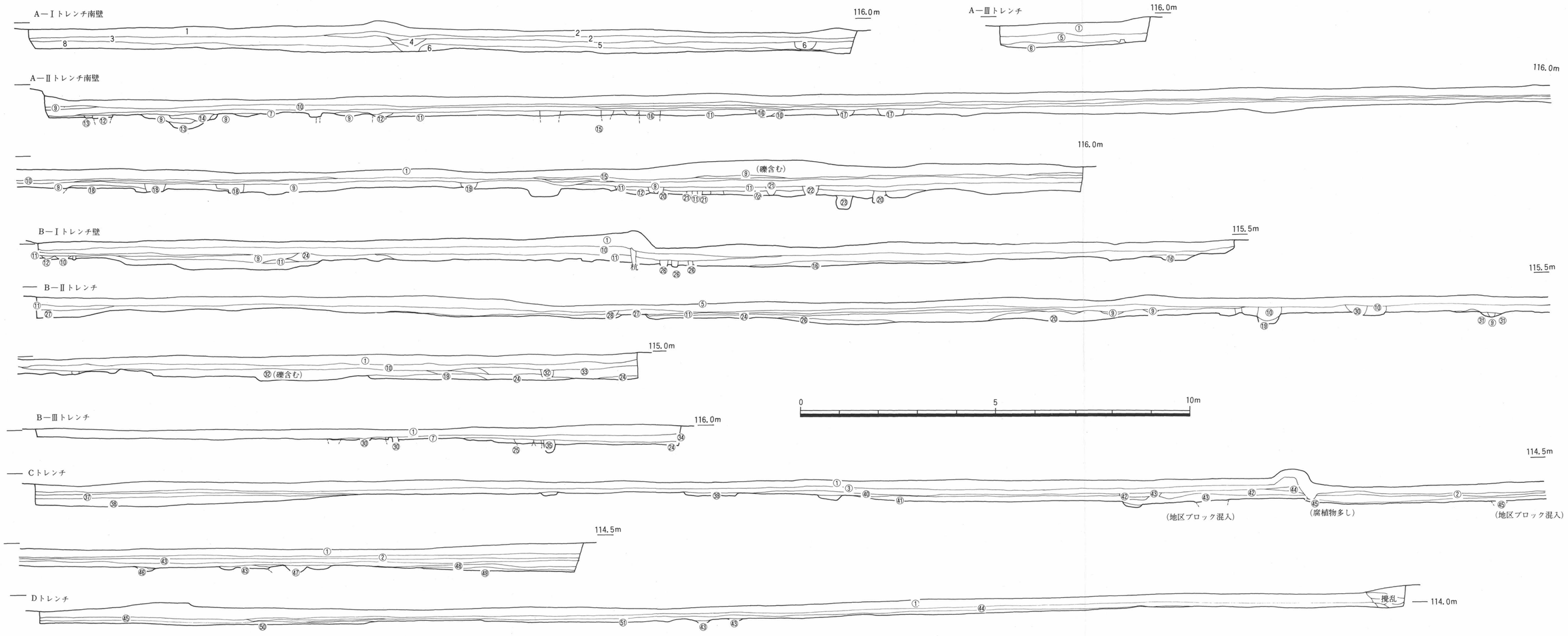
第２図　トレンチ配置図


A－1トレンチ
SD31
B－Ⅲトレンチ
SD08
A－Ⅱトレンチ
SD02
SB01
SB02
SK01
SA01
SB03
SD03
SB04
A－Ⅲトレンチ
B－Ⅰトレンチ
SD04
SD05
B－Ⅱトレンチ
SD06
SB05
SB06
SA03
SB07
SB07
0
5
10m
B－Ⅱトレンチ下層

第3図　遺構実測図(1)

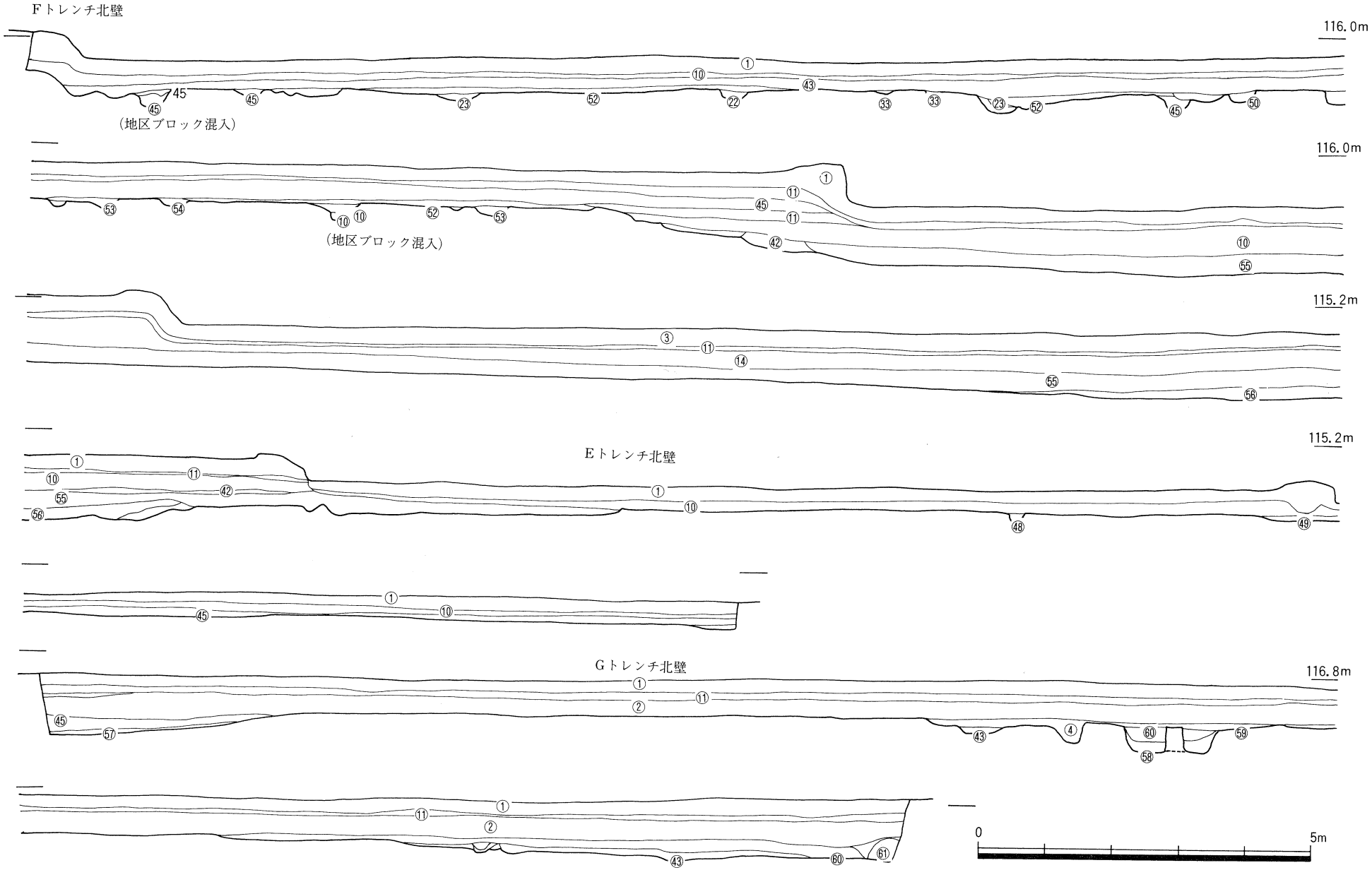

Cトレンチ
SD09
SD10
SK02
SD11
Dトレンチ
Eトレンチ
SK03
Fトレンチ
SD01
SD12
SD13
SD16
SP1
SK04
0
5
10m
Gトレンチ
SK05
SK06
SD14
SD15
SD17
SD18

第４図　遺構実測図(2)



① 耕　土
② 旧耕土
③ 淡青灰粘質土
④ 淡青褐色粘質土
⑤ 淡黄灰色粘土
⑥ 淡青褐色粘土
⑦ 淡青灰色粘質土
⑧ 黄灰色粘土
⑨ 淡褐灰色粘質土
⑩ 暗灰褐色粘質土
⑪ 淡灰褐色粘質土
⑫ 淡黄褐色粘土
⑬ 暗黄灰色粘土
⑭ 淡黄灰色粘質土
⑮ 淡黄褐色粘質土
⑯ 明黄灰色粘土
⑰ 淡灰褐色粘土
⑱ 淡褐灰色粘土
⑲ 暗黄褐色粘土
⑳ 暗褐色粘土
㉑ 黄灰色粘質土
㉒ 褐灰色粘質土
㉓ 淡灰色粘質土
㉔ 明褐灰色粘質土
㉕ 暗青灰色粘土
㉖ 灰色粘質土
㉗ 灰褐色粘質土
㉘ 淡青灰色砂泥
㉙ 暗褐灰色粘質土
㉚ 暗黄褐色粘質土
㉛ 暗黄灰色粘土
㉜ 濃灰褐色粘質土
㉝ 淡褐灰色粘質土
㉞ 淡黒褐色砂質土
㉟ 黒褐色砂質土
㊱ 黒灰色砂質土
㊲ 暗灰褐色粘土
㊳ 黒褐色礫混
㊴ 黒色腐植土
㊵ 黒色礫混
㊶ 淡黒色泥質土
㊷ 黄色粘土（地山）
㊸ 淡黒褐色粘質土
㊹ 暗灰褐色砂質土
㊺ 黒褐色粘質土
㊻ 黒褐色粘土
㊼ 黒灰色粘質土
㊽ 暗茶色腐植土
㊾ 灰色粗砂
㊿ 黒褐色腐植土

第５図　断面実測図(1)



第6図　断面実測図(2)

① 耕　　土
⑩ 暗灰褐色粘質土
⑪ 淡灰褐色粘質土
㉓ 淡灰色粘質土
㊷ 黄色粘土(地山)
㊸ 淡黒褐色粘質土
㊺ 黒褐色粘質土
㊷ 暗灰色粘質土
㊸ 淡黄褐色粘質土
㊹ 明黄褐色粘質土
㊺ 黒褐色腐植土
㊻ 灰色砂
㊼ 黒褐色砂
㊽ 淡灰褐色礫混
㊾ 淡黄灰色礫混
㊿ 暗褐灰色粘質土
(61) 褐黄色粘質土

遺構は大半が耕土・暗灰褐色粘質土層下の淡黄粘土より検出された。遺構面までの層の厚さは各トレンチによって様々であり、30～60cmの範囲にある。検出された遺構には掘立柱建物・柵・土壙・溝・河川跡・ピットなどがある。このうちピットは前述の通りトレンチ幅が狭いため建物となるかどうか判然としないが、報告の建物数の倍近くの棟数が周辺に埋没しているものと考えられる。これら遺構の年代は出土遺物等から観て、古墳時代後期から近世代のものとみられる。

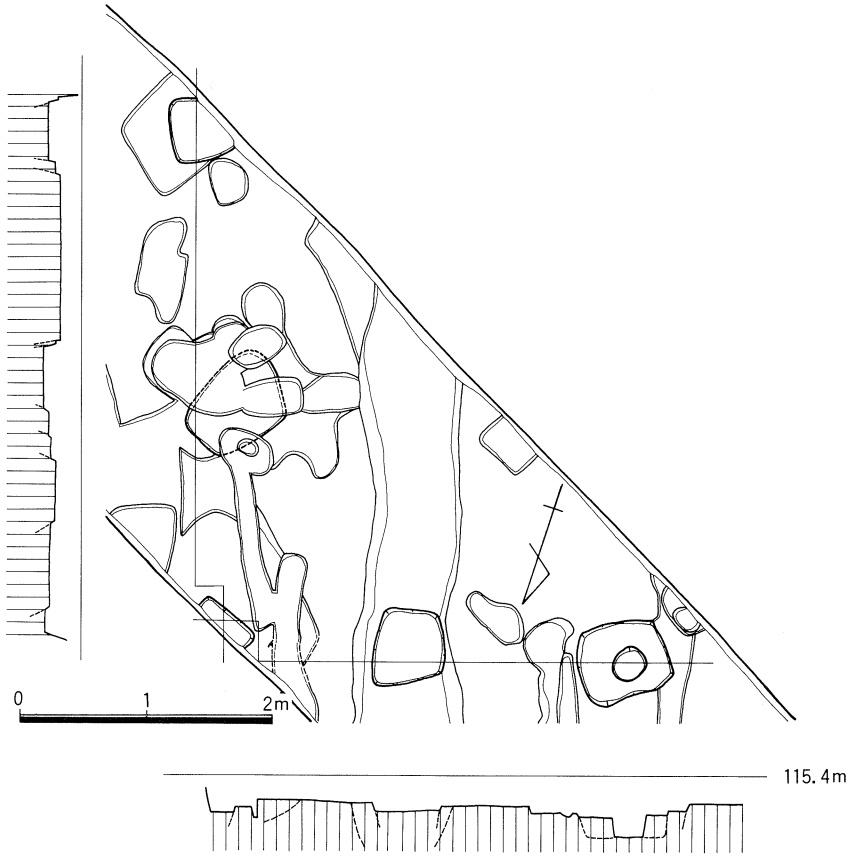
以下各トレンチごとに遺構の概要について記述しておく。

A－Ⅰトレンチ　浅い溝１条と落ち込み１が確認された。これらの遺構からは遺物が出土していないが付近の遺構面上より８世紀前半の土器が出土しており、遺構もその頃のものであろう。

A－Ⅱトレンチ　調査区の最西端に近い所に位置し、遺構が最も密集した地区である。掘立柱建物４棟・柵１列・溝５条・土壙２基・ピット群などを検出した。

ＳＢ01　トレンチのほぼ中央に位置する東西１間以上・南北１間以上の建物である。柱間寸法は東西2.45m・南北2.25mである。掘方は方形で一辺45cm前後である。柱穴は直径30cm・深さ10cm前後である。建物方位はN-12°-Wである。この建物の付近には20個以上のピットが確認されており、規模は定かでないが２棟以上の重複する建物が存在する可能性が大きい。出土遺物はない。

ＳＢ02　ＳＢ01の東約10mに位置する東西１間以上・南北１間以上の建物である。柱間寸法は東西2.25m（7.5尺）・南北2.1m（７尺）である。掘立は方形に近く、一辺45cm前後を計る。柱穴の直径は24cm・深さ18cm前後で



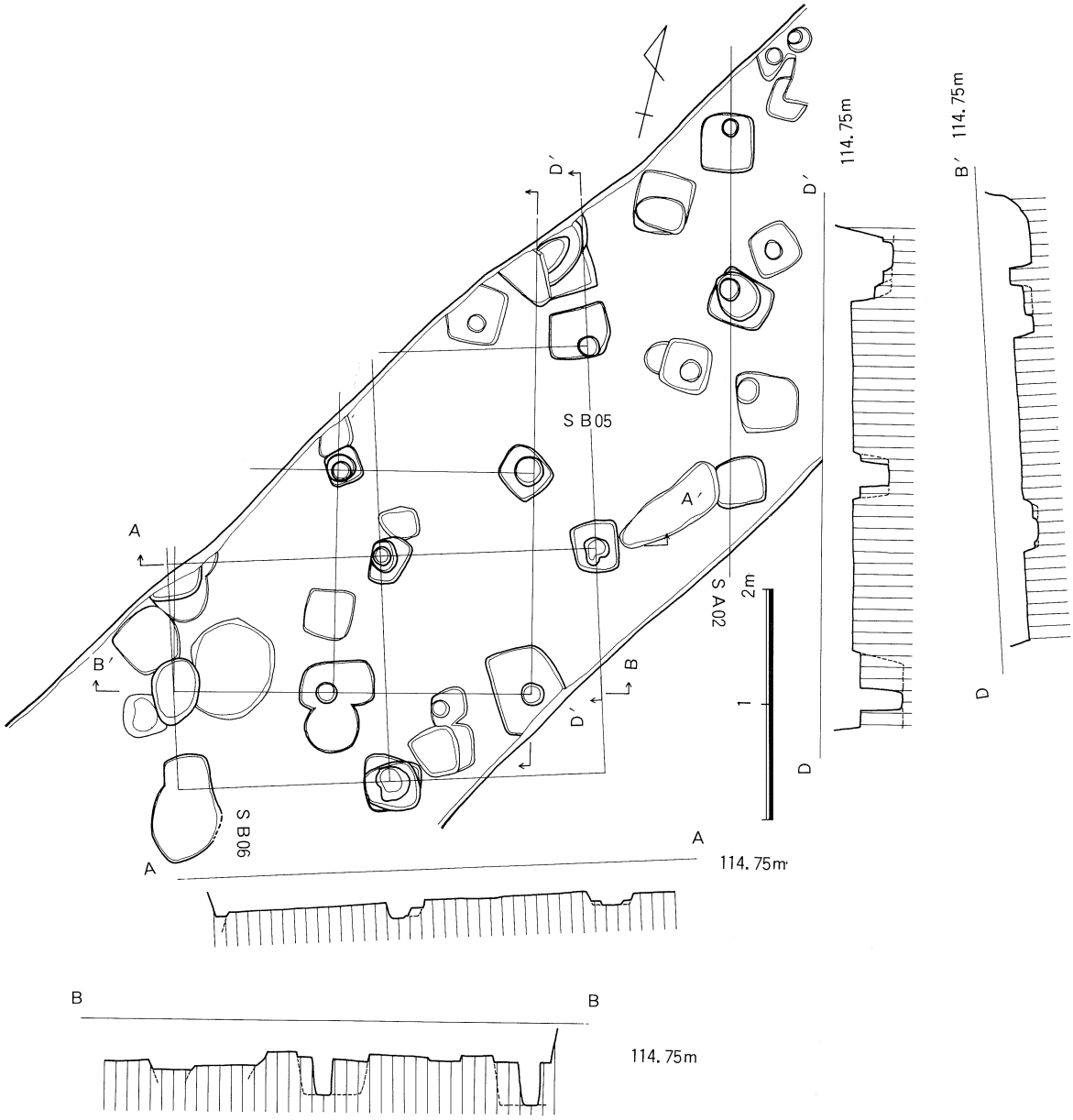
第７図　ＳＢ－４実測図

ある。方位はN-18.5°-WでＳＢ01より西に振っている。この建物の付近にもピットが密集しており、数棟の建物が重複すると考えられる。出土遺物は全くない。

ＳＢ03　ＳＢ02の東約８ｍに位置する東西１間以上・南北１間の建物である。柱間寸法は東西1.75ｍ・南北1.6ｍである。掘立は方形で、一辺40～60cmを計る。柱穴の直径20cm・深さ27～39cmである。

方位はN-36°-Wで、他の建物に比して大きく西に偏っている。出土遺物はない。

ＳＢ04　トレンチ東端に位置する東西２間（3.3ｍ＝11尺）以上・南北２間（4.1ｍ≒14尺）以上の建物である。柱間寸法は東西1.65ｍ・南北2.05ｍのほぼ等間である。掘立は方形で、一辺60～75cmと規模が大きい。柱穴は30cm前後で、深さ平均24cmを計る。方位はN-19°-Wである。本建物の中央柱でＳＤ03と切り合い、建物が後出する。本建物の東1.5ｍに雨落ち溝と考えられる細い溝が確認されており、これらから梁行２間0南北棟が推測される。



第８図　ＳＢ05，06，ＳＡ02実測図

ＳＡ01　ＳＢ03の東に位置する２間（3.5m）以上の柵である。柱間寸法は1.75m等間である。掘立は比較的大きく、方形で一辺60cmを計る。柱穴は直径20cm・深さ40cmを超す。方位はN-36.5°-WにありＳＢ03に近似する。

Ａ-Ⅲトレンチ　調査地最西端に位置するトレンチで、溝状遺構１と若干の柱穴が確認された。遺構面からは古墳時代後期の須恵器が出土しており、遺構もこの頃の所産か。

Ｂ-Ⅰトレンチ　Ａ-Ⅱトレンチの東端で北に直角に曲がるトレンチで、若干の落ち込み、溝が確認された。

Ｂ-Ⅱトレンチ　Ｂ-Ⅰトレンチの北に位置するトレンチで、遺構面は北に向って低下している。

掘立柱建物３棟・柵２列・溝４条・土壙２基・落ち込み１・多数のピットなどが確認された。

トレンチ北端の落ち込み内には焼土が若干量認められ、竪穴住居のカマド痕跡の可能性がある。

ＳＢ05　トレンチの中央部に位置する東西２間（3.25m）・南北２間（3.6m）以上の建物である。柱間寸法は東西1.5・1.7m・南北1.6・2.0mと不揃いである。掘立は方形に近く、一辺30～50m・深さ20～43cmを計る。柱穴直径は20cm前後。方位はN-15.5°-Wである。東柱を有することから総柱建物＝倉庫的建物が想定される。

ＳＢ06　ＳＢ05と重複する東西２間（3.6m）以上・南北２間（3.5m）以上の建物で、ＳＢ05と同様東柱を有する。柱間寸法は東西1.8m（６尺）・南北1.75m（約６尺）である。掘方は方形に近く、一辺45～90cm、柱穴は直径20cm・深さ12～24cmを計る。方位はN-15°-W。ＳＢ05との前後関係については切り合いがないため不明である。

ＳＡ02　ＳＤ05・06の東に位置する南比方向の柵で、２間分を検出した。柱間寸法は1.5m等間である。掘立は方形で一辺50cmを計る。柱穴は直径20cm、方位はN-14.5°-W。

ＳＡ03　ＳＡ02の東10mに位置する１間以上の柵である。柱間寸法は1.7m。掘立は方形で、一辺50cm前後、柱穴は直径25cm・深さ18cmを計る。方位はＳＡ02とほぼ同方向である。

Ｂ-Ⅲトレンチ　Ｂ-Ⅰトレンチの東に位置するトレンチで、溝状遺構１と杭跡多数を確認されたが、埋土からみて現代の構築物である。

Ｃトレンチ　Ａ-Ⅰトレンチの東部に位置するトレンチである。溝３条・土壙１基・小柱穴群などが確認された。溝は浅く10cm以下である。土壙ＳＫ02は長辺1.5m・短辺1.2mこほぼ方形で、深さ12cmを計る。遺構内からは遺物は全く出土していない。

Ｄトレンチ　最も遺構密度の低い地域で、溝３条・落ち込み１・若干のピットが確認されたのみである。溝は全て幅が細く浅いもので、中世以降の開削と考えられる。

Ｅトレンチ　河川跡の西岸をトレンチの東端で確認された。その西部は無遺構地域であった。この河川跡（ＳＲ01）の東岸はＦトレンチの西部で確認された。

ＳＲ01　流れの方向は、両岸のラインが一定していないため判然としないが、概ね南から北への流れをもっているとみられる。川幅は最大で23mを計測した。深さは下層で確認した砂層までしか調査していないため不明である。埋土は上層より暗褐色粘質土・黒褐色腐植土・砂の３層からなり、上位２層の厚さは最大で75cmを計る。遺物は全て木製品および自然遺物で、主に腐植土層と砂層上面より出土した。木製品は約10点あり、板材、棒状を呈する加工品など用途不明品からなる。

Ｆトレンチ　前述した河川伝の他に、溝27条・土壙６基以上・若干のピットなどを全域で確認された。遺構番号の付していない溝は大半が近世の水田耕作に伴う溝である。その他の遺構は大略鎌倉時代～室町時代のものと判断される。

ＳＫ04　トレンチ東半に位置する東西2.35m・南北1.5m以上・最大深34cmの隅丸方形を呈する土壙である。埋

土は褐灰色粘質土の単層からなる。底面より青磁皿が出土しており、12世紀代に穿たれたことが判る。この土壙に西隣してピットがあり、柱穴内より用途不明木製品が出土している。土壙と同時期の建物が存在する可能性がある。

Gトレンチ　調査地区の東端に位置するトレンチで、溝8条以上・土壙2基以上・多数のピットが確認された。番号を付した溝はいずれもN-30°前後-Wにある。

SD18　トレンチ中央に位置するL字形に屈曲する溝で、幅50cm・深さ17cmを計る。この溝に囲まれた所にはピットが多数確認されたが掘立柱建物を想定するピットの並びはなかった。しかしこの溝を雨落ち溝とした建物が付近に存在する可能性を指摘しておきたい。

4．遺　　物

遺物は須恵器・土師器等の土器類が大半を占め、わずかに瓦・木製品が出土している。遺物の多くはA-I～B-IIトレンチの遺構面上およびその上層の暗灰褐色粘質土層に包含されていたもので、遺構からの出土は僅少であった。

ここでは、主な遺物について概述する。

1～3・7～9・25は須恵器の蓋である。1～3は古墳時代の蓋で、天井部は高いが膨らみが少ない。

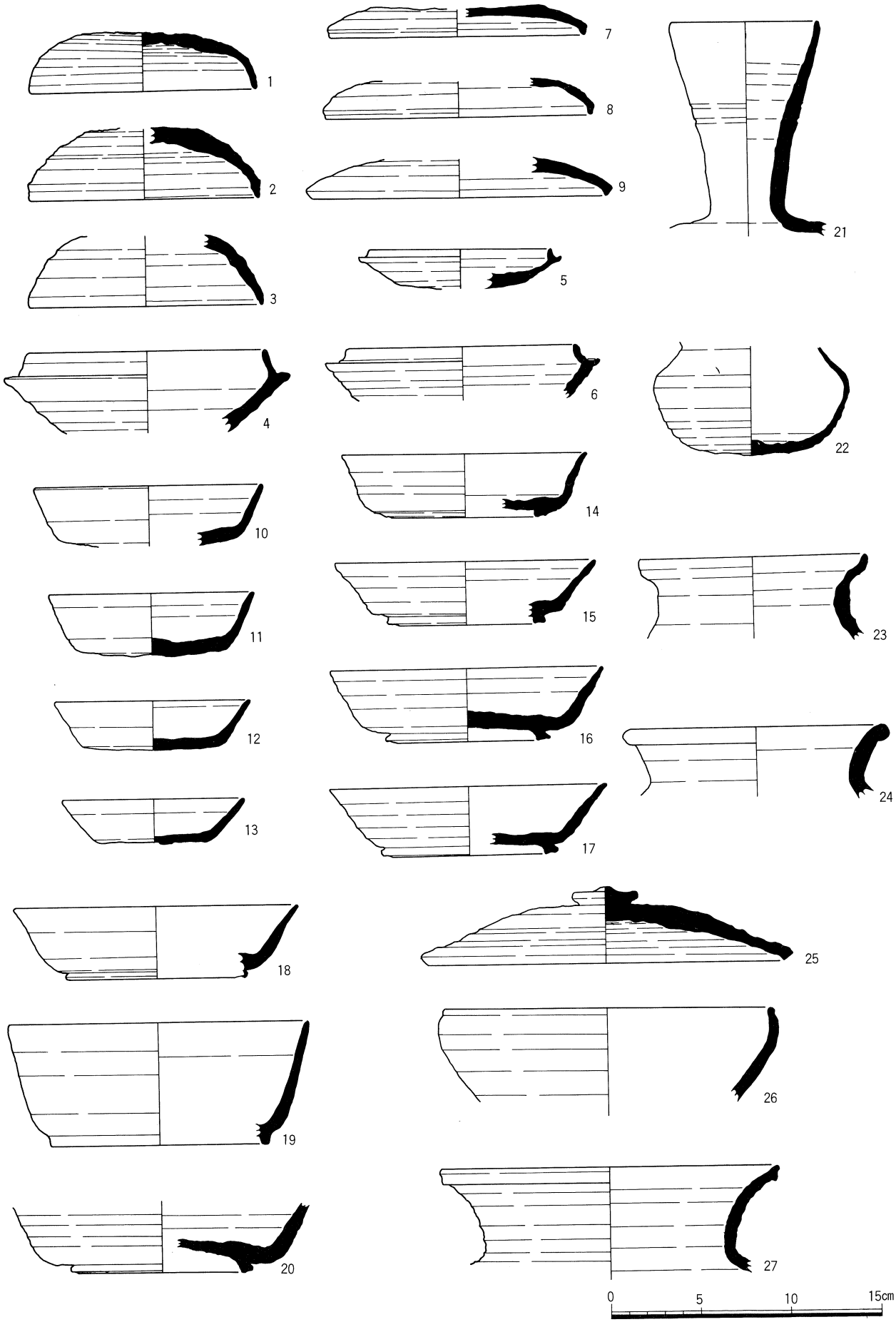
口縁部との境は不明瞭であり、口縁部は内弯気味に上方へのびる。口径は12.5～12.9cm。7～9・25は歴史時代の蓋で、天井部中央は内弯気味で、端部が内傾し下方につまみ出して断面逆三角形をなす。口径は7が14.1cm、8が14.7cm、9が16.2cmである。25は大型の蓋で、天井部は比較的高く、中央に扁平な宝珠形つまみが付く。天井部と口径部との境は不明瞭で、なだらかである。

口縁端部は垂下し断面逆三角形をなす。口径19.9cm・器高4.3cm。

4～6・10～20は須恵器の杯身である。4～6は古墳時代のかえりを有する杯身である。たちあがりは内傾し端部はまるい。たちあがりの高さは様々である。受部は水平にのびるもの(4)とやや上外方にのびるもの(5・6)がある。口径は4が13.2cm、5が12.6cm、6が11.2cmである。10～20は歴史時代の杯身である。10～13は底部が平担で体部との境は屈曲する。体部は斜め上方に直線状にのび、口縁端部をまるく収める。底部外面以外はヨコナデ調整を施す。10；口径12.6cm・器高3.5cm、11；口径11.4cm・器高3.5cm、12；口径10.0cm・器高2.5cm。14～20は高台を有する杯身である。体部から口縁部にかけて外反するもの(15・17)と丸いもの(14～16・18～20)がある。底部には下立に断面方形又はそれに近い高台の付くもの(14・15・19)と外方へ踏ん張り端面が凹面をなすもの(16・17・20)がある。底部外面はヘラ切り後未調整、他はヨコナデ調整。14；口径13.6cm・器高3.6cm、15；口径16.7cm・器高3.5cm、16；口径15.5cm・器高4.1cm、17；口径15.4cm・器高3.9cm、19；口径16.7cm・器高6.8cm。

21～24は須恵器の壺である。21は長頸壺で、やや肩の張る体部から屈曲してやや斜め外方に直線状にのびる。口縁部はたちあがり端部はまるい。口径8.0cm・残存高12.2cm。22は短頸壺とみられるもので、口縁部は欠損している。やや肩が張るが球体に近い体部をもつ。全体にヨコナデ調整を施し器壁を薄く仕上げている。最大腹径10.9cm・残存高6.1cm。23・24は広口の壺である。23は口頸部が短かく外反し、端部で内傾しながらたちあがる。24は器壁が厚く、口頸部は外反し端部は玉縁状を呈する。

26は須恵器の鉢である。外方へ直線状にのびる体部と内弯する口縁部からなる。口縁端部はやや外傾させまるい。鉄鉢型の鉢と思われる。口径18.1cm。



15. 17. 18. 25：A－1Tr遺構面上
3. 6～8. 10. 12. 13. 19. 23. 24. 26. 28：A－2遺構面上
5：A－3遺構面上
4. 9. 11. 21：B－1Tr遺構面上
14：B－2Tr遺構面上
1. 2. 16. 20. 27：CTr遺構面上
22：FTrピット

第9図　出土土器実測図

27は甕で、口頸部は外反し、たちあがる。端部近くで断面三角形の稜を有し、端部はまるい。口径18.6cm、残存高5.9cm。

28は緑釉陶器の皿で、体部中位に段を有する、いわゆる「段皿」である。口縁部は内弯気味で端部は外反して水平にのびる。底部には接地面の丸い断面逆三角状の高台がつく。口縁部はヨコナデ調整。口径11.9cm・器高1.8cm。

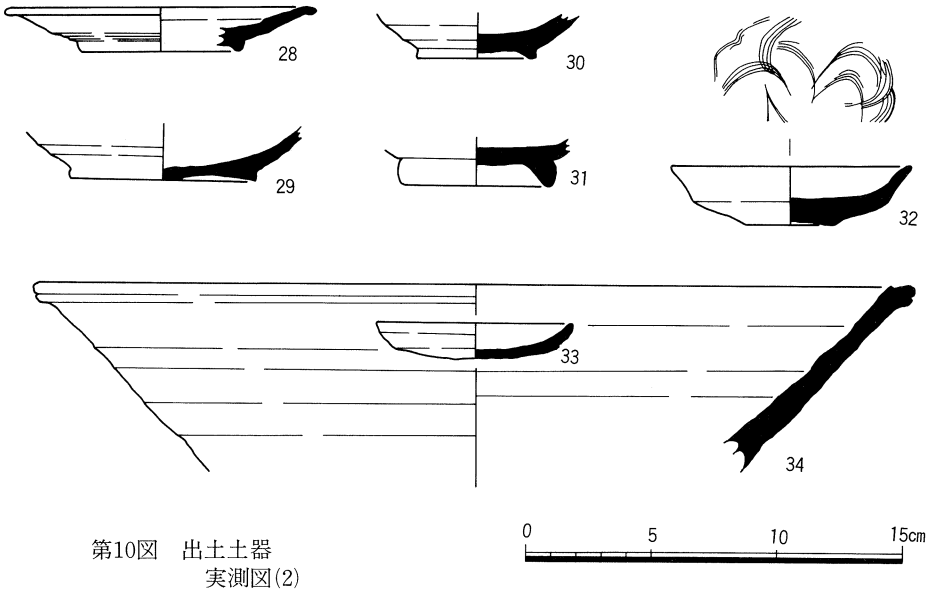
29は緑釉陶器埦である。口縁部は欠損していふ3蛇ノ目高台を有し体部は内弯する。ヨコナデ調整後、黄緑色の釉を全面に施している。胎土は硬陶である。

30・31はいずれも胎土に多くの砂粒を含む無釉陶器埦である。いずれも底部のみで、30は外方にのびる逆台形の高台で、31は接地面の丸い大きな高台をもつ。

32は青磁の皿である。底部はやや上げ底状を呈し、体部との境は明瞭である。体部中位で屈曲し、口縁部にむかって器壁を薄く仕上げている。口縁部はやや外反する。内面底部には櫛状のもので花文が描かれている。釉は底部外面以外に施されている。口径9.6cm・器高2.4cm。竜泉窯産。

33は土師器の小皿である。平底で体部はわずかに内弯する。体部には強いナデにより段をつくる。口縁端部はまるい。口径7.8cm・器高1.4cm。

34は信楽焼の擂鉢である。体部は直線状で口縁部は外方へ屈曲しわずかにのびる。口径34.8cm、残存高7.4cm。

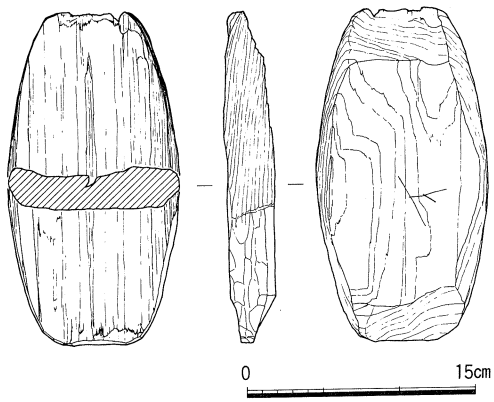


第10図　出土土器
実測図(2)

用途不明木製品（Fトレンチ P－1出土）

長楕円形に近く面取りした板材の両端木口を直線にし、さらに片面の周縁を削って舟形にととのえている。もう一面も横方向の断面がわずかに凹状を呈している。この面は加工痕が消え、擦痕がみとめられる。何かに使用された木製品と思われる。長さ22.0cm・幅11.3cm・最大厚さ3.2cm。かし材か。

これら出土土器の時期については、小片のものが多く細かく時期分類するのは不可能であるが、概ね6世紀後半代（1～6・21～24・27）・8世紀前半～中頃（7～20・25・26）・9世紀後半代（28・29）・12世紀後半代（30～33）・16世紀代（34）の土器として把えておきたい。



第11図　ピット出土木製品

5．ま　と　め

今回の調査は線的な調査であったにも関わらず比較的多くの遺構が検出された。しかし遺構内からの出土遺物が皆無に近く、その時期を考定するのは困難であった。

ここでは遺構面上や包含層の遺物分布や遺構内の埋土・規模・方位等から、敢えて各遺構の年代観について大略を把えておきたい。

まずA-II・B-IIトレンチで検出した掘立柱建物はその方位から次のとおりグルーピング出来る。

Iグループ	N-12～15°-W	SB01・05・06・07
IIグループ	N-18～19°-W	SB02・04
IIIグループ	N-36°-W	SB03

同一方位をしめす建物は、同時に併存した可能性が強いと言え、1グループは1時期を表わすと見てよい。

このうちSB05・06・07は、近辺より8世紀代の遺物が出土しており、建物の存続時期の一端を示唆するものと思われる。ただしSB05・06は重複しており、さらに時期細分が必要であるが、切り合いがなく明確にし得ない。

IIグループの建物についても周辺の遺物から観て、Iグループとさほど時期差はないと判断されるが、柱掘方・柱穴の規模がややIグループより大きく、Iグループの前段階の建物群として把えられるであろう。

IIIグループの建物については、周辺の遺物もなく時期を考定することは出来ないが、古墳時代後期の倉庫的建物の可能性がある。

これら建物群の周辺に位置する柵・溝等の中で建物と同一の方位をもつものは、ほぼ同一時期に併存したと考えてよいであろう。

また、F・Gトレンチで検出した土壙・溝・柱穴から13世紀代の遺物が出土しており、遺構に番号を付したものは、この頃を中心とする時期と把握される。河川跡SR01もこの頃には、ある程度の流れを持っていたと想像される。

以上のように河川跡SR01を境として西域では古墳時代後期・奈良時代の集落遺構群を、東域では鎌倉時代以降の集落を想起させる遺構群を確認し、各々がその一端を垣間見る事が出来た。

このうち奈良時代の集落遺構群の周辺からは、数片であるが平瓦が出土しており、南に位置する軽野塔ノ塚廃寺と少なからずも関連性があった集落が存在したことが想起される。

（北川　浩）

第２章　愛知郡秦荘町常安寺北遺跡

1．はじめに

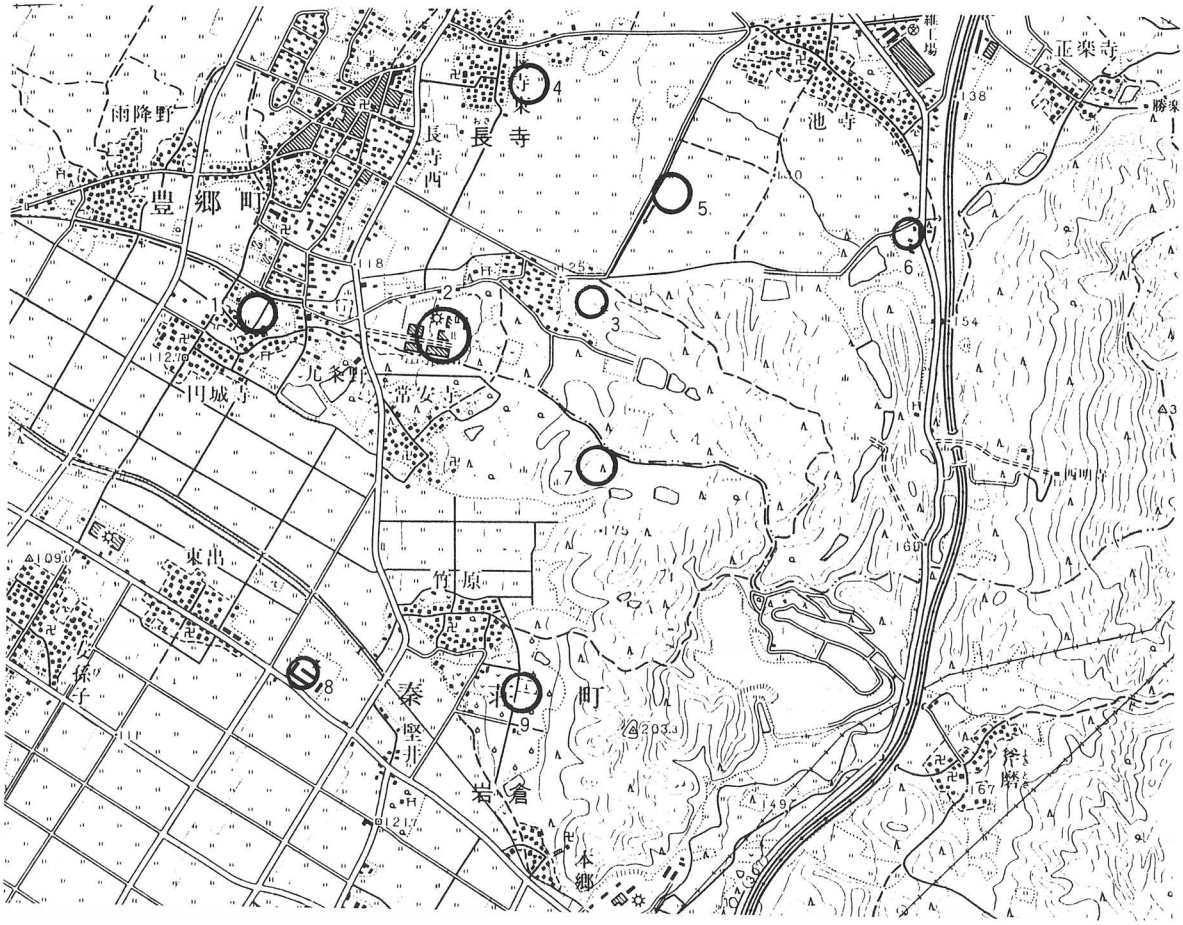
愛知郡秦荘町常安寺および同町円城寺に所在する常安寺北遺跡は、具体的位置は不明であったが、以前に石斧・石棒が採集されていたことから、弥生時代以前の集落遺跡と考えられていた。しかるに、遺跡地と思われる部分を含めて、県営ほ場整備事業が計画されるところとなり、事前に発掘調査を実施したものである。

現地調査は、宮川弘・北川浩の参加があった。

また、調査に際しては、秦荘町教育委員会をはじめ地元の方々、ほ場整備関係機関の方々には色々とお世話になった。ここに記して謝意を表したい。

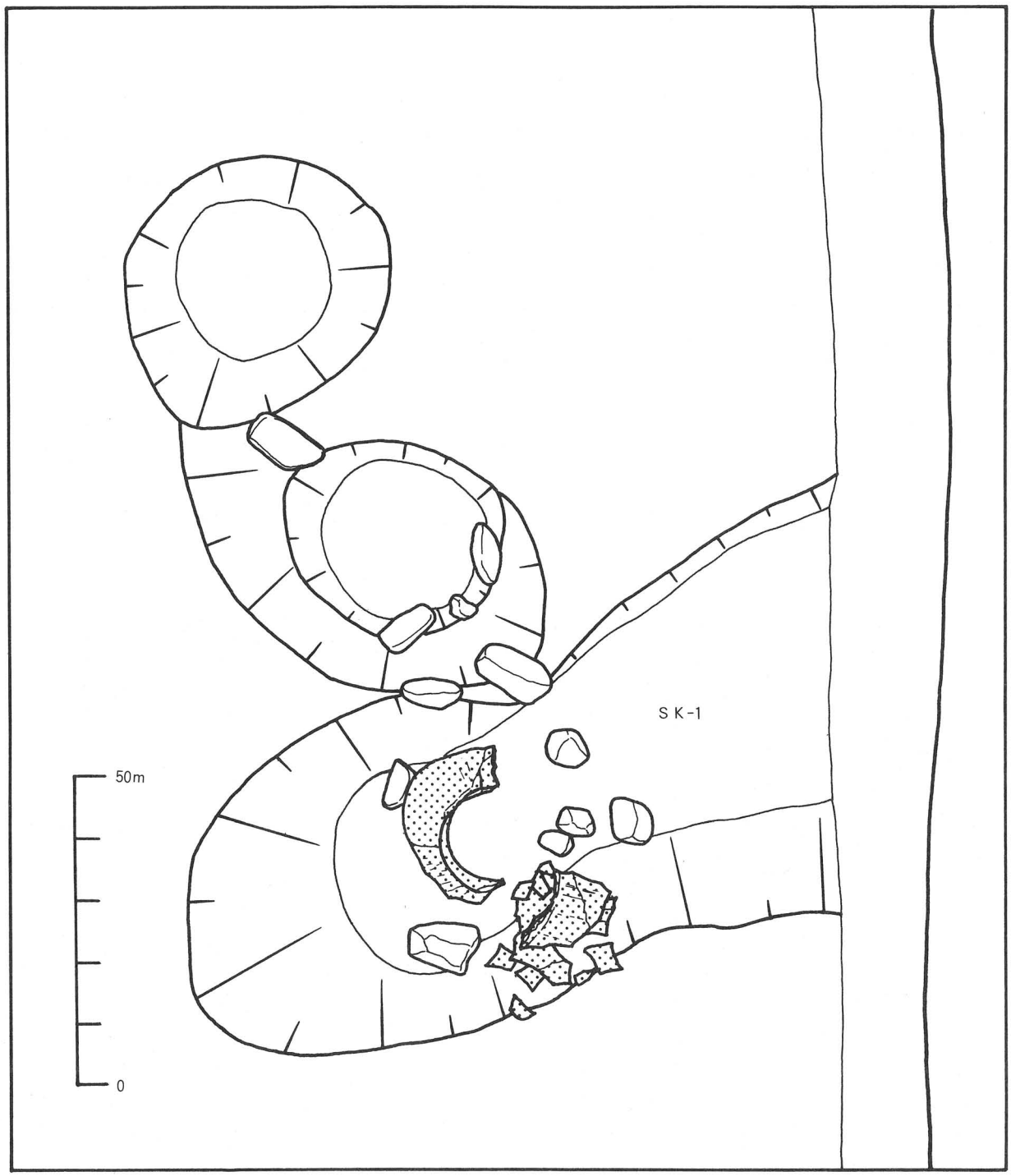
2．位置と環境

常安寺北遺跡は、鈴鹿山系である標高474mの八尾山から西へ舌状にのびた微高地先端に立地し、標高は120m前後にある。



1　常安東北遺跡　　4　長糸遺跡　　7　高山窯跡
2　九条野古墳群　　5　四ツ塚古墳群　　8　東出遺跡
3　西ヶ丘古墳群　　6　長道古墳群　　9　竹原古墳

第1図　位　置　図



第２図　遺物出土状況図

当該遺跡は秦荘町大字常安寺集落北側から、その西に所在する同町大字円城寺集落にまたがる所に位置し、北は甲良町との町境となる小河川が流れている。

遺跡は東の九条野から延びる微高地上に立地し、その九条野には新幹線の土取り工事に際し確認された粘土槨を主体部に持つ前期古墳があった。この他二子塚古墳や西ヶ丘古墳群と数基の古墳が残されている。また南西の竹原古墳や、北西の甲良町四ツ塚古墳、長道古墳群など、横穴式石室を主体とする後期古墳も多く見られる。さらに常安寺集落の東には７世紀後半の高坪古窯も、近年明らかにされた。

3．遺　　構

検出した遺構は、大半が近世の遺構で、僅かにＡトレンチ拡張部より古墳時代後期の小土壙があった。

以下順を追って各トレンチの報告を行う。

Ａトレンチ　基本土層は、耕土層・砂礫層で、遺構面は砂礫層上面である。遺構は、中央部に設定した拡張部とその南で小土壙を13個確認した。その規模は大半が径30～60cmの円形で、深さ５～22cmを計る。これらの遺構は埋土によって３分類され、黄褐色粘質土、黒色粘質土がある。黒色粘質土以外の埋土をもつ遺構は、杉苗の植栽に伴う掘り込み穴と考えられるものである。黒色粘質土の埋土をもつ小土壙は７基あり、うち拡張部で検出した１基（ＳＫ１）からは古墳時代後期の遺物を包含しており、他のものも一連の土壙と推測される。

ＳＫ１　東西に長い遺構で、西側に最深部がある。東西1.3m以上・南北0.55m・深さ22cmを計る。遺物は、上層で須恵器杯蓋２点・高杯１点、下層で甕１点が出土した。このうち甕は、二次的に火を受けたために表面が剥離してあるが壙内での火の使用は認められない。

Ｂトレンチ　耕土直下は砂礫層となっており遺構は全く検出されなかった。

Ｃトレンチ　耕土直下は、耕土層・灰褐色粘質土層・砂礫層であり、第２層上面より溝１条・土壙１基・落ち込み１を確認した。しかし、第２層内には、江戸時代後期の染付埦や瓦を包含しており、遺構はそれ以降のものと判断される。落ち込み内からは、流入遺物と思われる須恵器の短頸壺が完形で出土した。砂礫層上面からは遺構の検出はみなかった。

Ｄトレンチ　この付近は現況は茶畑であったが、昭和初期まで火葬場であった地で、東端で焼灰の堆積、中部で径35～90cmの円形土壙が認められ、土中より火葬骨が多く出土した。この他、土壙からは、鉄製包丁・釘が出土した。

Ｅトレンチ　基本土層は、耕土層、黄褐色粘質土層・砂礫層であり、各面共遺構は検出されなかった。

4．遺　　物

出土遺物は、Ａトレンチ拡張部土壙ＳＫ１内とＣトレンチ落ち込みの須恵器などがある。

ＳＫ１内出土遺物　須恵器の杯蓋２点（1・2）・高杯１点（３）・甕１点があった。

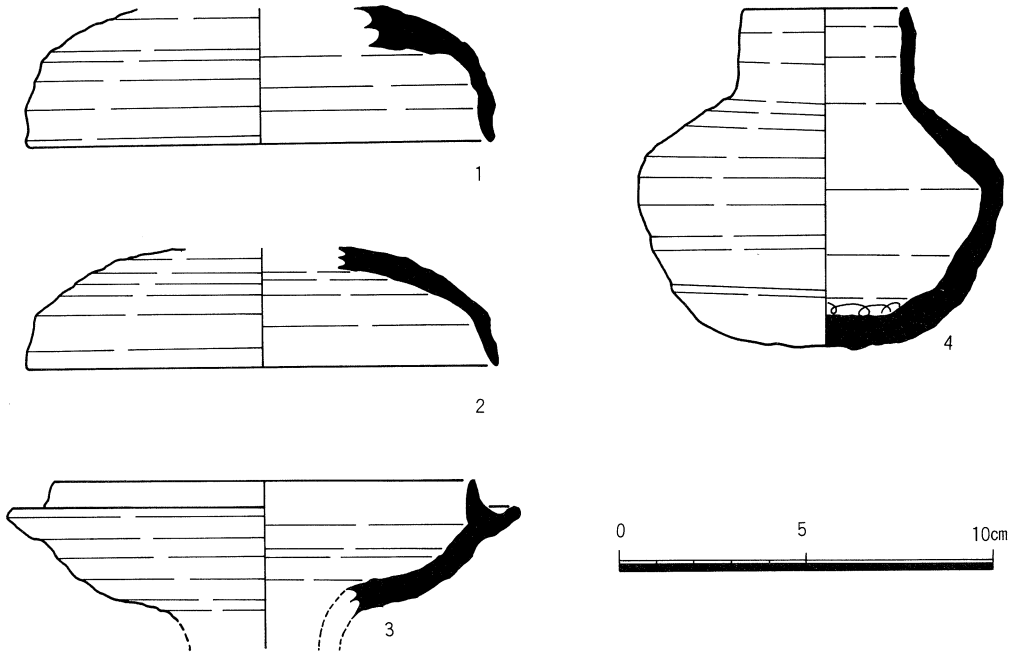
１は、天井部が平坦で天井部と口縁部との境は丸味をもち、口縁部はやや外反し端部は丸い。天井部外面はヘラ切りのままで、他はヨコナデ調整。口径12.2cm、残存高3.6cm。

２は、全体に薄手の蓋である。天井部が１より低くやや膨らみをもち、端部は尖り気味である。口径12.4cm・残存高3.1cm。

３は、有蓋高杯で、杯部は欠損している。底部は内弯し、たちあがりはほぼ直立し端部は丸い。受部はやや上外方にのび端部は丸い。口径11.0cm、現存高3.7cm。

甕は図示しなかったが、肩が比較的丸く口縁部がやや外上方に直線状にのびるものである。口縁内端に段を有する。体部外面は平行タタキ、内面は同心円状タタキを施す。口縁部はヨコナデ調整。外面は二次的に火を受けたため黒化しており、体部表面の一部が剥離している。

Ｃトレンチ落ち込み内出土遺物　須恵器短頸壺の完形１点（４）がある。肩の張る体部と直立する口頸部をも



第３図　出土土器実測図

つ。底部は丸味をもつ。口縁部はわずかに内傾し端部は尖る。底部は外面未調整、内面は竹管状のタタキを施す。他はヨコナデ調整。口径4.4cm、器高9.1cm。

以上の遺物は、陶邑古窯址群のＴＫ209型式（註１）のもので６世紀末頃に比定できる。

５．ま　と　め

今回の調査では、古墳時代後期の遺構を僅かに認めたが、この遺構群が如何なる性格を有するものか明確にし得なかった。また、従来、石棒・石斧の採集によって遺跡の存在が予想されていたのであるが、この遺物と直接関連するものは何一つ確認されなかった。ただ、今回の調査が線的な調査であったため、遺跡の存在の有無については、言及し得ない。

今後の綿密な調査に期待したいものである。

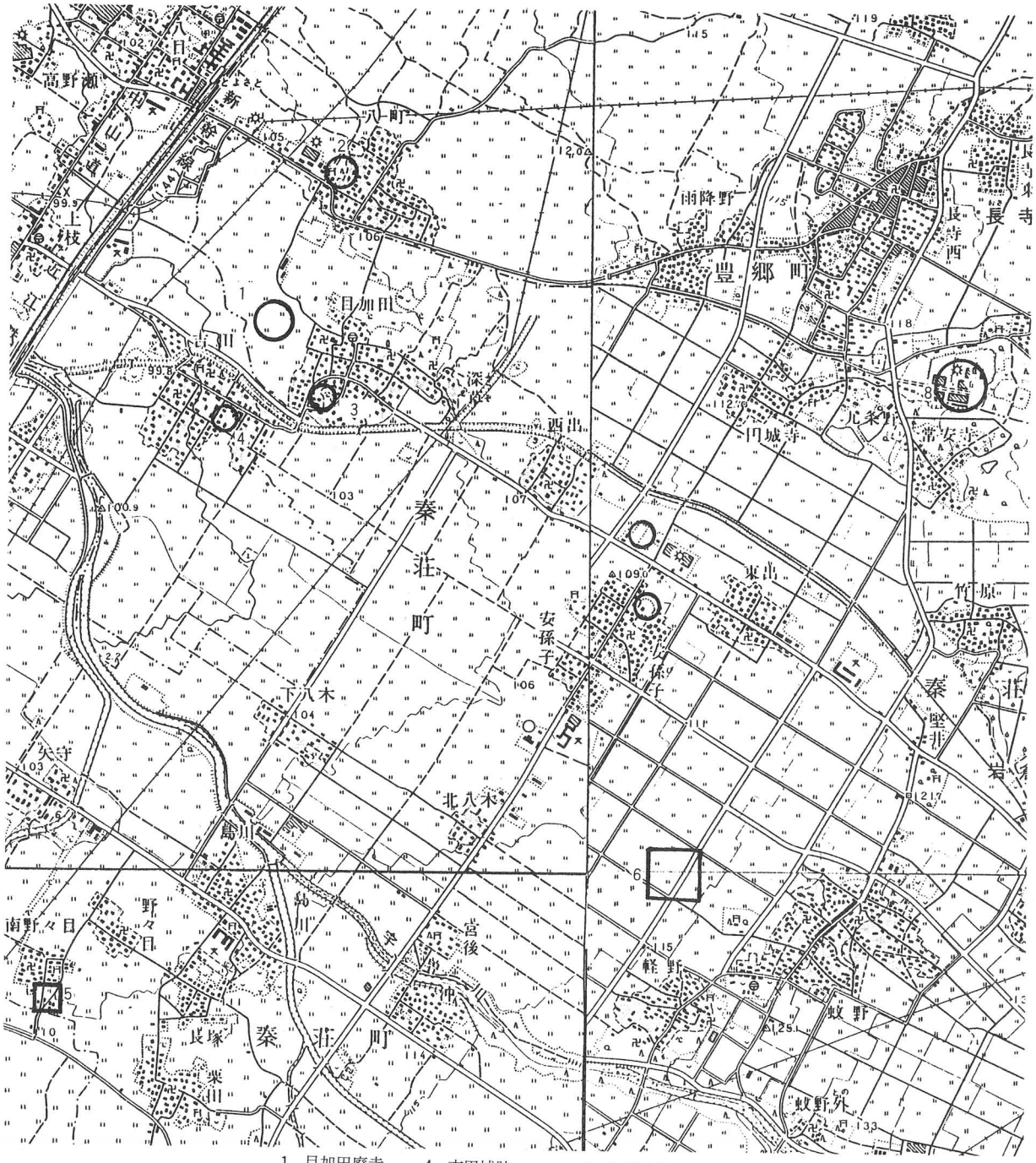
（北川　浩）

註１．田辺昭三『陶邑古窯址群Ｉ』（平安学園考古学クラブ　1966年）

第３章　愛知郡秦荘町目加田廃寺

1．はじめに

秦荘町目加田工区として実施された県営ほ場整備に先き立ち実施した調査である。調査前の目加田廃寺は、その具体的な所在地、遺存状況等については、他の湖東での寺跡同様、古く瓦が採集されただけであって不明であった。このため、計画段階での調査では、まず瓦の散布状況と、地名、地割等を検討した結果、小字「竹之尻」の一部に「金堂」の孫字があったこと、この地が微高地で、かつ１町四方ばかりの南北地割がとれそうであること、大字目加田から八町への道の北方向への曲り付近の農道上に、耕作時に取り上げられた瓦片が集中している



1　目加田廃寺
2　八町城跡
3　目加田城跡
4　吉田城跡
5　野々目廃寺
6　軽野塔城廃寺
7　安孫子城跡
8　九条野古墳群

第１図　位　置　図

こと、などから、結果として小字「竹之尻」地区において、遺構の遺存状況、範囲等を明確にすることを目的として調査を実施することとした。なお当寺跡は古くに採集された瓦片より飛鳥時代院跡と位置付けされていた。

2．位置と環境

愛知郡秦荘町目加田の地は犬上郡に接すると言うか、その北の豊郷町八町と西に接する豊郷町吉田の間に突出する形で位置しており、東の愛知、犬上両郡の郡界を形成する九条野山に続く微高地の西端に当る。地名の目加田は、中世に佐々木六角氏の被官として活躍した氏族名で、京極氏との最前線近くを守備していた。ところで付近の古代遺跡としては、先の東2.5kmの九条野に、径30m近くで粘土槨の主体部を持つ、古墳時代前期の九条野古墳群がある。しかし、これに続く時代の遺跡はなく、次には北１kmの石畑古墳、宇曽川の対岸にあって、式内石部神社の北に所在する円墳１基等後期の単独墳、そして2.5km南西の愛知川町長野の郡衙推定地、南東約３kmの軽野塔ノ塚廃寺と、むしろ古代史的には一種、エアーポケットのような地にある。この意見では白鳳時代の寺跡が突然出現してくるような感があり、今回の調査に期待がかかった。

（近藤　滋）

3．遺　　構

支線排水路97号・98号予定地に幅約４mのトレンチを設定し、それぞれ水路②トレンチ・水路①トレンチとした。

水路①トレンチ中央付近で竪穴住居跡・ピット群等を検出したため、北へトレンチを拡張し、北拡張区１・２とした。

水路②トレンチの北端で瓦片を埋土中に含む東西方向の溝跡を検出したため、当トレンチの東側にこれに並行するトレンチを設定した。（北拡張区３）

水路①トレンチの南方に存する南北方位の農道の両側に第１～６トレンチを設定し、そのうちの遺構の集中する第５トレンチを西へ拡張して調査した。（南拡張区）

(1)　水路②トレンチ

支線排水路97号予定地の北端から南へ幅約４m、長さ約110mのトレンチを設定し、北から10m毎に１～12区とした。

基本土層は、

１．褐灰色粘質土層　（耕土）

２．暗茶黒色粘質土層（床土）

３．黒褐色混礫粘質土層

４．茶黒色混礫粘質土層

５．暗褐灰色混礫彩質土（ベース）

で、第５層を溝跡・倒風木痕が切り込んでいる。

ＳＤ－１　当トレンチ北端から約15mの地点で、肩幅約5.8m、深さ約１mの溝跡を検出した。溝の両肩はゆるやかで、底は平坦である。底の南側に砂礫が堆積し、埋土中から重孤文軒平瓦・単弁蓮華文軒丸瓦等が出土して

いる。

ＳＤ-１はほぼ東西の方位を示すが、北拡張区３では検出しなかった。

１～３区においては倒風木痕跡が２個所、ＳＤ-１の北と南でみつかっているが、それ以外の遺構は検出していない。

ＳＤ-２　４区において、方形周溝墓のコーナー部と思われる遺構を検出した。当トレンチを東南隅の陸橋部として、溝が北西と北東方向へ伸びると推定され、２つの溝の両北肩部が直交する方位を示し直線的に伸びる。対辺を探るべく２～３区を掘り下げた結果ＳＤ-１を検出した。ＳＤ-１の掘開で消滅したと思われる。

西側の溝跡は、幅約1.5m、深さ50cmあり、埋土中より弥生土器の壺底部が出土している。

ＳＤ-３　７区で検出した、東南―北西の方位を示す溝跡。現存の幅約60cm、深さは東南部５cm、北西部10cmである。

ＳＤ-４　８区で検出した、当トレンチに直交する方位を示す溝跡で、溝幅約50cm、深さは10cm程度である。西セクションに至らず、途中で消失する。

ＳＤ-５　８・９区で検出した自然水路で、埋土中に縄文時代晩期から平安時代にかけての遺物を包含する。

８区はＳＤ-４・ピット群等の遺構面から約70cmの段差をなし、低段位の部分をＳＤ-５が東から西へ流れる。ＳＤ-５はこの段差の斜面を北肩部として流れるが、埋土の堆積状況から大きく３時期に分かれる。

①最下層は灰褐色砂礫層を南肩として流れ、底に暗青灰色粘質土層が堆積する。この層に縄文時代晩期の遺物が包含される。

②南肩の砂礫層に灰白色砂礫層が、北肩には褐灰色混礫粘質土層が堆積し、これらを両肩として流れが存し、黒灰色砂礫層が堆積する（中層）。北肩部の埋土中には縄文土器が含まれるが、中層中には布目瓦が包含される。

③中層が埋まった後、灰褐色混礫粘質土を南肩として暗褐茶色混礫粘質土層が堆積する（上層）。上層中には灰釉椀や土師器灯明皿等の遺物が含まれるが、北肩付近からは縄文晩期土器も出土してくる。

３時期とも溝幅は4.5m、深さは50cm程度で、上層上面から最下層底までの約90cmである。

ＳＤ-６　10区において検出した溝跡で、当トレンチに直交する方位を示すが、東壁までに消滅する。溝幅0.9m、深さは10cm程度しか残らない。

ＳＥ-１　当トレンチの北端、１区の北壁で検出した井戸跡。直径約1.2mの円形プランの掘り方に20cm大の石を組んで壁としている。

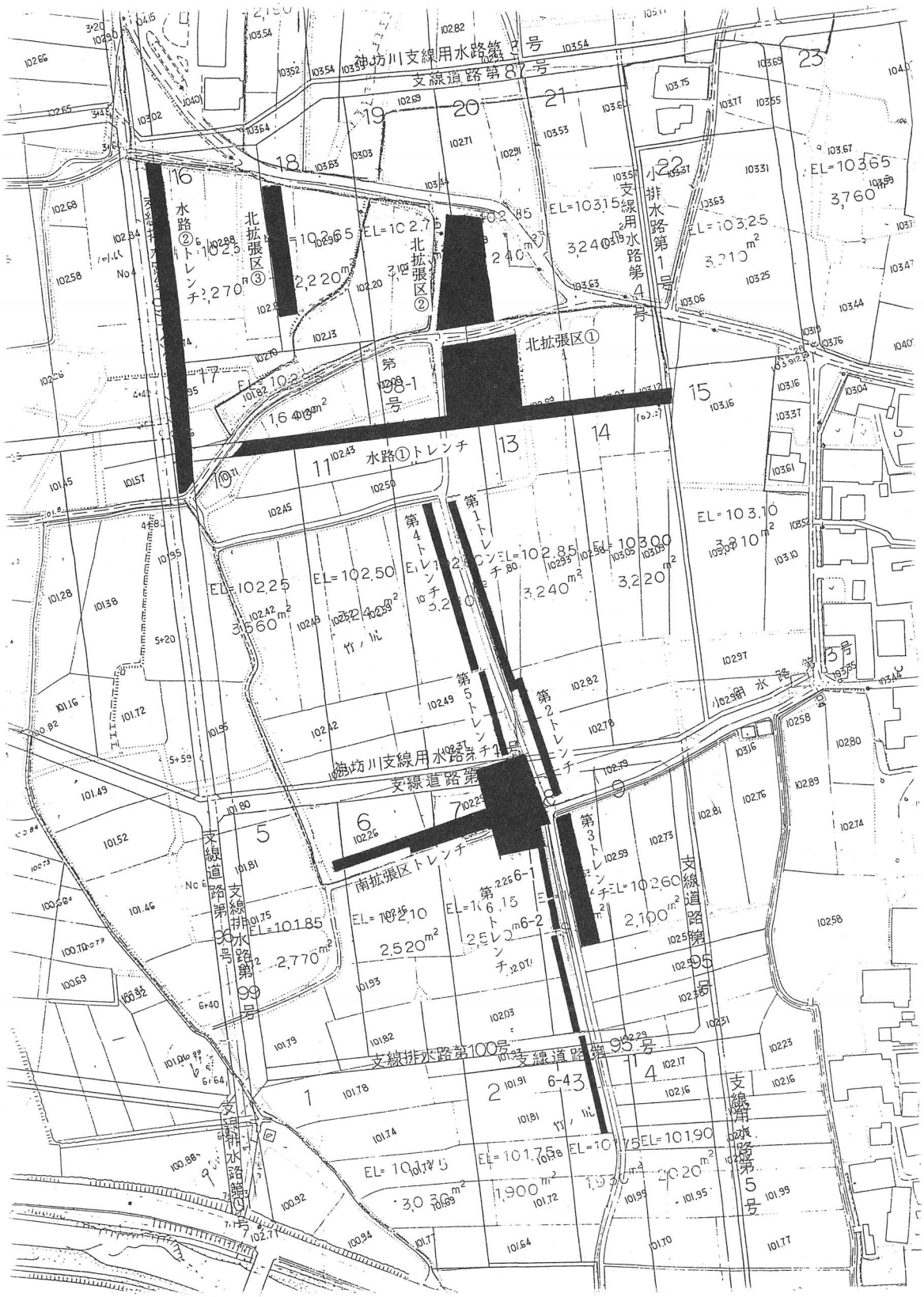
ＳＥ-２　当トレンチの南端、12区の南壁で検出した井戸跡。直径約2.1mの掘り方に青灰色粘土が貼られ、その内部は直径約1.2mの楕円形プランを呈する。おそらく木枠組みの井戸跡と思われるが、痕跡は認められなかった。内部の埋土は上層が暗褐黒色粘質土、下層が礫層であった。

※これら２基の井戸跡は耕土直下で検出されており、近世から現代まで存続したと思われる。

ＳＫ-１　７区で検出した長方形プランの土壙状遺構で、長辺約1.5m、短辺約0.5m、深さは約15cmを測るが、南隅のみ１段浅くなっており、この部分で測ると長辺は1.3mである。ほぼ南北方位を示す。

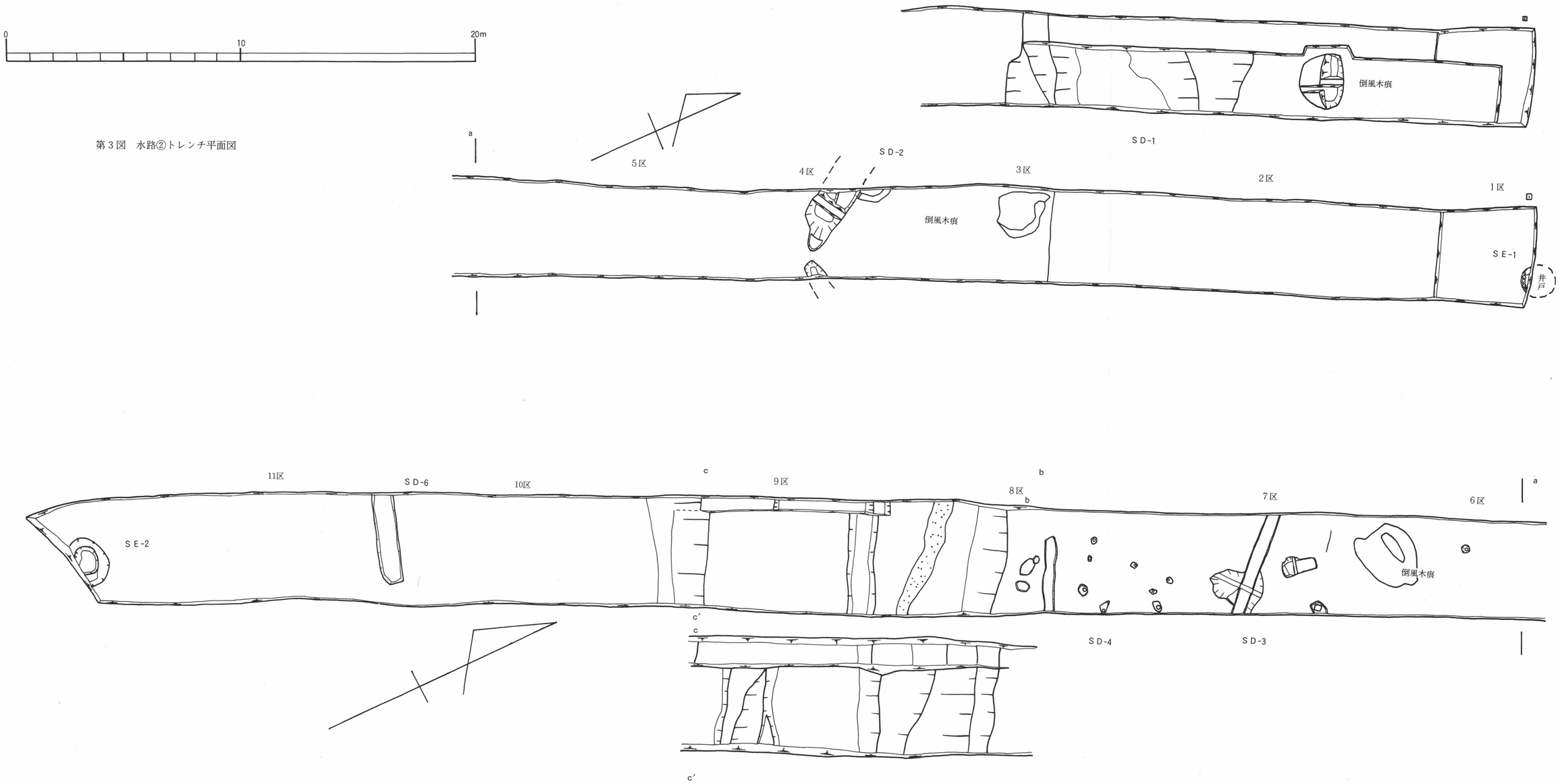
ピット群　６～８区にかけて、ピット群が点在するが、建物の構造は不明である。掘り方径は大きいもので30cm、小さいもので20cm程度柱痕径は15cm内外である。全体に浅く、柱痕のみのものもあり、かなり削平されて消失しているようである（堀土は全て暗褐黒色粘質土）。

７区東壁付近で、掘り方一辺50～70m、柱痕一辺30cmの大きなピットを検出した。埋土は暗茶褐色粘質土で、他のピット群の埋土とは異なる。当トレンチの東方へ向けて建物が建つと思われ、詳細は不明である。但し、約

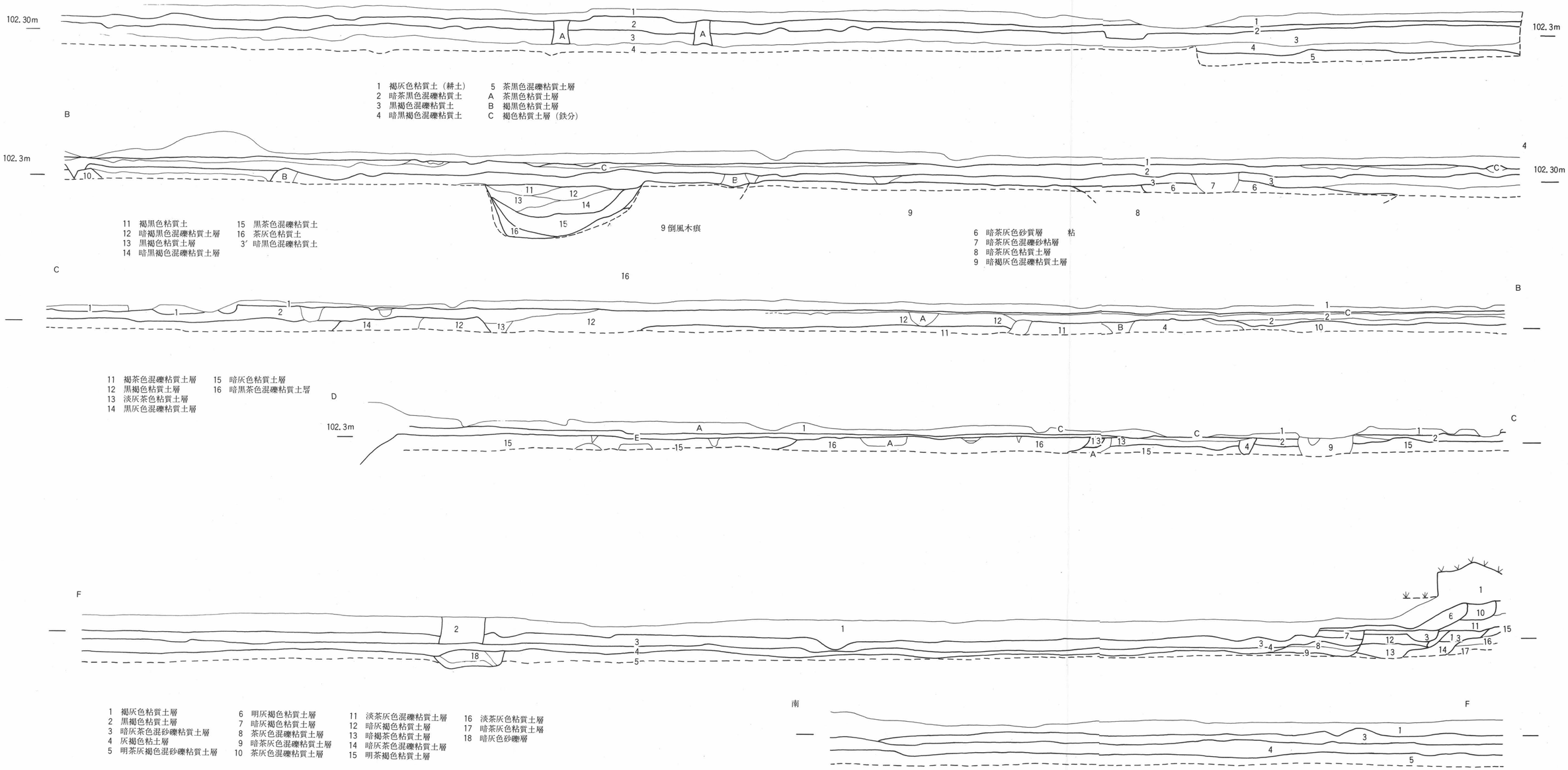


神坊川支線用水路第3号
支線道路第87号
水路②トレンチ
北拡張区③
北拡張区②
北拡張区①
水路①トレンチ
第1トレンチ
第2トレンチ
第3トレンチ
第4トレンチ
第5トレンチ
南拡張区トレンチ
支線道路第95号
支線道路第96号
支線排水路第99号
支線排水路第100号
支線道路第95号
支線排水路第5号
小排水路第1号

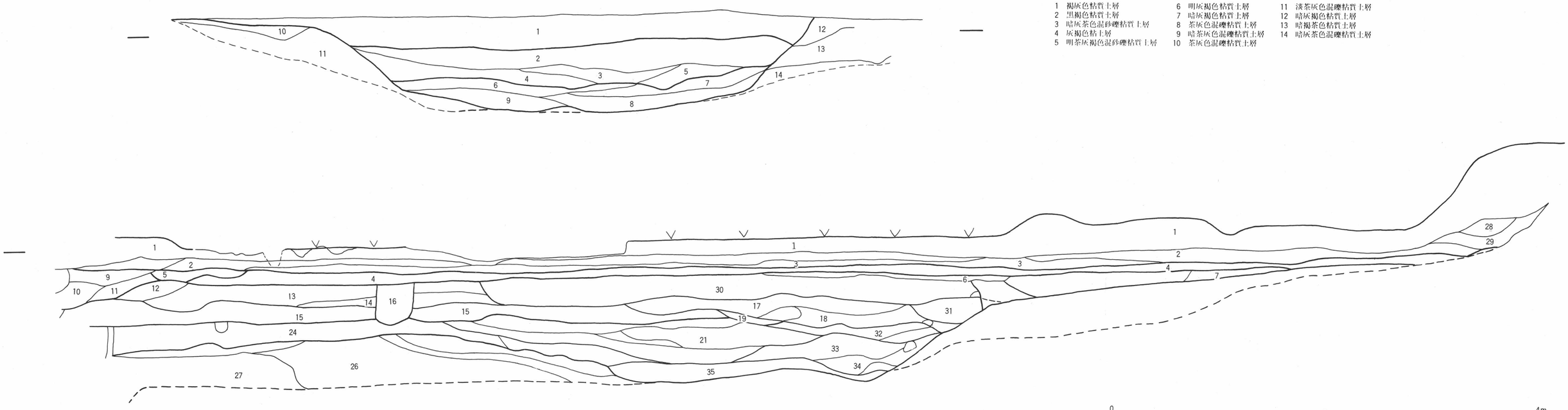
第２図　トレンチ配置図



第３図　水路②トレンチ平面図



第４図　水路２・トレンチ配置図



1　褐灰色粘質土層
2　黒褐色粘質土層
3　暗灰茶色混砂礫粘質土層
4　灰褐色粘土層
5　明茶灰褐色混砂礫粘質土層
6　明灰褐色粘質土層
7　暗灰褐色粘質土層
8　茶灰色混礫粘質土層
9　暗茶灰色混礫粘質土層
10　茶灰色混礫粘質土層
11　淡茶灰色混礫粘質土層
12　暗灰褐色粘質土層
13　暗褐茶色粘質土層
14　暗灰茶色混礫粘質土層

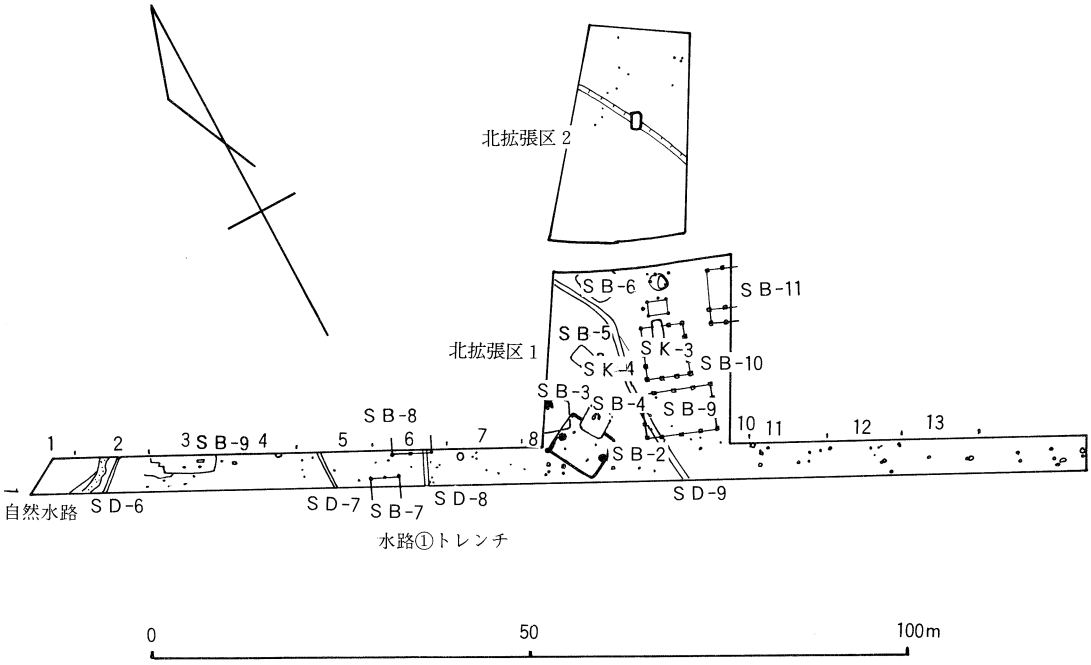
1　淡褐灰色混礫粘質土（礫わずか、0.5～2cm大）
2　褐灰色混礫粘質土（礫わずか）　耕土
3　暗灰色混礫粘質土（礫わずか）
4　黄褐灰色混礫粘質土（礫多し、0.5～2cm大）床土
5　暗灰褐色粘質土
6　暗黄褐色粘質土
7　明黄褐色粘質土
8　褐灰色粘土
9　暗灰色混礫粘質土（礫まばら、1～5cm大）
10　暗灰色混礫粘質土（礫多し）
11　暗褐灰色粘質土
12　礫　　層
13　茶黒色混礫粘質土（0.5～3cm大）
14　淡黒色混礫粘質土（0.5～3cm大）
15　灰褐色粘質土
16　暗茶黒色粘質土
17　暗茶褐色混礫粘質土（0.5～2cm）
18　暗黒茶色混礫粘質土（礫多し、0.5～2cm大）
19　灰褐色混礫粘質土（0.5～1cm大）
20　暗灰茶色粘質土
21　黒灰色砂礫層（礫密、0.5―1cm大）
22　灰茶色砂質土
23　淡黒灰色砂礫層（0.2～0.5cm大）
24　暗灰白色砂粘層
25　暗灰褐色砂粘層
26　暗灰褐色礫層（0.5～1，2～5cm大）
27　暗黄褐色粘質土
28　淡褐灰色混礫粘質土(やや暗い)(礫わずか、0.5～2cm大)
29　淡褐灰色混礫粘質土(白味かかる)(礫わずか、0.5～2cm大)
30　暗褐茶色粘質土（混礫、0.5～2cm、たまに5cm大）
31　暗茶色粘質土
32　暗褐灰色粘質土
33　暗褐灰色混礫粘質土（礫、2～3cm大）
34　明褐灰色砂質土
35　暗青灰色粘質土

0　2　4m

第５図　水路②ＳＡ１(上)，ＳＡ５(下)西壁断面図

30m東方の北拡張トレンチ3ではピット群を検出していない。

(1) 水路①トレンチ・北拡張区1



第6図　水路①トレンチ概略図

支線排水路98号予定域を調査した。水路②トレンチ南端から掘り始める予定であったが、現農道がまだ使われていたため、この農道の東側から東へ1区から14区まで、総延長約140m、幅約5mのトレンチを設定した。

現地表面の標高は、1～2区が101.7m、2区～10区が102.4m、11区以東が103.0mと東へ行くほど高くなっている。

基本土層は、

1．耕土・床土　　(約30cm)

2．暗茶褐色粘質土層　　(約30cm)

3．明黄褐色混礫粘質土層

第3層が遺構面であるが、2～7区では第2層が薄く、12区以東では第2層にかわって暗灰茶色粘質土層となる。

自然水路　当トレンチ西端部は、地表面が周辺部より約70cm低く、2区から西の農道に向けて落ち込みがみられる。埋土は暗茶灰色粘土で、その下は礫層である。この埋土中から、布目瓦・塼及び土器片が出土している。

現地表が現農道に沿って一段下がっていること、はっきりした落ち込みの肩部がないこと、溝幅が広く底に砂が一様に堆積すること等から、北から南へ流れる自然水路が存したと推定される。

SD-6　自然水路の東隣で、北東―南西方位の溝跡を検出した。これは旧畦畔に沿うかたちで検出し、埋土も青灰色粘土のため、現代まで存続した溝跡と思われる。

SD-7　5区で検出した溝跡で、ほぼ南北の方位を示し、幅約0.4m、深さは15cm程度である。

SD-8　6区で検出した溝跡で、当トレンチに直交する方位を示す。幅約0.7m、深さは約60cmで、埋土中より布目瓦片・土器片等が出土している。

ＳＤ－９　当トレンチ10区から北方向へまっすぐに伸び、北拡張区１のＳＢ-5・ＳＫ－４を東へ迂回するようにまわりこみながらさらに北へ続く溝跡。溝幅は約50cmで、埋土中から７世紀前半の須恵器杯身が出土している。ＳＤ－９はＳＢ－７のピットに切られている。

ＳＢ－１　３区で検出した竪穴住居跡であるが、北半分はトレンチ外にあり、西壁は撹乱により削平されているため、規模は不明。深さは約30cmを測り、中央床面東寄りに炉跡らしき焼土壙が存する。深さ約５cmで、壁が焼けている。

埋土中から立ち上がりの短い須恵器杯身が出土しており、およそ６世紀末頃の住居跡と思われる。又西壁付近で、ＳＢ－５上層出土の灰釉椀の破片が出土しており、この時期に撹乱を受けたと推定できる。ＳＢ－１の埋土は暗褐茶色粘質土である。

※ＳＢ－１の東側に深さ約40cmのピットが存するが、埋土中より布耳瓦片・土器片が出土している。

ＳＢ－２　８区で検出した竪穴住居跡で、規模は西壁で約6.6mある。西壁の方位はおよそN-30°-Wを示す。４本主柱で、北•南壁中央に貯蔵穴を備え、壁溝がめぐるが、東壁のＳＤ－４に削られた箇所は残っていない。屋内に炉・カマドの痕跡はなく、ＳＤ－４に切られて消滅した可能性がある。埋土は暗褐茶色粘質土（＝ＳＢ－１）で、深さは10cm程度残る。４本主柱掘り方、貯蔵穴から６世紀中頃の須恵器が出土しており、この時期の住居跡と思われる。

ＳＢ－３　北壁中央部に造り付けカマドを備える竪穴住居跡で、東南隅をＳＤ－２に切られ、西壁がトレンチ外に出るため、規模は不明である。

柱穴・壁溝はないようである。

ＳＢ－４　ＳＢ－２の東壁を切り込んで造られる竪穴住居跡であるが、中央部あるいは東壁付近に造り付けカマドを備える以外は不明である。

ＳＢ－５・６　ＳＢ－２～４の北東に２基の竪穴住居跡が存するが、規模時期は不明である。但だＳＤ－９がＳＢ－５を避けて流れていることからＳＢ－５とＳＤ－９は同時期の存続と考えられる。又、ＳＢ－６は弥生時代後期から古墳時代前期の遺物を含む。

ＳＢ－７　６区の南セクションに沿って３本のピットが並ぶ。柱間は3.6m（一間1.8m）で、南方へ２間×数間の建物跡が存したと思われる。

ＳＢ－８　６区の北セクションに沿って３本のピットが並ぶ。柱間は5.0m（一間2.5m）で、北方へＳＢ－７と同方位の２間×数間の建物跡が存したと思われる。

ＳＢ－９　ＳＢ－２～４の東方に３×４間の掘立柱建物跡が存する。このうちの一柱穴がＳＤ－９を切り、７世紀前半以降のものである。梁間の方位はおよそN-22°-Eを示す。

ＳＢ-10　ＳＢ－９の北側に隣接する３×４間の掘立柱建物跡で、ＳＢ－９とは方位を同じくするが、桁行と梁間の方位が逆である。掘り方は約30cmを一辺とする方形プラン。

※ＳＢ-10の北側に１×１間の掘立建物跡が存し、倉庫跡かと思われる。方位はＳＢ-10・11と同一である。

ＳＢ-11　ＳＢ－９の東方に位置する掘立柱建物跡であるが、北から２本目の柱列を欠き、構造は不明である。

ピット群　当トレンチ11区以東にピット群が存するが、建物の構造・時期は不明である。

ＳＫ－２　７区で検出した円形の土壙状遺構。

ＳＫ－３　北拡張１において検出した、南北に長辺をもつ土壙状遺構で、ＳＢ-10を切る。

(3) 第1～6トレンチ・南拡張トレンチ

水路①トレンチの南方に、ほぼ東西一南北方位を示す農道が存し、この付近が周辺より一段高いため、第1～6トレンチを設定した。

又、第5トレンチで、掘り方の一辺が1m以上の掘立柱建物跡が検出されたため、これを西へ拡張した（南拡張トレンチ）。

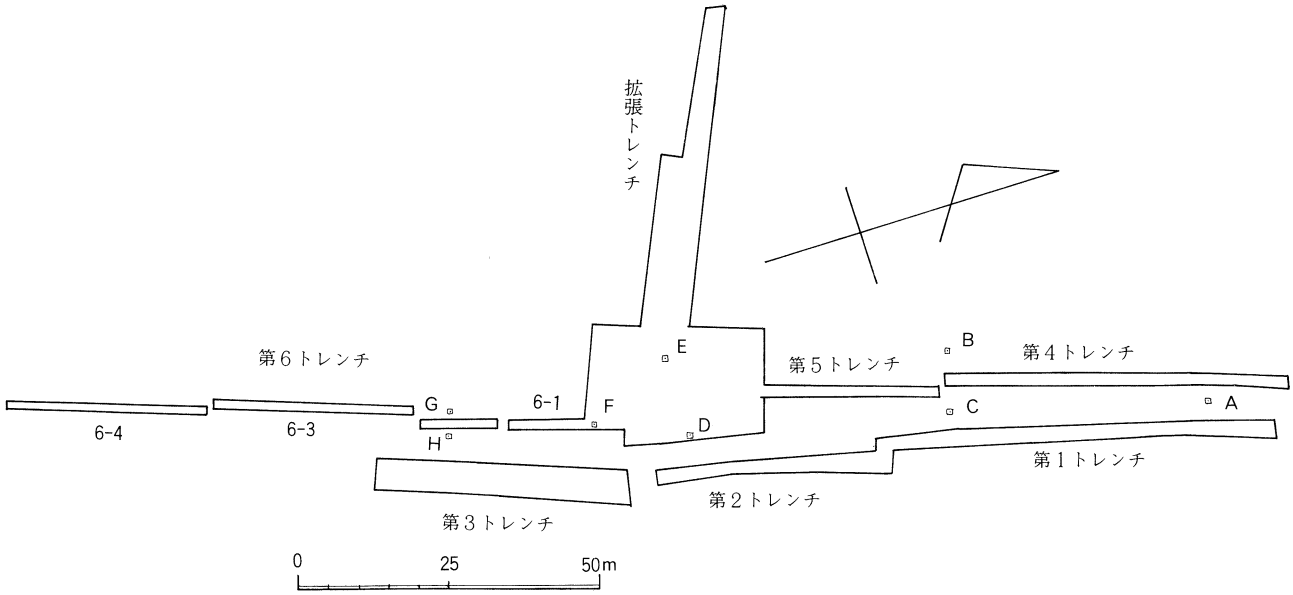
その結果、第4～6トレンチにおいて竪穴住居跡30棟、掘立柱建物10棟以上の集落跡を検出した。

田面が掘削されないこと、調査期間が短いこと等の理由から掘り込みを行わなかったため、詳細は不明ながら、竪穴住居跡群は古墳時代を中心とする時期、掘立柱建物跡群は白鳳時代を中心とする時期を示す。

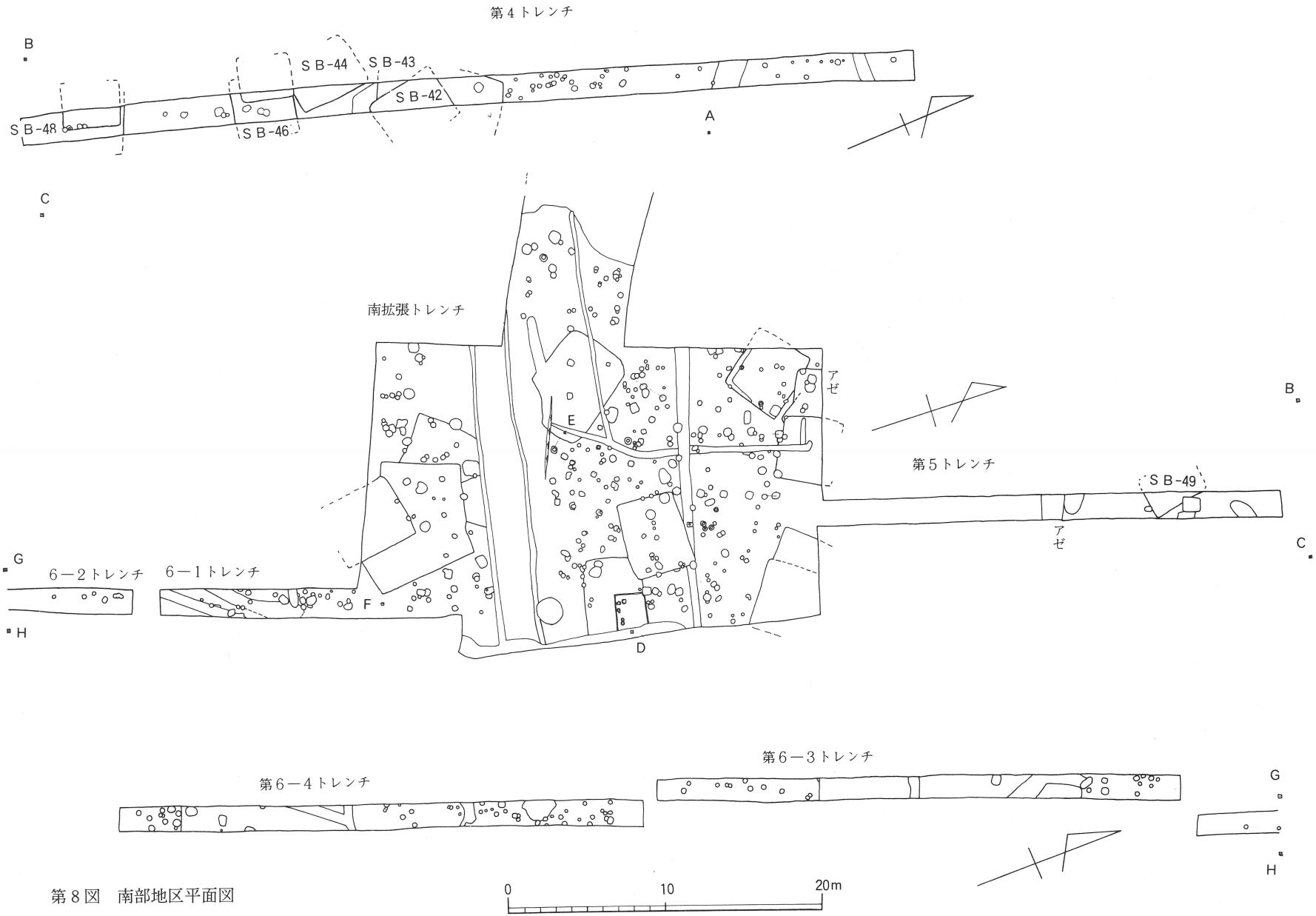
SB-47 第4トレンチ南端付近で検出した竪穴住居跡で、SB-48を切り込んで造られる。南北の規模は3.6mあり、方形プランを呈する。埋土中より布留式（中）期の高杯を出土している。

SB-40 第5トレンチ（南拡張区）北寄りで検出された、3×4間の掘立柱建物跡で、桁行方位はN-22°-Eで、SB-9・10と同一である。掘り方径は50cmを越える。桁行6.6m（一間1.55m）、梁間4.0m（一間1.3m）である。

第1～3トレンチ及び南拡張区の西半部では遺構は検出されず、第4トレンチの南半部から南拡張トレンチ東半部、第6トレンチにかけて細長く、古墳時代中期から後期の遺構が広がっていたようである。



第7図　南部地区トレンチ配置図


第４トレンチ
B
SB-44
SB-43
SB-42
SB-48
SB-46
A
C
南拡張トレンチ
アゼ
B
E
第５トレンチ
SB-49
アゼ
C
G
6－2トレンチ
6－1トレンチ
F
H
D
第6－3トレンチ
第6－4トレンチ
G
H
0
10
20m

第８図　南部地区平面図

4．遺　　物

水路②トレンチＳＤ－５出土（１～12）

縄文時代晩期の深鉢・浅鉢及び石錘、須恵器杯身、無釉・灰釉椀、土師器皿等が出土している。

縄文時代晩期の深鉢は、口縁部外端面に刻み目を施すもの(1)、突帯をめぐらすもの(2)、ヨコナデ調整のもの(3)など多様であるが、肩部には突帯をもたず、ヘラ削りが主体であることから、滋賀里Ⅲ・Ⅳ式の範疇に含まれると思われる。

(4)・(5)は尖底の鉢である。

(6)は偏平な湖東流紋岩の両端を打ち欠いた石錘である。

(7)は外反する口縁部が端部で２段に屈折するというもので、浅鉢の口縁部かと思われるが定かではない。

(8)は大型の灰釉椀で、口縁部の一部を外へつまみ出して片口としている。(11世紀前半)

(9)は無釉陶器椀の底部で、小さい高台を底部と体部の境に貼り付ける。(10世紀中頃)

(10)・(12)は口縁部が内弯する土師皿である。

(11)は立ち上がりが短く小さい須恵器杯身で、７世紀前半頃のものである。(陶邑ＴＫ209)

以上がＳＤ－５出土の遺物であるが、(1)・(3)・(4)・(5)・(6)・(7)が下層出土である。

水路②トレンチＳＤ－１出土（13～15）

ＳＤ－１下層より軒平、軒丸瓦が出土している。

(13)は単弁８葉の蓮華文軒平瓦で、文様面のほりが深く、周縁に珠文がめぐる。

(14)は４重弧の重弧文軒平瓦で、４重目の弧の部分を指で押圧している。

(15)は６重弧の重弧文軒平瓦であるが、３・４重目の弧の部分にヘラで斜格子文を線刻し、５・６重目の弧を下から指で押圧している。

(13)は白鳳期のものと思われるが、(14)・(15)の軒丸瓦は、無顎である点で新しい要素を含む。

この斜格子・指圧の軒平瓦は、この時期に湖東から湖北で出土する古瓦の特徴的なものであり、高月町保延寺遺跡（註(1)）、米原町不動谷瓦窯跡（註(2)）、出土品の中に類例がみられる。

保延寺遺跡出土のものは４重弧で、２・３重目の弧の部分に斜格子を入れ、４重目の弧を押圧しているが、不動谷瓦窯のものは溝を省いた面に斜格子文を入れており、少し異る。

水路①トレンチＳＤ－８出土（16）

布目の丸瓦で、玉縁部に３条の溝を刻んでいる。

水路①トレンチ自然水路出土（17～24）

(17)・(18)は口縁部が段を成して屈曲する須恵器杯蓋。

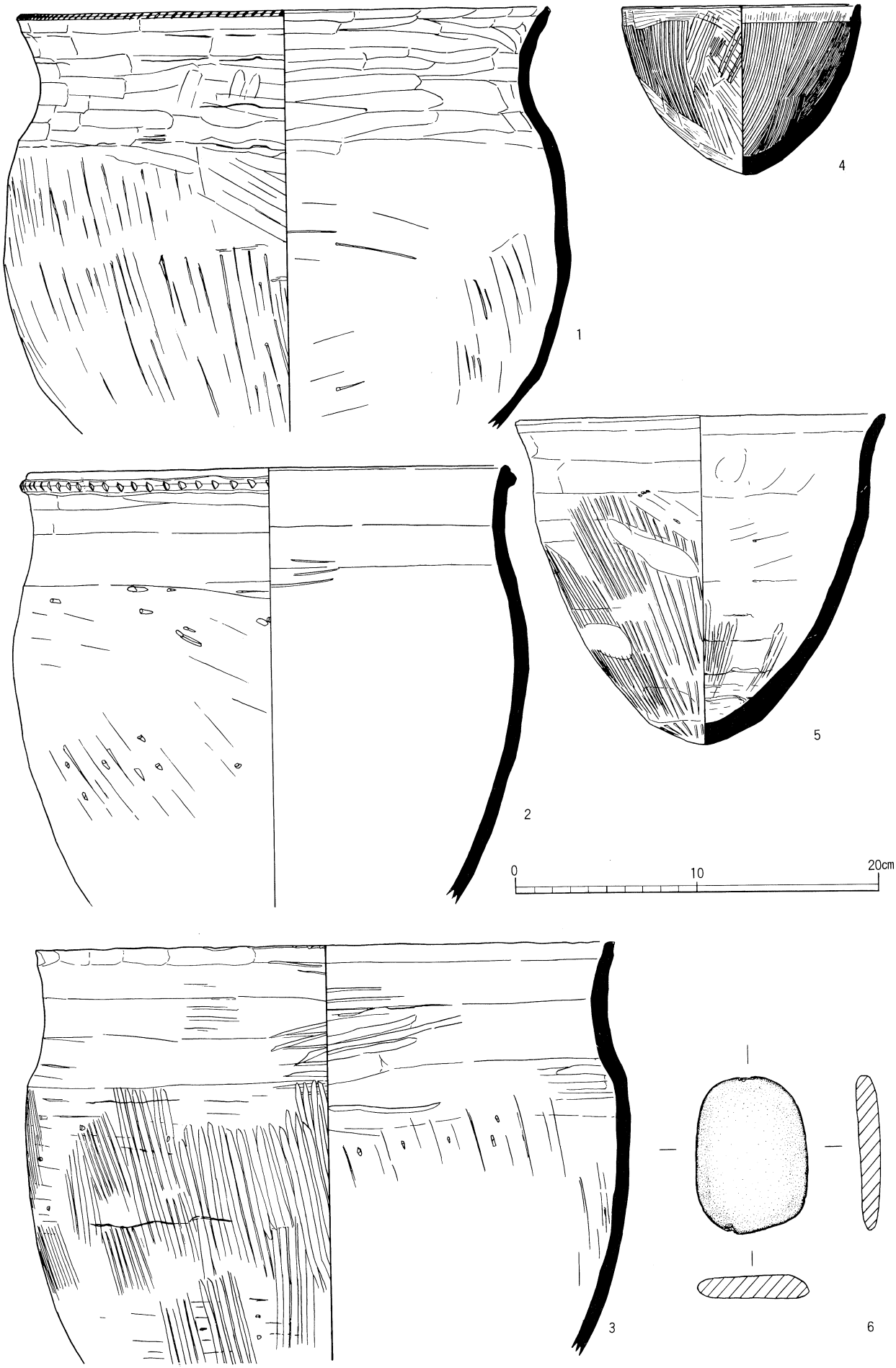
(19)は口縁部が外反して外面に稜を成す須恵器杯蓋。

(20)は底部がやや不安定で、体部が外反気味に開く須恵器杯身。

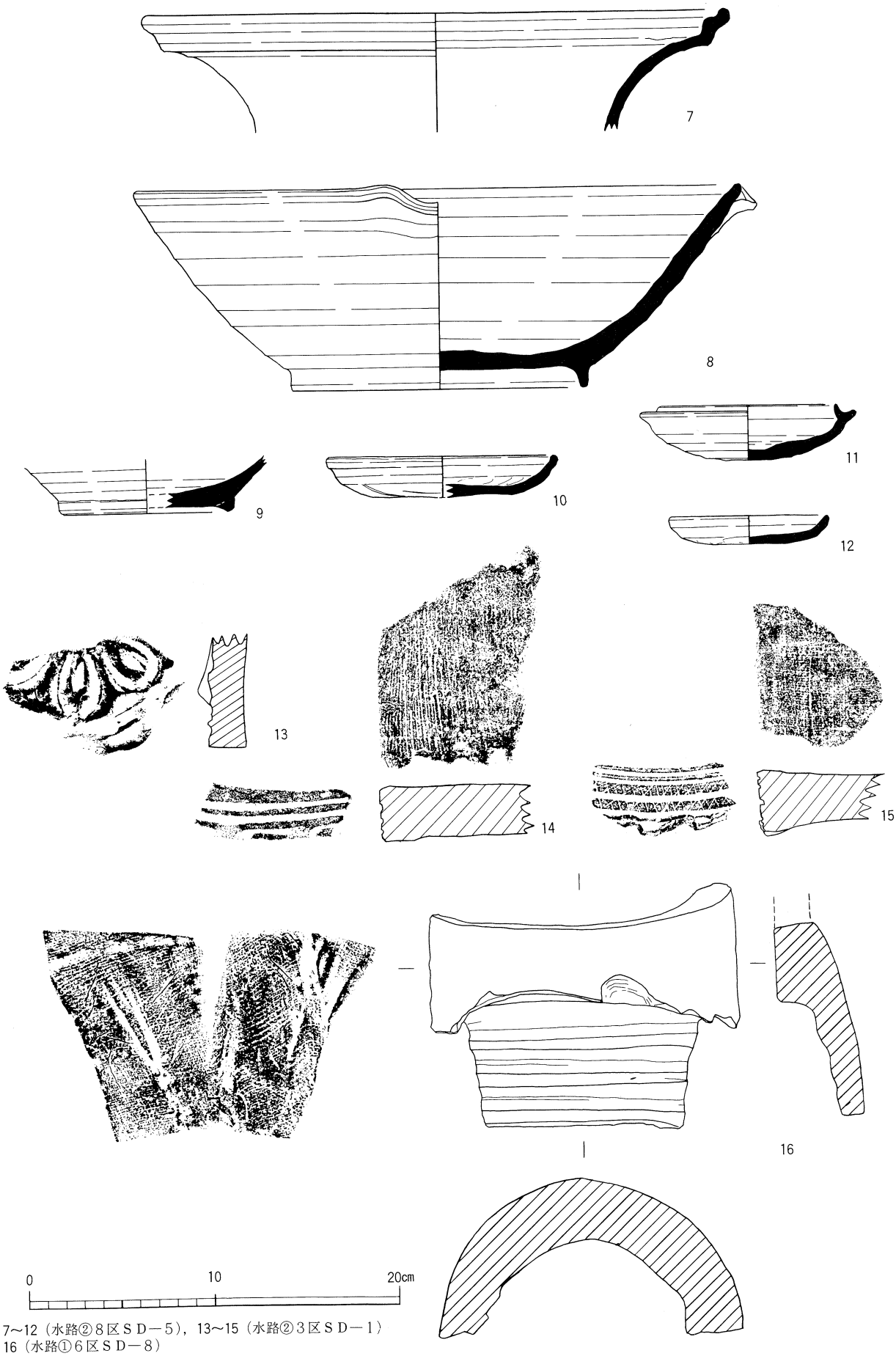
※当自然水路からは底から、塼が数十片出土している。色調は、淡赤褐色を呈し、約９cmの厚さであったようである。

(23)は屈曲して外反した口縁部が端部で下方に肥厚する甕。体部の内面は青海波文、外面は平行叩き目をカキ目で消している。

これらの須恵器は７世紀前半から中頃の時期を示している。(陶邑ＴＫ209～217)

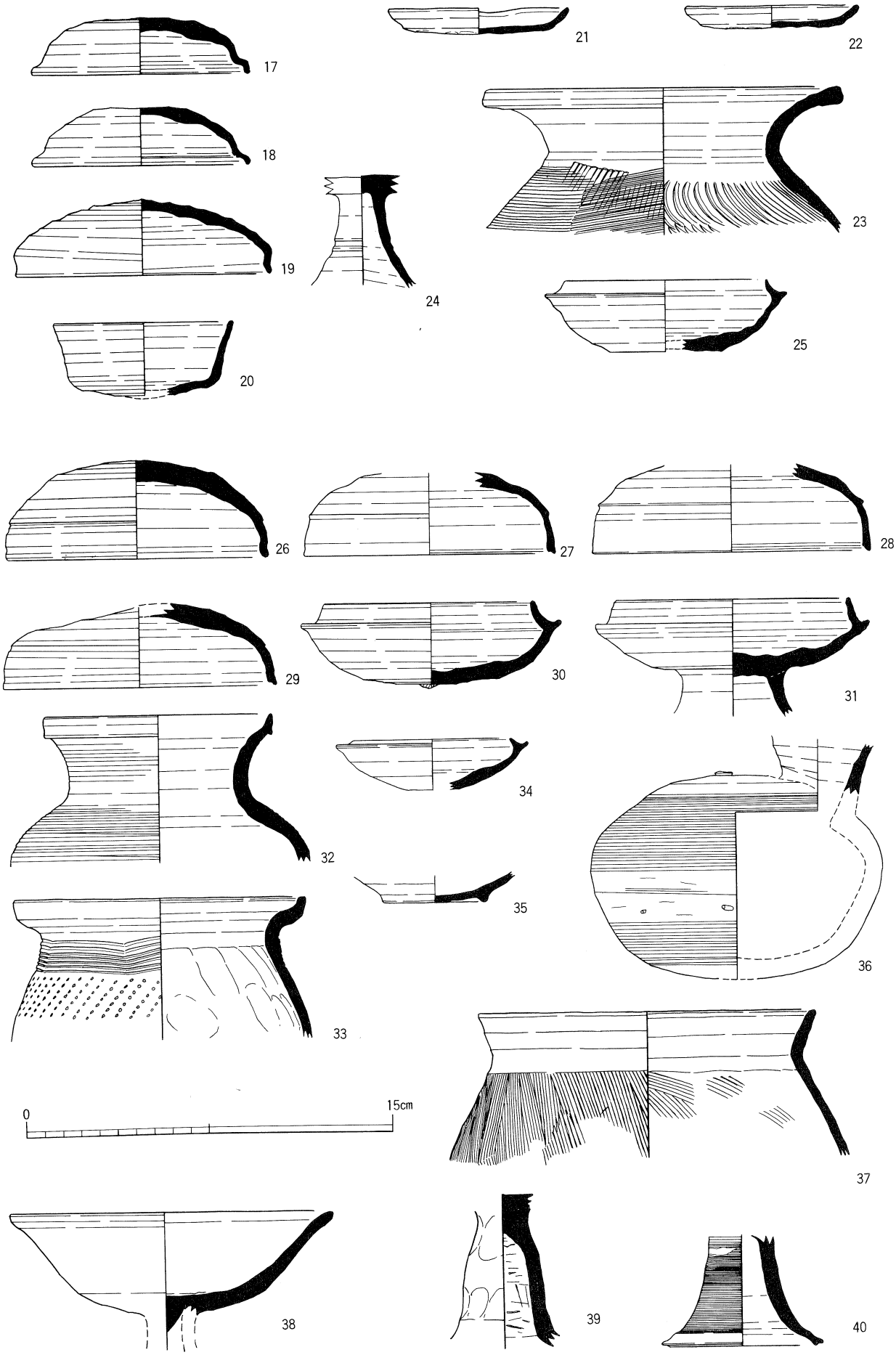


第９図　出土遺物実測図　1～6（水路②８区ＳＤ－５）



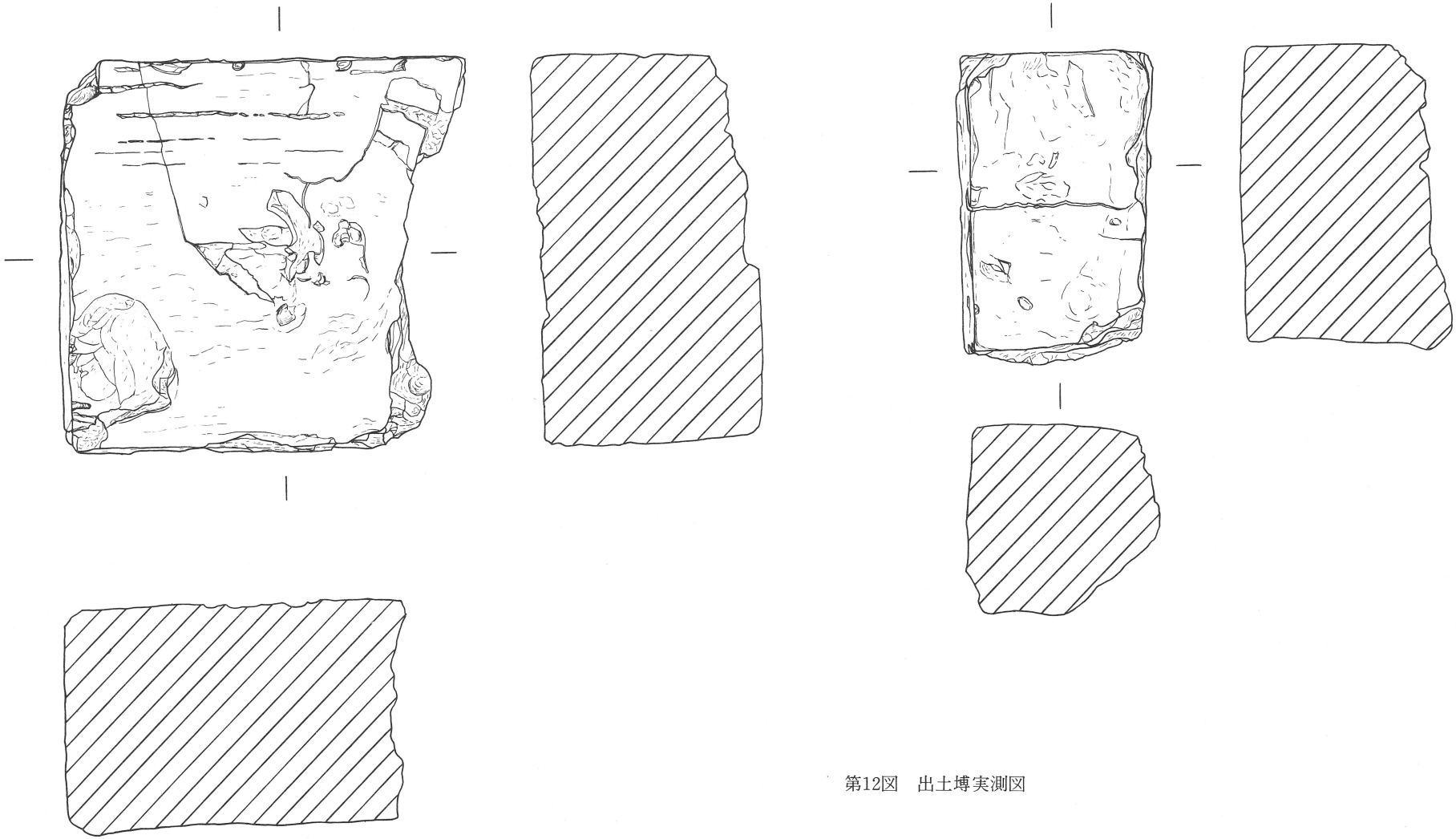
7～12（水路②８区ＳＤ－５），13～15（水路②３区ＳＤ－１）
16（水路①６区ＳＤ－８）

第10図　出土遺物実測図



第11図　出土遺物実測図

17～24（水路①自然水路），25（水路①ＳＢ－１）
26～32（北拡張区１ＳＢ－２），34（北拡張区１ＳＤ－９）
33，35～37（北拡張区），38～39（第４トレンチＳＢ47）
40（第４トレンチ遺構面上）



第12図　出土塼実測図

水路トレンチ①ＳＢ－１出土（25）

立ち上がりが小さく内弯する須恵器杯身で、６世紀末頃の所産である。(陶邑ＴＫ43)

水路トレンチ①ＳＢ－２出土（26～32）

(26)～(29)は天井部が高く、口縁部が内傾する端面を成す須恵器杯蓋である。

(30)は立ち上がりが内弯し、端部が丸い須恵器杯身で、(31)は同様の特徴を示す有蓋高杯である。

(32)は口縁端部に直立する外端面を有する須恵器壺である。

これらは６世紀前半から中頃の所産である。(陶邑ＭＴ15～ＴＫ10)

水路①・北拡張区１ＳＤ－９出土（34）

立ち上がりが極端に小さい須恵器の杯身で、７世紀前半の時期を示している。(陶邑ＴＫ209)

北拡張区１・２出土（33～37）

(33)は弥生時代後期の受口状口縁部を有する浅鉢で、口縁部はヨコナデ調整、頸部外面に櫛描平行線文・肩部外面に列点文（７条１単位）を施す。

(35)は内面のみ黒色処理の黒色土器Ａ類椀底部で、丸やかな底部に小さな高台を貼り付ける。

(36)は須恵器平瓶で、体部外面のほぼ全体にカキ目を施す。天井部中央に円形浮文を貼付する。

第４トレンチ出土（38～40）

(38)・(39)はともにＳＢ-47から出土した、古墳時代中期の高杯である。口縁部はゆったりと開き、中空の脚柱部は裾部で外反する。

(40)は須恵器高杯の脚部で、外面にカキ目が施され、脚端部がわずかに屈折する。６世紀中頃のものと思われる。

註(1)　西田弘「近江の古瓦II　湖西・湖北」
　　文化財教室シリーズ18（1977）

註２　近藤滋の教示による。

５．小　　結

今回の発掘調査の結果、古墳時代の前期から後期にわたる竪穴住居跡・溝跡及び土壙状遺構からなる集落跡と、７世紀後半以降の掘立建物跡群を検出した。

又、ＳＤ－１，８の溝跡や自然水路跡から白鳳から奈良時代の軒丸・軒平瓦や塼が出土し、近辺に古代寺院に関わる施設が存したことを示唆している。

●弥生から古墳時代前期に該当する遺構としてはＳＤ－２、ＳＢ－６のみで、両方とも確たるものではない。しかし、ＳＢ－３～５の埋土中にもこの時期の遺物が混入しており、付近に集落が存したことは疑いない。

●古墳時代中期には、南拡張区を中心とする微高地上に竪穴住居が営まれる。住居跡は30棟ほど確認されているが、後期に及ぶものが含まれており、一時期の集落の規模は不明である。

●古墳時代後期には、水路①トレンチ・北拡張区西半部で６世紀初頭から７世紀前半頃にかけての竪穴住居跡・溝跡等を中心とする集落が営まれる。

自然水路・ＳＤ－８は７世紀前半から後半にかけて存続しており、ＳＤ－９も７世紀前半までは確実に存在している。

●７世紀後半以後の遺構として掘立柱建物跡群があり、水路①トレンチ・北拡張区１で北北東に方位を合せて２×

数間、3×4間の建物跡群が5棟以上、南拡張区でも、数棟の掘立柱建物が存する。このうちのＳＢ-40は3×4間の掘立柱建物跡で、N-22°-Eを示す。両地点の2群は同時期に存続したと推定される。

但だ、存続時期の上限はＳＤ-８・９より後出ということで7世紀後半とできるが、下限が定まらない（ＳＤ-５上層、ＳＢ-１撹乱の時期を下限とすると11世紀頃となる。）。

6．ま　と　め

今回の調査では調査期間が充分でなかったこともあるが、一方で遺跡保存のため、ほ場整備事業の施工田面高を調整した結果、遺構確認のみで、掘り込みを実施しなかった部分も多く、結果としては中途半端な調査であったが、大きな成果を得ることができた。ただ残念であったのは、調査の第1の目的であった寺跡の確認ができなかったことである。

さて今回の調査では古代の遺跡の空白地帯の中にあって、突然白鳳時代の寺院跡が出現するような事前の歴史的環境に対して、遺構としては古墳時代前期以降、連綿として集落が形成されていたことは、寺院建立前に、その基盤を充分に持っていたことであり、鎌倉以降においても佐々木氏の被官で重要な地位にあった目加田氏の基盤としても栄えたことが理解できた。特に2群として理解できた掘立柱建物群については廂付建物を含む比較的まとまったものであり、かつ7世紀後半からのものと言う意味では寺跡とのかかわりが充分考えられるものであり、今後の調査に期待されるところである。また遺物から見た場合は縄文時代晩期から以降継続する点では、湖東地域においても早くから開発された地と考えられる。特に縄文晩期の土器の検出例は、この愛知郡内に限って見れば、初見例であり、縄文時代の資料と言う点だけで見ても、郡内では蚊野古墳群中等の墳丘盛土内からの石鏃等に限られるのみであった。なお、この地での縄文晩期の遺跡立地を考えた場合、丁度今回の調査地の西側は宇曽川の支流銭取川が流入しているところであり、また今回の調査で検出され流路が豊郷町雨降野方面から流入していて、その合流点にあたり、かつ現在でも低湿地を形成していることから、この湿地を目的に集落が営なまれた可能性がある。このことは石錘の出土からも類推できる。

最後に改めて今調査の目的であった寺跡についてであるが、塼を持つことなどから見れば県下の寺跡の多くが瓦を少量出すのみで、伽藍としては充分整備されているとは考え難いなかで、比較的伽藍を具備していたと想像できる。そして寺跡があったことも確かであるが、先にも触れたように今回では確認しきれなかった。そして、今回の寺跡関係の遺物出土状況、周辺の遺物の散布状況から、改めて寺跡の所在を再考して見ると、結果として今回の調査区の北側、つまり、より大字八町側の微高地が有力となろう。また当寺跡の時期としては飛鳥時代寺院跡とされているが、今回の出土瓦から判断すると前年度の塔ノ塚廃寺、野々目廃寺側から考え白鳳時代すら、やや困難であるようだ。この時期の確定と寺跡確認については今後の周辺部の調査に期すことでまとめに変えたい。

（近藤　滋）

7．出土遺物観察表

種　別	番号	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	備　考
縄文土器深鉢	1	口径29.4	肩部外面に稜を成し、口縁部は外反する。 胴部は丸く、底部に向けて急速にすぼむ。	口縁端部に刺突文が廻る。 口頸部内外面ともにヨコヘラナデ調整、肩部以下内外面ともに板状工具でタテに削る。	(色調)暗灰褐色 (胎土)1～3㎜大の石英・チャート・くさりレキを多く含む。 (焼成)良好。 ※肩部外面以下に煤が付着。内面にはこげ付きがみられる。	水路②トレンチ8区SD-5出土
縄文土器深鉢	2	口径26.7	口縁部はほぼ直立し、肩部外面に甘い稜を成す。 胴部は張らず、底部に向けて緩かにすぼむ。	口縁部外面に突帯が貼り付けられ刺突文が廻る。 口頸部内外面ともにヨコヘラナデ調整、肩部以下外面は板状工具で削る。	(色調)灰褐色 (胎土)1～4㎜大の石英・チャートを多く含む。 (焼成)良好。 ※肩部以下外面に煤付着。	水路②トレンチ8区SD-5出土
縄文土器深鉢	3	口径32.0	口縁部は外反気味に開き、肩部外面に稜を成す。 胴部は張らず、底部に向けて緩かにすぼむ。	口縁端部に刺突文が廻る痕跡が残る。 口頸部内外面ともにヨコヘラナデ調整、肩部以下内面は板状工具による削り、外面はその後ヘラナデしている。	(色調)暗灰褐色 (胎土)1～4㎜大のチャート・くさりレキを多く含む。 (焼成)良好。 ※頸部以下外面に煤付着。	水路②トレンチ8区SD-5出土
縄文土器　鉢	4	口径13.1 器高 9.3	口縁部は少し外反する。 尖底の小型鉢である。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整 体部内面は荒いタテハケ目調整、外面はさらに板状工具でナデている。	(色調)暗灰褐色 (胎土)1～5㎜大の石英・チャートを含む。 (焼成)良好。 ※体部外面に煤が付着。	水路②トレンチ8区SD-5出土
縄文土器　鉢	5	口径20.5 器高18.1	口縁部が外反し、肩部外面に甘い稜を成す。 尖底の鉢である。	体部上半内外面はヨコヘラナデ調整、体部内外面はタテにヘラナデしている。	(色調)暗灰褐色 (胎土)1～3㎜大の石英・チャート・くさりレキを多く含む。 (焼成)良好。 ※体部上半外面に煤が付着。	水路②トレンチ8区SD-5出土
石　　錘	6	タテ 8.7 ヨコ 6.2 厚さ 1.1	扁平な河原石のタテ方向両端を打ち欠く。		(石質)湖東流紋岩 1～5㎜大の長石の斑晶あり。石英はほとんどみられない。宇曽川上流の産と思われる。	水路②トレンチ8区SD-5出土
縄文土器浅鉢	7	口径32.0	大きく外反する口縁部は端部が2段に屈曲する。	端部屈曲部はヨコナデ調整、その他の調整は不明。	(色調)灰褐色 (胎土)1～2㎜大の石英・チャート・長石を多く含む。 (焼成)良好。	水路②トレンチ8区SD-5出土
灰　釉　　椀	8	口径33.0 器高10.8 高台径16.0	外上方に伸びる体部を有し、口縁部は外反しない。 体部と底部との境に下方に尖る高台を貼付する。	口縁部の一部を外へ曲げ、片口としている。 口縁～体部内外面及び底部内面はヨコナデ調整、底部外面はヘラ削りしている。 口縁部外面から内面全体に灰釉をハケ塗りする。	(色調)灰褐色 (胎土)0.5～3㎜大の長石・石英を含む。 (焼成)良好。 ※ロクロ右回転（但し、底部のヘラ削りは左回転）	水路②トレンチ8区SD-5出土 (水路①トレンチ3区SB-1からも破片が出土した)
無　釉　　椀	9	高台径 9.4	体部と底部との境に断面三角形の高台が付く。	体部内外面ヨコナデ調整。 底部外面は回転糸切りを行う。	(色調)灰白色 (胎土)精良 (焼成)良好。 ※ロクロ右回転	水路②トレンチ8区SD-5出土
土師器　　皿	10	口径12.6 器高 3.2	体部は内弯気味。 口縁部は内上方へ肥厚する。	口縁～体部内外面はヨコナデ調整。 底部は指ナデ調整。(底部外面にヘラ削り痕跡が残る)	(色調)灰褐色 (胎土)精良 (焼成)良好。	水路②トレンチ8区SD-5出土
須恵器　杯身	11	口径 9.6 器高 3.0	体部と底部との境は不明瞭。 立ち上がりは短く丸い。	底部外面をヘラ削りするほかはヨコナデ調整を行う。	(色調)淡灰色 (胎土)0.2～5㎜大の長石を含む。 (焼成)良好。 ※ロクロ右回転	水路②トレンチ8区SD-5出土

種　　別	番号	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	備　　考
土師器　皿	12	口径 8.7 器高 1.6	体部と底部との境は外面に稜を成す。 口縁部は丸い。	口縁～体部内外面ヨコナデ調整、底部内外面指ナデ調整。	(色調)淡褐色 (胎土)0.5㎜大のチャートを少し含む。 (焼成)良好。	水路②トレンチ 8区SD-5 出土
軒　丸　瓦	13	—	単弁8葉の蓮華文軒丸瓦。 周縁に珠文がめぐる。 文様面のほりが深い。	〃	(色調)灰褐色（表面はいぶされて灰黒色を呈す） (胎土)精良 (焼成)良好。	水路②トレンチ 3区SD-1 出土
軒　平　瓦	14	瓦当部の厚さ 3.0	4重弧の重弧文軒平瓦。 4重目の弧の上を指で押圧している。	上面布目 下面指ナデ調整	(色調)淡赤褐色 (胎土)0.5㎜内の石英・チャートを含む。 (焼成)不十分。	水路②トレンチ 3区SD-1 出土
軒　平　瓦	15	瓦当部の厚さ 3.5	7重弧の重弧文軒平瓦であるが、上から3・4重目の弧に斜格子状の線刻を入れ、さらに5・6・7重目の弧の部分を下端から押圧する。	上面布目 下面指ナデ調整 側面ヘラ削り	(色調)淡褐色（瓦当部と上面はいぶされ灰黒色を呈す） (胎土)精良 (焼成)やや不十分。	水路②トレンチ 3区SD-1 出土
丸　　瓦	16	—	玉縁部に3条の筋が走る。	上面ハケ目 下面布目 玉縁部ヨコナデ調整 側面ヘラで削る。	(色調)淡灰色 (胎土)精良 (焼成)やや不十分。	水路①トレンチ 6区SD-8 出土
須恵器　杯蓋	17	口径12.0	天井部は扁平である。 口縁が2段に屈曲し、垂下する端部は丸い。	天井部外面はヘラ削りした後、平行叩きを行う。 その他はヨコナデ調整。	(色調)暗灰色 (胎土)0.5～1㎜大の長石・石英を含む。 (焼成)良好。 ※ロクロ右回転	水路①トレンチ 1区暗茶灰色粘土層出土
須恵器　杯蓋	18	口径12.0	天井部は扁平である。 口縁が2段に屈曲し外下方に伸びる端部は丸い。	天井部外面はヘラ削りした後、平行叩きを行う。 その他はヨコナデ調整。	(色調)灰色 (胎土)0.5～1㎜大の長石・石英を含む。 (焼成)良好。	水路①トレンチ 1区暗茶灰色粘土層出土
須恵器　杯蓋	19	口径14.0	天井部は丸い。 口縁部が屈曲して垂下し、端部は少し外反する。	天井部内面をヘラ削りするほかはヨコナデ調整を行う。	(色調)灰色 (胎土)0.5㎜大まれに5㎜大の長石・石英を含む。	水路①トレンチ 1区暗茶灰色粘土層出土
須恵器　杯身	20	口径10.0 (器高 4.2)	口径の小さい杯身である。 体部はほぼまっすぐ外上方に伸び、口縁部は丸い。	底部外面をヘラ削りするほかはヨコナデ調整を行う。	(色調)暗灰色 (胎土)0.5～1㎜大の石英・チャートを含む。 (焼成)良好。	水路①トレンチ 1区暗茶灰色粘土層出土
土師器　皿	21	口径 9.8 器高 1.5	体部と底部の境に稜を成し、体部は内弯する。 口縁端部は少し尖る。	口縁～体部内外面ヨコナデ調整。 底部内外面指ナデ調整。	(色調)灰褐色 (胎土)0.5㎜大の石英・長石を少し含む。 (焼成)良好。	水路①トレンチ 1区暗茶灰色粘土層出土
土師器　皿	22	口径 9.5 器高 1.3	体部と底部の境に稜を成し、体部は内弯する。	口縁～体部内外面ヨコナデ調整。 底部内外面指ナデ調整。	(色調)灰褐色 (胎土)1㎜大の石英を少し含む。 (焼成)良好。	水路①トレンチ 1区暗茶灰色粘土層出土
須恵器　甕	23	口径15.2	丸やかな頸部から口縁部が外反し、端部は肥厚する。	口頸部内外面ヨコナデ調整。 肩部内面は同心円文叩き目、外面は平行叩き目の後ヨコナデ調整を行う。	(色調)淡灰色 (胎土)0.2～0.5㎜大の長石・石英を含む。 (焼成)良好。 ※ロクロ右回転	水路①トレンチ 1区暗茶灰色粘土層出土
須恵器　高杯	24	—	透しなし。 緩かに開く脚部中央部に2条の平行波線が廻る。	脚部外面ヨコナデ調整、内面ヨコヘラナデ調整を行う。	(色調)灰色 (胎土)1㎜大の石英を少し含む。 (焼成)良好。 ※ロクロ右回転	水路①トレンチ 1区自然流路底出土
須恵器　杯身	25	口径11.0 器高 3.9	体部と底部との境は明瞭。 立ち上がりはやや小さく内弯する。	底部外面ヘラ削り、そのほかはヨコナデ調整を行う。	(色調)淡灰色 (胎土)0.2㎜大の長石を含む。 (焼成)良好。 ※ロクロ右回転	水路①トレンチ 3区SB-1 出土

種　別	番号	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	備　考
須恵器　杯蓋	26	口径14.3 器高 5.3	天井部は丸く厚い。 外面に稜を成して口縁部が垂下するが、端部が少し外反する。	天井部をヘラ削りするほかはヨコナデ調整を行う。 天井部内面に同心円文叩き目が残る。	(色調)灰褐色 (胎土)0.5～3㎜大の石英・長石・チャートを含む。 (焼成)やや不十分。 ※ロクロ右回転	水路①トレンチ 北拡張区 ＳＢ-２出土
須恵器　杯蓋	27	口径13.8	天井部は丸やかである。 外面に稜を成して口縁部が垂下し、端部は内傾する端面を成す。	天井部をヘラ削りするほかはヨコナデ調整を行う。	(色調)灰色 (胎土)0.5㎜大の長石・石英を含む。 (焼成)やや不十分 ※ロクロ左回転	水路①トレンチ 北拡張区 ＳＢ-２出土
須恵器　杯蓋	28	口径15.2	天井部は丸やかである。 外面に稜を成して口縁部が垂下し、端部は内傾する端面を成す。	天井部をヘラ削りするほかはヨコナデ調整を行う。	(色調)淡灰色 (胎土)0.5～1㎜大の長石・石英を含む。 (焼成)良好。 ※ロクロ右回転	水路①トレンチ 北拡張区 ＳＢ-２出土
須恵器　杯蓋	29	口径15.0	天井部は丸やかである。 外面に稜を成して口縁部が垂下し、端部は内傾する端面を成す。	天井部をヘラ削りするほかはヨコナデ調整を行う。	(色調)淡灰褐色 (胎土)１㎜大の長石を少し含む。 (焼成)良好。 ※ロクロ右回転	水路①トレンチ 北拡張区 ＳＢ-２出土
須恵器　杯身	30	口径11.2 器高 4.5	立ち上がりは内弯し、端部は丸い。 体部と底部の境は不明瞭。	底部外面のみヘラ削り。そのほかはヨコナデ調整を行う。	(色調)灰色 (胎土)0.5㎜大の長石・石英を含む。 (焼成)良好。 ※ロクロ左回転	水路①トレンチ 北拡張区 ＳＢ-２出土
須恵器　高杯	31	口径12.8	立ち上がりはほぼまっすぐ内上方へ伸びる。 有蓋高杯の脚部である。	底部外面と脚部内面をヘラ削りし、そのほかはヨコナデ調整を行う。	(色調)暗灰色 (胎土)0.5～1㎜大の石英・長石を含む。 (焼成)良好。 ※ロクロ右回転（脚部成形は左回転）	水路①トレンチ 北拡張区 ＳＢ-２出土
須恵器　壺	32	口径12.6	口縁部は外反する。 口縁端部は上方へ肥厚し外端面を成す。	内外面ともにヨコナデ調整であるが、外面はさらにカキ目調整を行う。	(色調)灰色 (胎土)0.5㎜大の長石・石英を含む。 (焼成)良好。 ※ロクロ左回転	水路①トレンチ 北拡張区 ＳＢ-２出土
弥生土器浅鉢	33	口径16.0	受口状口縁を有する浅鉢。	口頸部内外面ともにヨコナデ調整、体部内面は指ナデ調整。 外面はハヶ目調整の後７条１対の櫛描平行線・列点文を施す。	(色調)灰褐色 (胎土) (焼成)良好。	水路①トレンチ 北拡張区１ ＳＢ-６床面上出土
須恵器　杯身	34	口径 8.7 器高 2.8	立ち上がりは小さく低い。 底部も小さい。	底部下半以下外面をヘラ削りするほかはヨコナデ調整を行う。	(色調)淡灰色 (胎土)精良 (焼成)良好	水路①トレンチ 北拡張区１ ＳＤ-９出土
黒色土器Ａ類椀	35	高台 5.7	丸やかな底部に小さな高台が付く。	調整不明。 内面にうっすら黒色化痕跡が認められる。	(色調)淡灰褐色 (胎土)精良 (焼成)良好	水路①トレンチ 北拡張区 出土
須恵器　平瓶	36	最大腹径 16.0	最大腹部が少し尖るが、全体に丸やかな体部。 底部も丸い。	体部の天井部に２個の円形浮文が貼付される。 胴部外面はカキ目調整、天井部外面はヨコナデ調整、底部外面はヘラ削り調整を行う。(内面は不明)	(色調)灰褐色 (胎土)0.5～4㎜大の長石を含む。 (焼成)良好	水路①トレンチ 北拡張区 出土
土師器　甕	37	口径16.4	頸部内面に稜を成す。 口縁部は外上方にまっすぐ伸びる。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整。 肩部以下内外面ともに斜方ハヶ目調整を行う。	(色調)灰褐色 (胎土)１㎜大の砂粒を含む。 (焼成)良好	水路①トレンチ 北拡張区

種　　別	番号	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴	備　　考
土師器　高杯	38	口径18.4	杯部外面に甘い稜を成し、口縁部で外反する。	内外面ともに磨滅のために調整不明（おそらくヘラ研磨と思われる）。	(色調)淡赤褐色 (胎土)0.5～1㎜大の長石・チャート・くさりレキを多く含む。 (焼成)良好	第4トレンチ ＳＢ-47 出土
土師器　高杯	39	—	屈曲して外開きする脚柱部。 中空である。	外面は指圧痕が顕著（指ナデ調整）。 内面はヨコヘラ削りしている。	(色調)淡赤褐色 (胎土)0.5～1㎜大の長石・チャート・くさりレキを多く含む。 (焼成)良好	第4トレンチ ＳＢ-47 出土
須恵器　高杯	40	脚径 8.8	脚裾部で少し屈曲を示す。 短脚の高杯脚部。	外面ヨコカキ目調整。	(色調)淡灰色 (胎土)0.5㎜大の長石を含む。 (焼成)良好 ※ロクロ右回転	第4トレンチ 遺構面上 出土

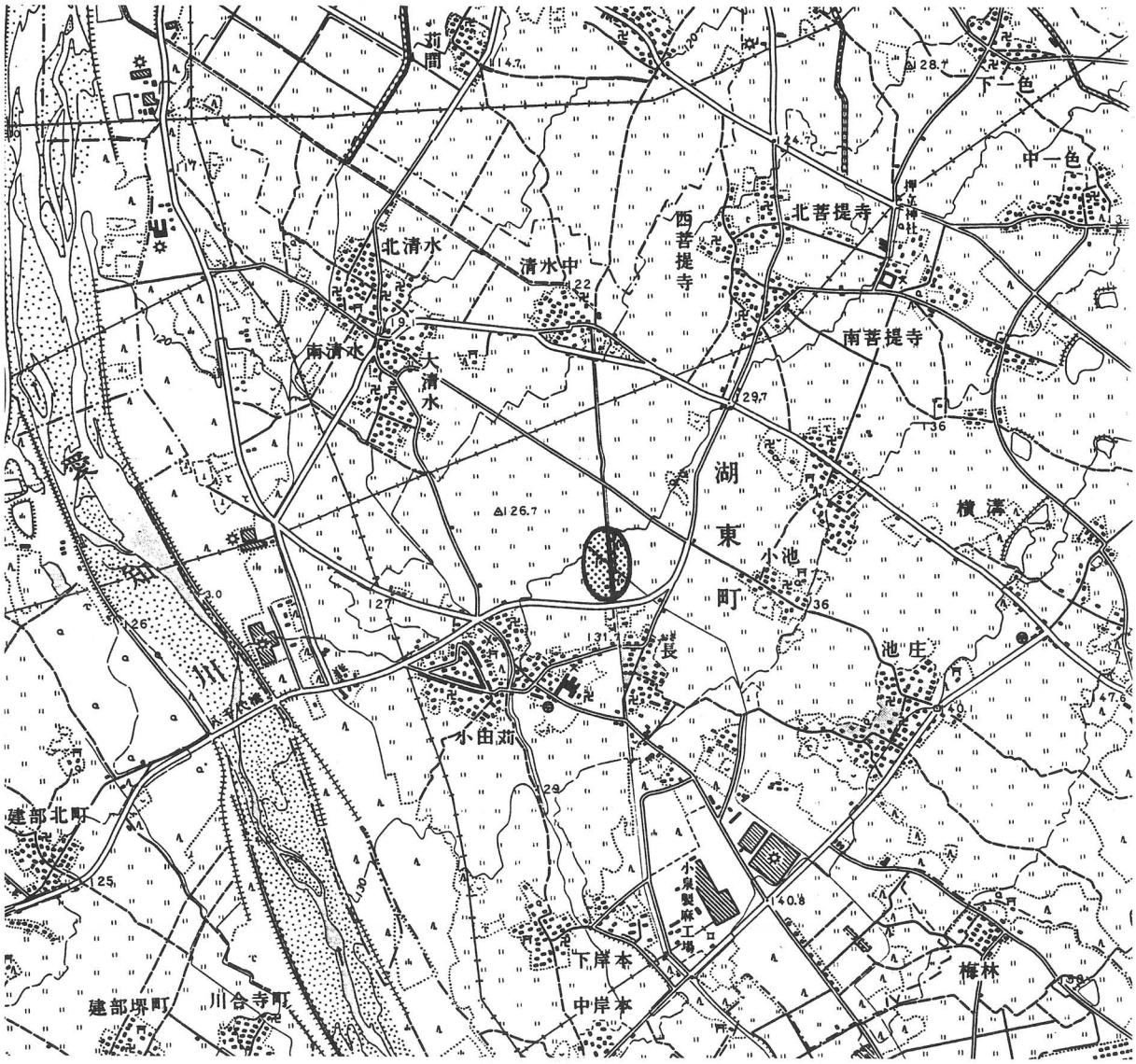
第４章　愛知郡湖東町大日溝遺跡

1．はじめに

県営ほ場整備に伴なう今回の調査は、小字『大日溝』の示すことから、寺跡として遺跡目録に掲載されていた遺跡の有無を確認することが第１義であった。さらに当地が、この愛知郡を本格的に開発したと考えられる愛智秦氏と、その原動力となった「愛知井」の基点近くにあることから、愛知井関連の何らかの遺構が確認できないかとの目的でも調査を実施した。

2．位置と環境

大日溝遺跡は、愛知郡湖東町大字長地先、長集落の北方の水田地帯にある。周辺には、「講堂」「鐘堂」等の小字名が存在するほか、古瓦の出土が伝えられており、寺院跡として把握されている遺跡である。しかしそれ以上の資料はない。また当該遺跡の範囲内には、古代条里開発と大くかかわる灌漑施設、いわゆる愛知井が縦断して



第1図　位　置　図

いる。愛知井の起源は、古代にさかのぼり、その流域に展開する古条理制地割り（南北方向に主軸）は、愛知郡統一条里制地割に先行するといわれている。こういった状況からも、重要灌漑施設とそれによる開発区域の拠点として寺院が存在することは充分うなずけるところである。

さて湖東町内には、現在のところ36ヶ所の遺跡が確認されている。そしてその大半は古墳群であり、それをさかのぼる確実な遺跡は知られていない。これは町域のほとんどが扇状地と愛知川の低位段丘面であるため、ある程度の土木技術の発展に裏づけられた人工水利施設がなければ開発が可能とならなかった結果であろう。古墳群の中には、勝堂遺跡のように48基を数えかなり大規模なものもあり、隣接秦荘町内にみられる渡来系愛知秦氏等とも関連する有力勢力も考えられる。

その他には、若干の寺院跡、窯跡、中世城館跡等が知られているにとどまる。うち小八木廃寺遺跡からは、鬼板などの出土がありその実態の一端が明らかになっている。しかし大半の遺跡は本格的調査もなく不明な点が多い。

ともあれ、遺跡よりみる湖東町の歴史はいまだ白紙に近い状態で、今回の調査も含め今後の調査・研究に期待がかかっている。なお今回の調査に際しての周辺調査で、新たに湖東地区で２基目の前方後円墳を確認することができた。小田刈古墳とした。湖東の後期古墳時代の再考が必要となった。

３．遺構と遺物

調査は、排水路予定地にトレンチを設定し進められた。幅約３m、総延長は260mを測るトレンチを東西方向に設けたものの、検出された遺構は、若干のピット・近世井戸一基・倒風木痕のみであった。一部集石遺構らしきものもあったが、人工物と判断するには至らなかった。特に「愛知井」との関係においてもトレンチ西端の更に西を南北に通ることから、これについても、かかわりを明らかにし得なかった。

一方遺物についても、皆無に近い状態であった。わずかに土師器の小皿の細片が出土したものの、遺構に伴うものではなかった。

以上のように、遺構・遺物とも当初の予想を裏切る結果となったが、計画水路敷のみと云うトレンチ設定地などに制約の多い調査であったことが原因であったかもしれない。

４．ま　と　め

調査開始以前、愛知井等の関連などからかなり期待のふくらむ調査であったが、結果の乏しい内容となった。しかし、これによって大日溝遺跡の存在までもが否定されたとするのではなく、今回掘削した部分に遺構・遺物が存在しなかったと理解すべきだと考える。

今後の調査・研究によって、「大日溝遺跡」の内容が明らかになることに期待したい。

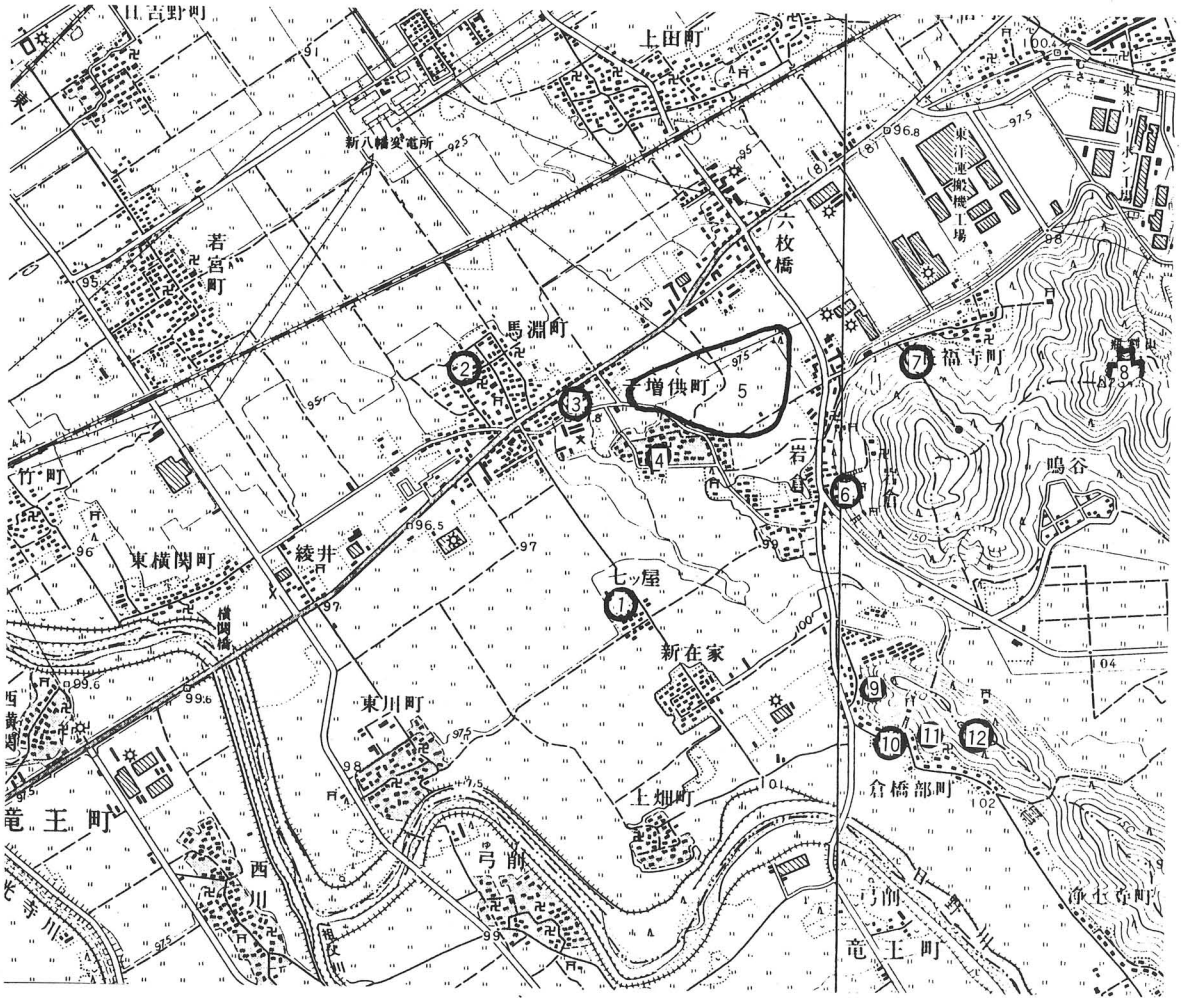
（山本一博）

第５章　近江八幡市七ツ屋遺跡

1．はじめに

県営ほ場整備に先き立ち実施した当該調査は、集落西端の田中に、やや大型の石材が数個集められており、一部マウンドを形成しているように見えることから古墳として位置付けられていたものの、不明確な点が多く、具体的な遺構の性格、遺存状況等を明らかにする目的で実施した。と言うのも大字七ツ屋から馬淵に向かう県道沿いには、さらに数個の石材が散見でき、あるいは寺跡的なものがあって、その石材が集積されたとも考えられていたからである。

なお当該調査の実施に際しては、補助員不足の結果、近江八幡市立郷土資料館長江南洋氏がこれを見かねて、平板測量等、多大な御助力を得た。ここに記して謝意を表したい。



1　七ツ屋遺跡
2　馬淵城跡
3　千僧供廃寺
4　ラカン塚
5　千僧供古墳群
6　岩倉山南古墳群
7　岩倉山北古墳群
8　瓶割山城跡
9　安吉古墳
10　倉橋部廃寺
11　栗木山古墳群
12　倉橋部古墳群

第1図　位　置　図

2．位置と悟境

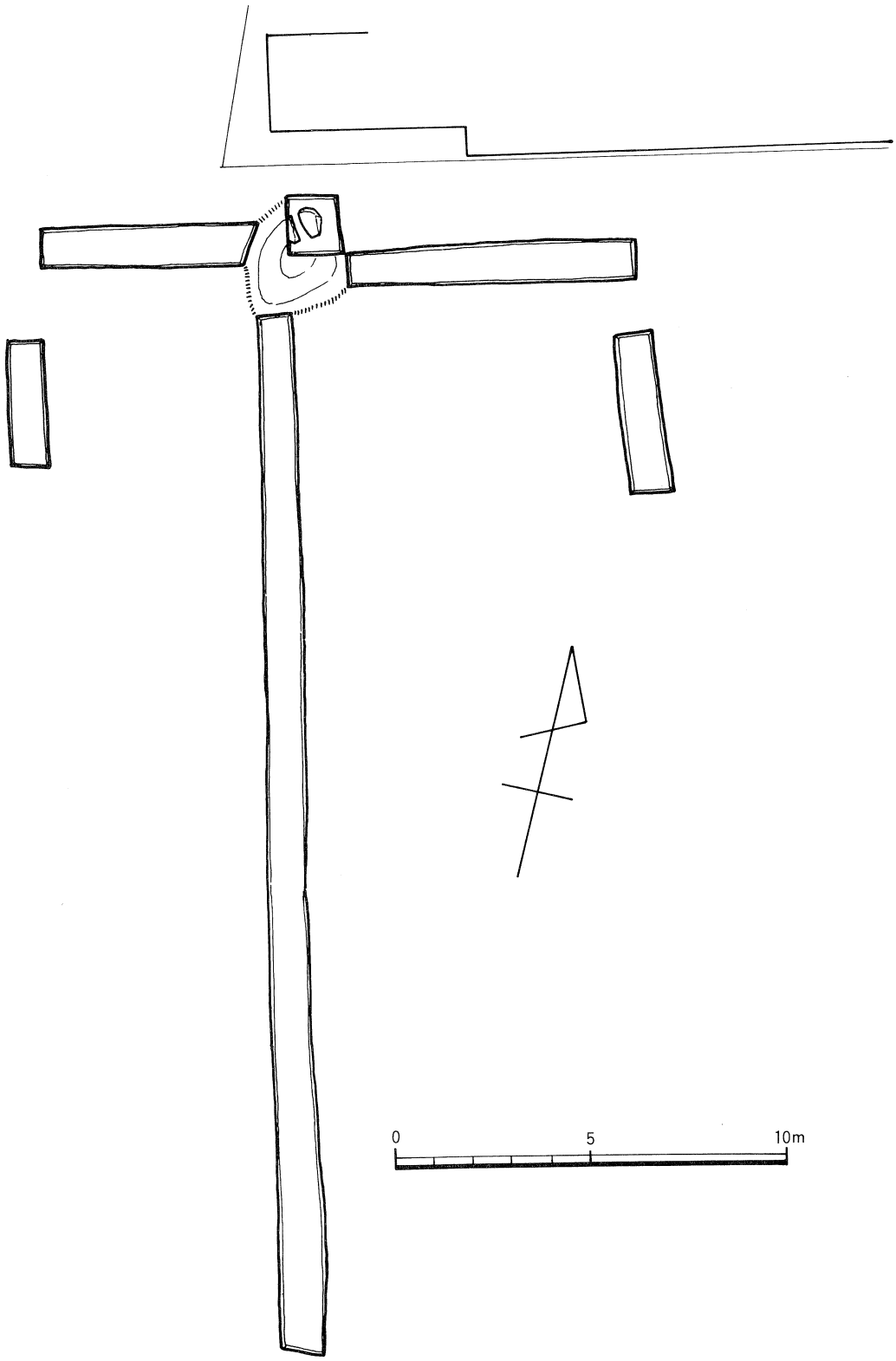
調査地は白鳥川の左岸に位置する小集落で、馬淵の出屋敷として新たに営まれた七ツ屋の集落西端に位置している。付近の遺跡としては白鳥川対岸の千僧供集落内に、鐘や短甲を出土し、中期古墳と考えられる供養塚や、横穴式石室を主体とする岩塚などから形成された千僧供古墳群があり、さらに、その東の岩倉地先にも後期古墳が分布している。また当字の南から西にかけては日野川が貫流し、特に南東部には「安吉橋の鬼」の伝承で知られた現安吉橋があって、西側の大字倉橋部には倉橋部廃寺や古墳群、古墓等も占地し、早くから遺跡の集中箇所として知られている。しかし出郷であることからも判断できるように、当字の立地する白鳥川左岸では従来、ほとんど遺跡はなく、比較的開発の遅れた地であったように思える。

3．遺構と遺物

集落西端にあって工場の敷地東側に見られるマウンド状のところを中心に東西、および南へトレンチを設定した。この結果、マウンド内の石材は遺構に伴うものではなく旧耕土上に新たに盛られたものであることが明らかとなった。また周辺部から、角がとれた土器の細片が若干採集されたが、特にこれに伴なう遺構等も他になく、他からの流入と考えられた。

4．ま　と　め

先にも触れたように、今回の調査では古墳の残痕かと考えられたマウンドも、結果として後世の集積によるものであることが明らかとなった。しかし何故当地に集積されたかは不明のままであり、かつ、これに触れると厄災があるとの伝承が生じていた。今後の調査に期したい。



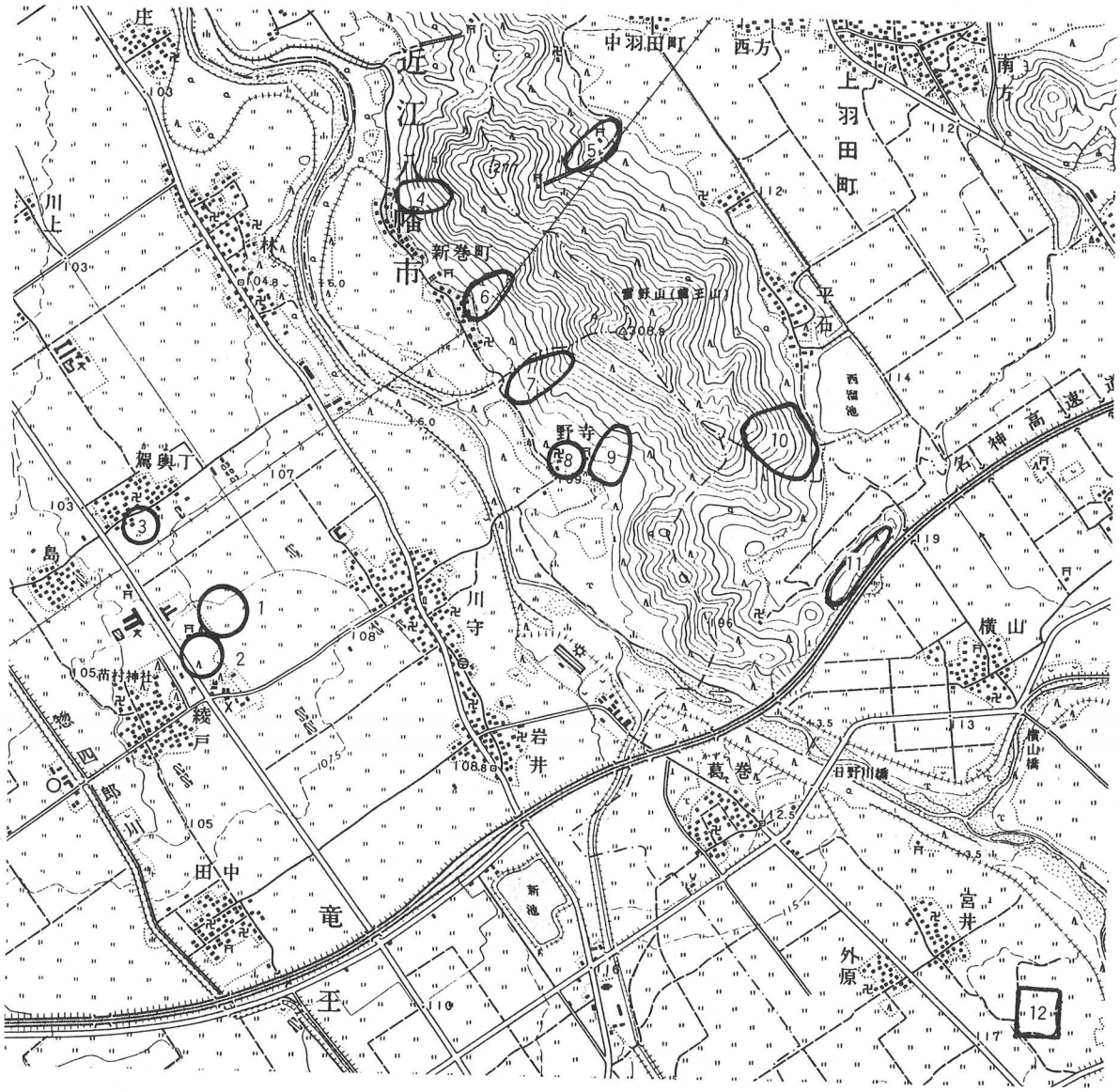
第２図　トレンチ配置図

第６章　蒲生郡竜王町綾戸遺跡

1．はじめに

竜王町内における県営ほ場整備で、はじめて発掘調査を実施した当該調査は、式内長寸神社とされている苗村神社の東から、北にかけて実施した。この苗村神社の東境内には古くから古墳群の存在が知られ、かつ社叢の東にも七ツ塚と呼ばれる古墳が所在していた。

ほ場整備事業における施工計画では、この七ツ塚はもとより、社叢内に排水路計画が成され、いづれも削平されると云うことで、計画変更が困難であったことから、結果として調査を実施することとなった。また社地の北側の駕輿丁よりでは、旧参道があったのか、里道と鳥居の存すること、また苗村神社楼門前の排水路改修に際して弥生中期の遺物が現地表下１m近くのところから出土したことなどから、排水路予定箇所の一部において試掘的に下層の確認をすることとした。



1　綾戸遺跡
2　東苗村古墳群
3　駕輿丁遺跡
4　新巻Ａ古墳群
5　八幡社古墳群
6　新巻Ｂ古墳群
7　安吉山古墳群
8　雪野寺跡
9　天神山古墳群
10　平石古墳群
11　横山古墳群
12　宮井廃寺

現地調査は、石橋正嗣が担当し、地元の関係各位の多大な協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

2．位置と環境

先にも触れたように式内の比定社である苗村神社境内および、その東側を中心に今回の調査は実施した。当地は平野部の真中に位置するものの日野川、あるいは善光寺川の伏流水の流路らしく、境内には湧水地があり、この周辺には低墳丘を持つことから、あるいは木棺直葬墓かと思える古墳群が所在している。また社地の南側では「土器田」等の小字もあり、楼門前出土の弥生土器等からも早くより人の生活が営なまれたところと考えられる。しかし、これ以外の遺跡としては今回周辺部では見られず、多くの遺跡は社地の東の日野川右岸に占地する雪野山山系に集中している。なかでも、雪野寺跡は白鳳時代の寺跡として知られ、塔跡基壇等の一部が発掘されている。また寺跡周辺の山村には多数の横穴式石室を主体とする後期古墳群が所在し、県下でも有数の古墳集中箇所となっている。特にこの苗村神社から、日野川を越え、雪野寺跡前から山間を八日市側に貫ける道は地元での伝承であるが、奈良道と呼ばれていることから、両者の間には深い結び着きがあったとも考えられる。

（近藤　滋）

3．遺　　構

本調査において設けたトレンチは総計21ヶ所を数える。このうち南北方向に設けたトレンチ（N－0～N－9とS－1～S－4）およびN－5、N－6の西側に設けたトレンチ（W－5、W－6）においては遺構は検出されなかった。従ってここでは調査区の東側に位置する通称「七ツ塚」を調査するために設けたトレンチ（E－1～E－4）について説明する。

「七ツ塚」は現在調査区の東側水田に点在する古墳で、もとは七つあったところからこの総称として地元では呼ばれている。調査前の状況は、北・東・南の三方を水田に囲まれ、平坦な地に墳丘とおぼしき盛土部分がわずか1.5メートルほどを残すのみとなっており、その西側は土取のためか大きくえぐられほとんど旧状をとどめていなかった。そこでこの古墳が周溝（もしくは周濠）をもつかどうか、あるいは盛土の状況はどうなっているか等を見るためにE－1～E－4のトレンチを設定した。

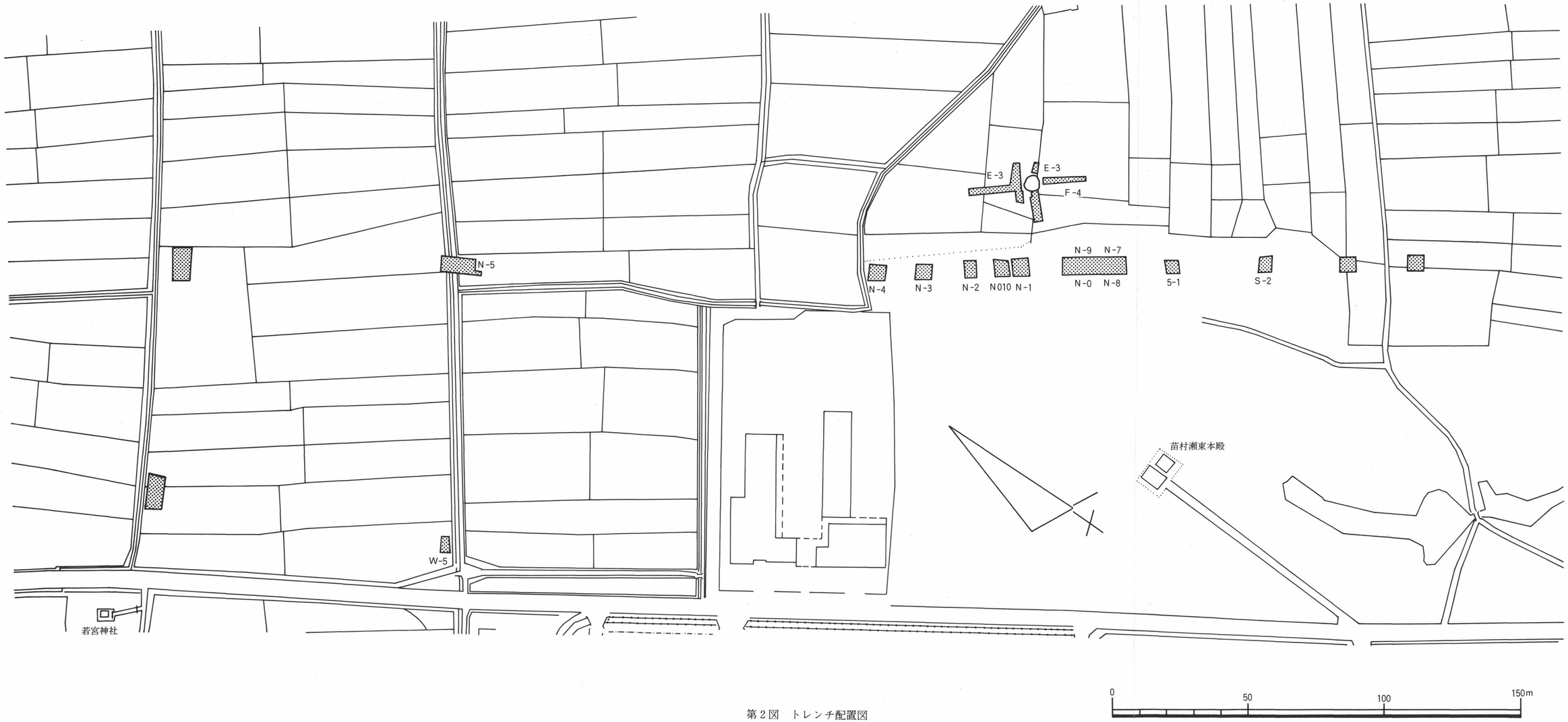
E－1　盛土の痕跡あるいは周溝の有無を確認する意味で設けた墳丘の西側へ長さ5m、幅1mのトレンチである。

ここでは残存墳丘部から約2m西側で、トレンチを横切る形で周溝と思われる溝が検出された。この溝は幅50cm、深さ20cm余りで、溝内部にはやや黒味をおびた暗青灰色粘質土または粘土のみが堆積していた。遺物出土はトレンチの各部においても溝内部においても見られない。

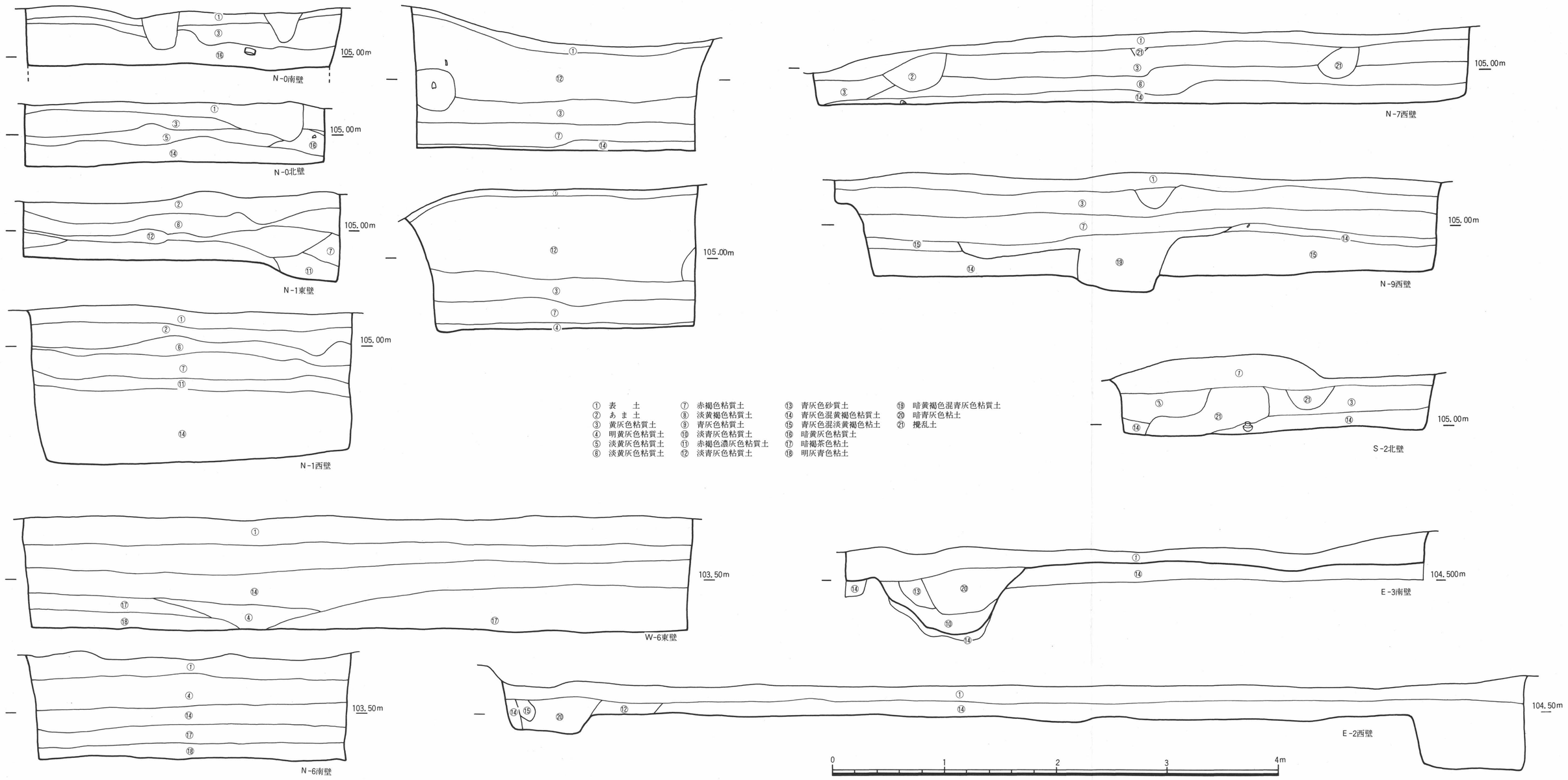
E－2　E－1とは反対側の墳丘部東側に設けた長さ1m、幅50cmのトレンチである。

ここではE－1で検出された周溝の延長と思われる溝がトレンチを横切る形で確認された。溝は幅50cm、深さ30cmほどで、堆積土はE－1検出のものと同様である。

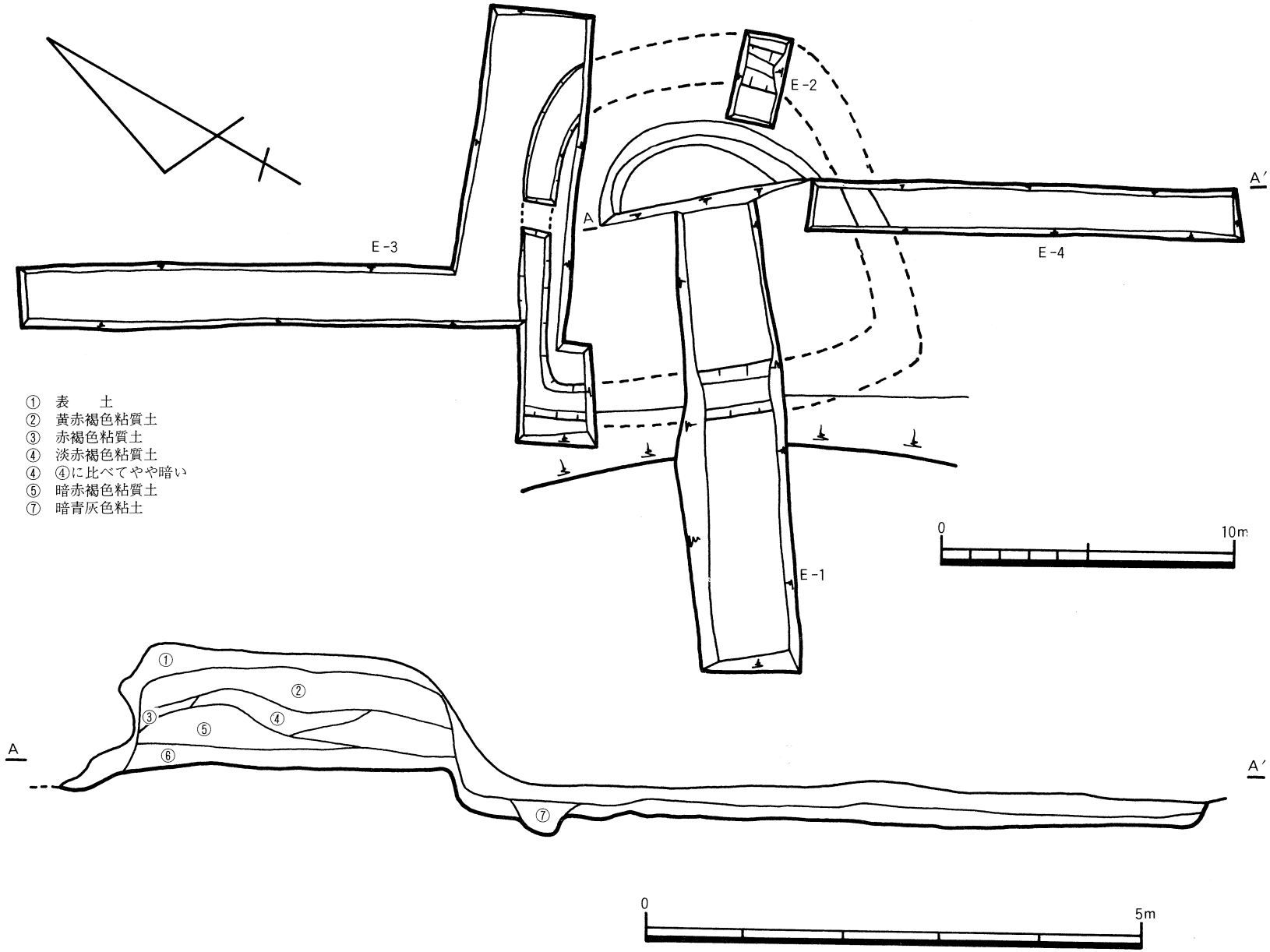
E－3　E－1、E－2で検出の周溝のまわり具合を見るため、東西方向ある程度面的に広げ、併せて遺物の検出を試みた。


E-3
E-3
F-4
N-5
N-4
N-3
N-2
N010
N-1
N-9
N-7
N-0
N-8
5-1
S-2
W-5
苗村瀬東本殿
若宮神社
0
50
100
150m

第２図　トレンチ配置図


N-0南壁
N-0北壁
N-1東壁
N-1西壁
N-7西壁
N-9西壁
S-2北壁
W-6東壁
N-6南壁
E-3南壁
E-2西壁
105.00m
105.50m
104.500m
104.50m
0
1
2
3
4m
① 表　土
② あ ま 土
③ 黄灰色粘質土
④ 明黄灰色粘質土
⑤ 淡黄灰色粘質土
⑥ 淡黄灰色粘質土
⑦ 赤褐色粘質土
⑧ 淡黄褐色粘質土
⑨ 青灰色粘質土
⑩ 淡青灰色粘質土
⑪ 赤褐色濃灰色粘質土
⑫ 淡青灰色粘質土
⑬ 青灰色砂質土
⑭ 青灰色混黄褐色粘質土
⑮ 青灰色混淡黄褐色粘土
⑯ 暗黄灰色粘質土
⑰ 暗褐茶色粘土
⑱ 明灰青色粘土
⑲ 暗黄褐色混青灰色粘質土
⑳ 暗青灰色粘土
㉑ 攪乱土

第3図　トレンチ土層図



第4図　七ツ塚平面・断面図

この結果、周溝は西北角で屈折してE－1検出のものにつながり、東北角ではゆるやかな弧を描いてE－2検出のものにつながることが確認された。またこの時点で周濠は北辺で幅約30cm、深さ30cm前後、東西辺で幅50cm、深さ30～40cmとなることが判明した。

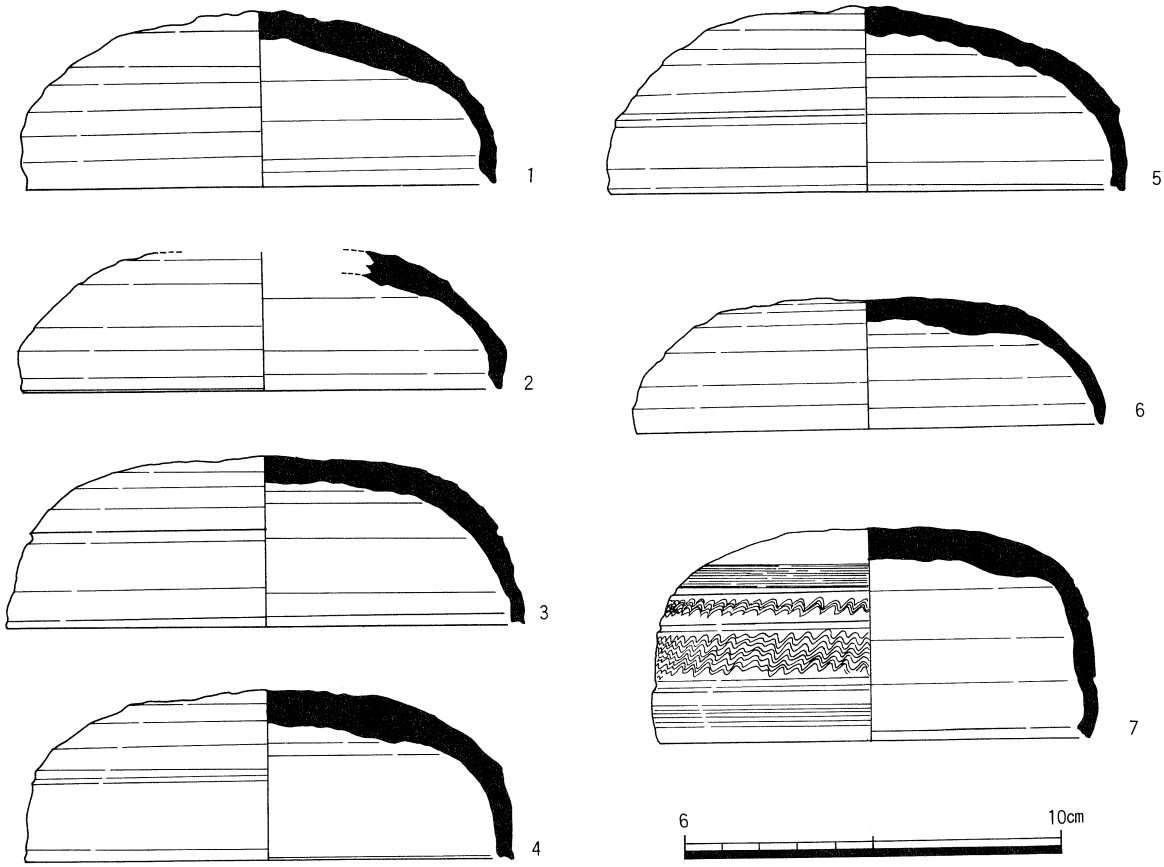
なお遺物の出土は皆無であった。

E－4　E－3で得た結果を確認する意味で設けたトレンチで、ここでも幅25～30cm、深さ30cmの周溝がE－2につながる方向に確められた。

4．遺　　物

ここでは各トレンチ出土の須恵器について、この出土状況を加えて説明する。

N－0　須恵器の坏蓋(7)はトレンチN－0南壁の暗黄灰色粘質土中より出土したものである。体部外面は天井部との境から横方向のカキ目、4条の波状文もしくは円弧文、8条の波状文もしくは円弧文、横方向のカキ目の順で施文され、各施文単位間には区画線として凹線もしくは沈線がおのおの一条づつ合計三条認められる。また青灰色混黄褐色粘質土上面では須恵器の大甕(8)が小片に砕け散った形で出土した。これはN－9、N－8においてもその一部が出土している。8は口径ほぼ37cm、器高126cmを測る大きなもので、外反する口縁部の上位と中位にそれぞれ2条と3条の沈線がめぐり、この沈線間に縦方向の一単位9本の櫛描文がほぼ2cm間隔でめぐっている。最大復径は体部の中位やや上方にあって、左上りの叩き目が見られる。このような須恵器の大甕は国産のものでは他に類を見ず、あるいは朝鮮より輸入のものであろうか。



1：S－1　2～4：S－2　5：S－4　6：セット　七ツ塚表採　7：N－0

第51図　出土土器実測図

S－1　須恵器の坏蓋(1)はトレンチ掘削の途中、表土直下から出土したものである。外面天井部はロクロ回転の方向にヘラ切りの際に生じる条痕が残り、それ以外は端部にかけてナデが認められる。内面はすべてユビナデである。

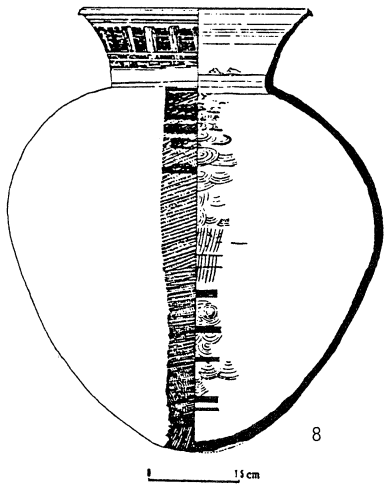
S－2　須恵器の坏蓋3点(2～4)と同じく坩、甕胴部が最下層より出土している。2は天井部からゆるやかな弧を描いて下ってくる体部に口縁部で内側へ屈折するもので端部はほぼ垂直につまみ出されている。3は2に比べ天井部がやや水平に近く、器自体が深く見える。体部と口縁部との境はゆるやかな弧を描きここに一条の凹線もしくは沈線が入る。端部は外端がやや外につまみ出されている。4は体部と口縁部の境が屈曲する他は3に類似している。

S－4　N－0の出土の1と同様の形態をもつ坏蓋(5)が一点出土している。

七ツ塚　坏蓋(5)は七ツ塚調査直前に、墳丘下の表土中にて採集されたものである。天井部はほぼ平坦で器高は低く、端部も単に丸く仕上げられているだけで他の坏蓋に比べるとやや時期的に下るものと思われる。

以上の須恵器については、8を除けばいずれも6世紀後半の特徴を示すものと思われる。この他にS－3でこれらと同時期の須恵器坏身と甕の口縁部が出土している。

またW－6では弥生土器が出土しているが、器形、時期共に不明である。



第6図　N－D出土須恵器大甕

5．小　　結

ここでは本調査において確認し得た事項を簡単に列記してまとめとしたい。

まず南北の排水路敷に設定した各トレンチでは、遺構こそ検出されなかったものの6世紀後半に相当の須恵器が多く出土しており、付近にこれら須恵器を輩出した古墳ないしは集落跡が考えられる。特にN－0で検出の須恵器の大甕は国内では今のところ他に類例を見ないものであり、これが朝鮮半島の産だとすれば当地在住の民もしくは一族が渡来人との間に密接な関係があったものと想像される。またW－6で見られたように当地の北側区域では弥生時代の集落跡の存在が考えられ、今後の調査に期待がかけられる。

次に南北排水路敷の東側で調査を実施した七ツ塚古墳（仮称）では、墳丘は残骸となっていたものの周溝がかろうじて検出され、その形状から、西から東へすぼむ台形の形をとるややいびつな方墳であることが確認された。

この場合の当古墳の平面規模は、周溝をも含めて西辺４ｍ、東辺2.5m、東西辺がほぼ3.5mを測るものとなる。

また時期については墳丘裾の表採遺物の他は出土遺物は無いため、今のところ不明と言わざるを得ない。

（石橋正嗣）

6．ま　と　め

今回の調査での第１義とした七ツ塚の調査では、結果として周溝等があったものの、その周溝の状況、マウンドの堆積土などから、古墳と云うより、むしろ社叢の削り残しであったように思えた。ただ、このばあい、削り残すにおいては何らかの伝承があったものかとも考えられたが、結果は具体的資料がなかった。しかし社叢内に設けたトレンチからは多くの須恵器が検出されていて、しかも、その出土位置は現田面とほぼ等しいことから、あるいは七ツ塚自体、古墳時代の堆積層より新たな時点で盛土がなされた可能性のあることが明らかとなった、つまりこの意味では、社叢の部内すら新たな要因と高さを増したこととなり、それがどのような経過で生じたかは明らかにし得なかった。ただ東社叢の、さらに西側半分には古墳群があることを考えると、古くは西から東へ向って勾配を持っていたことが想像できる。

また北側での試掘区域においては特に新たな知見を得ることができなかったが、調査完了後の大字駑輿丁横での施工断面観察のおり、耕土直下より炭化層、焼土が確認され、この地付近には古墳時代前期頃の集落があったことが判明した。

以上、とりとめのない結果となったが、残念なことに今回の調査では、ほとんど明らかにされたものはなく、今後の周辺部の調査に期すことでまとめとしたい。

第７章　神崎郡能登川町小川・宮の前・庄地遺跡

1 小川遺跡
2 宮ノ前遺跡
3 庄地遺跡
4 新宮遺跡
5 川南城跡
6 小川城跡
7 西郡古墳
8 山路条里
9 山路城跡
10 伊庭城跡
11 法雲寺跡

第1図 位 置 図

1．はじめに

今回の小川地区のほ場整備では、基本的に田面高がほぼ平坦化しているため、面調査は除外できるものの水路の全てが調査対象となり、さらには道路敷についても、湿地が多いことから床上の入れ換えが成されるため、結果として道路敷をも調査を実施することとなった。

今回の調査地は、当地に所在する大前繊維株式会社の建設に際して弥生式土器の出土が報じられた、宮ノ前遺跡、さらには小字地蔵堂から瓦が出たとして、白鳳時代からの寺跡、小川廃寺の推定地ともなっている大字躰光寺と、その北の大字小川の間の水田地と、小川集落の北側で小字庄地を中心とした地域で実施された。

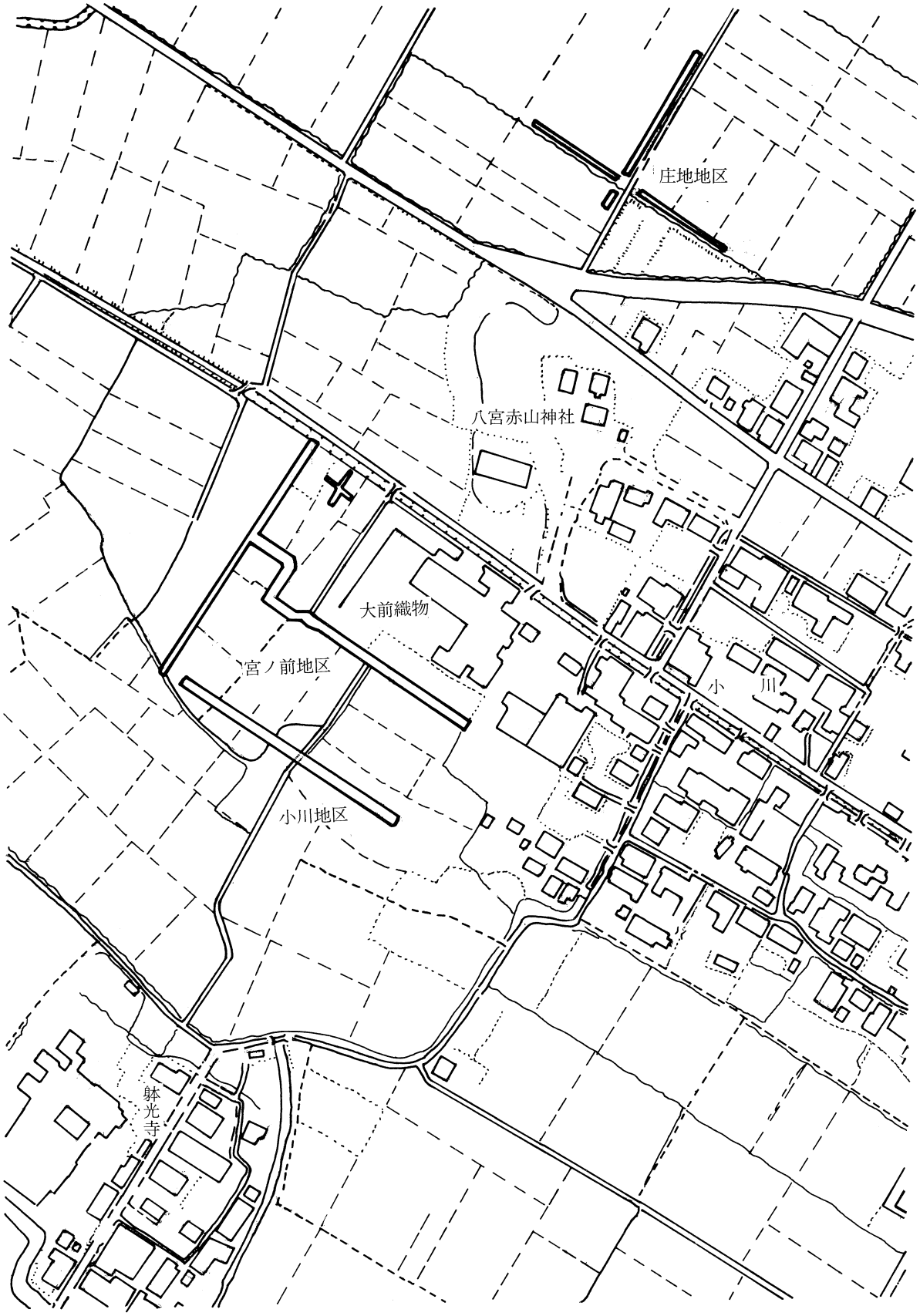
ただ宮ノ前遺跡と小川遺跡は重複する可能性があり、また宮ノ前遺跡と庄地遺跡についても重複する可能性があることから、便宜的に工事の施行内容と位置なものから、小川集落の北側で県道以北を庄地遺跡、大前繊維近くで水路工事の箇所を宮ノ前遺跡、そして躰光寺よりで道路工事箇所を小川遺跡として調査を実施した。

調査は小川遺跡を谷口徹が、宮ノ前遺跡を辻広志が、そして庄地遺跡を石橋正嗣が、地元関係各位の協力を得て分担、実施した。ここに記して謝意を表したい。

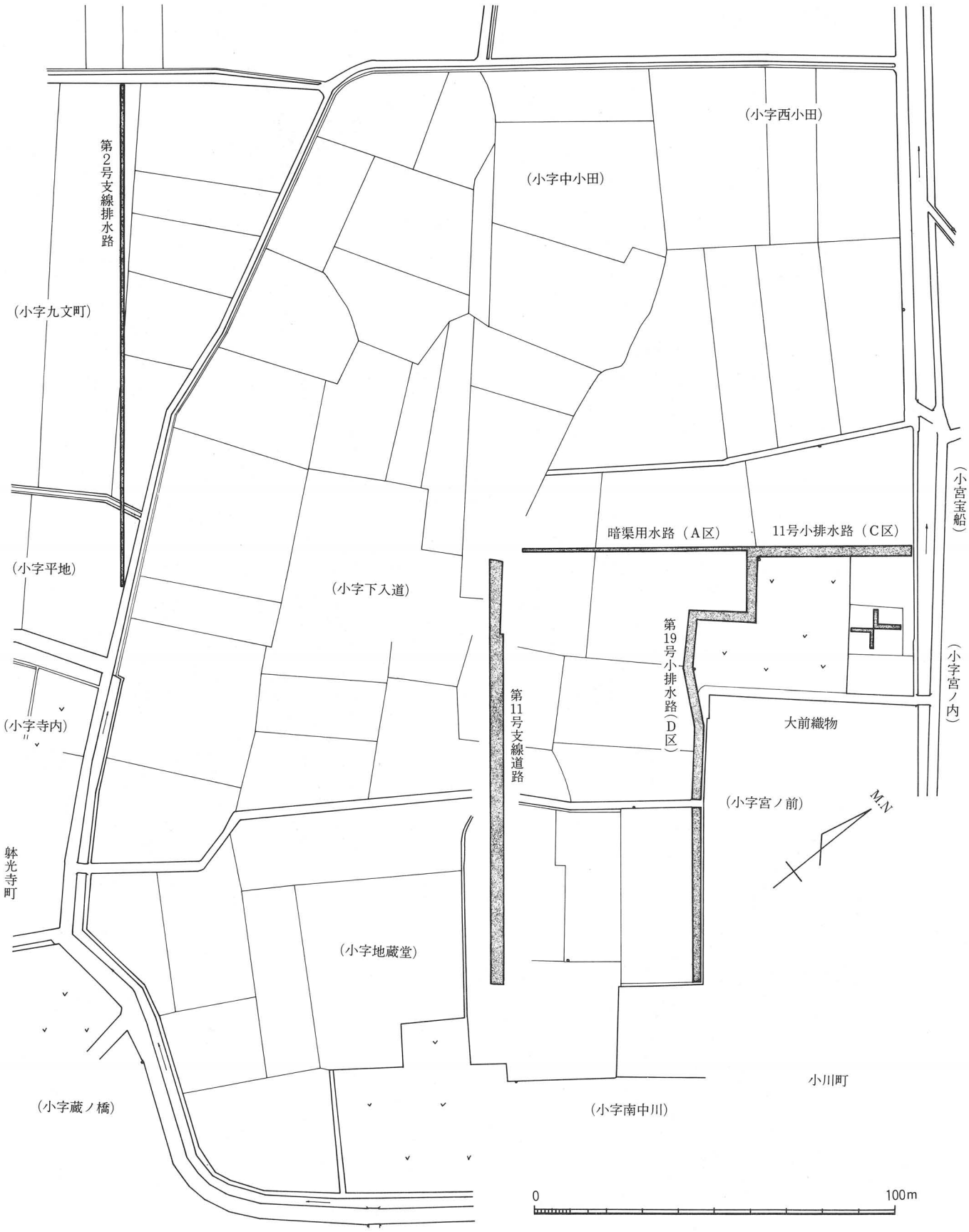
2．位置と環境

国鉄東海道本線と琵琶湖岸との中間で、愛知川の伏流水を集めて流れる大同川の左岸近くに位置する大字「小川」集落は、佐々木六角氏の被官小川氏が居館を構えた地であり、「神崎郡志稿」の記載にあるように小川廃寺の所在地としても知られていた。さらにその後の宮ノ前遺跡の発見と言うことで、一層考古学的に見て、町内での国鉄以西での歴史的中心地として考えられるところであった。この地付近の遺跡としては水没条里として歴史地理の分野で著名な山路条里遺構があり、躰光寺集落の南東端に位置する西郡神社境内には平野部には珍らしく古墳も遺存している。また中世城館としては伊庭、山路、と川南、新宮とあり、これらと一体となってもっとも湖岸よりでの一線を画している。つまり、これらの諸城以西の乙女浜、福堂、阿弥陀堂等には城館がないこと、同時に、これらの諸域の所在する集落は周辺条里と方位を同じくし、それに規制された条里集落であるのに対して、乙女浜、福堂は異なり、かつ栗見新田、出在家の集落は、その名の示すとおり江戸時代後期以降に、愛知川デルタの発達で形成されたことなどから、この一線は中世段階での居住基盤の西限であり、それ以西は生産基盤なり、湖周辺の沼沢地であって、当時の湖岸線上の漁村的なものとして一部乙女浜、福堂が存していたと考えられる。この意味においては当小川の地は比較的安定した地として早くより人々の生活が営なまれてきたと考えられる。

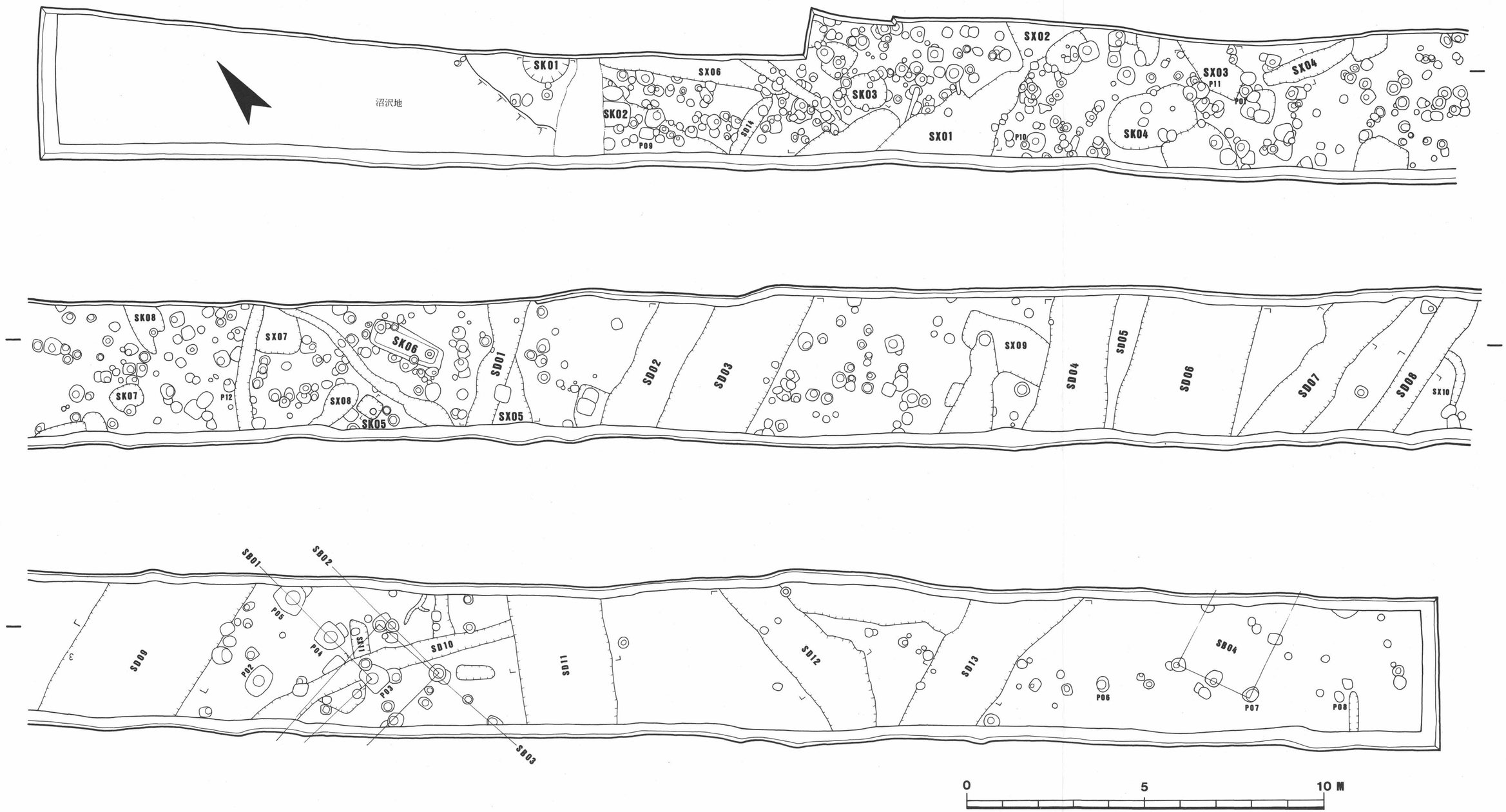
（近藤　滋）



第２図　トレンチ配置図



第3図　トレンチ配置図（小川・宮ノ前）



第４図　支線道路敷地区（小川）遺構全図

3．小川遺跡

(1) 検出遺構

当調査地区は、ほ場整備事業に伴って遺構や遺物の破損が予想される第11号支線道路敷部分に相応する。計画路線に沿って、幅５m、長さ約200mの狭長なトレンチを設定し、発掘調査を実施した。調査は、まず堆積層ごとに順次剝ぎ取っていくことから開始したが、新・旧の耕作土とその床土下に黒褐色粘質土のいわゆる包含層が厚く層を形成していた。遺構の一部は、この包含層上あるいは層中より切り込んでいるが、検出が困難なため、一律に包含層を除去し、黄褐色粘質土の地山が露呈したレベルで遺構検出を行なった。この間、地山に達するまで80cm前後を計る。

調査の結果、当地区は、現在の小川集落を頂点とする微高地の縁辺部に位置しており、西端では急激に比高を減じて沼沢地が広がることが判明した。微高地縁辺部には、弥生時代を中心に歴史時代に至るまでの各期各種の遺構が存在する。以下、それぞれについて順次略記していくことにしよう。

沼沢地

上述のとおり、当調査地区西端で検出した沼沢地である。肩を南北方向に保ちながら、1.7m余急激に落ち込む。底部は、グライ化著しい青灰緑色粘土で構成され、その上に大きく４層が層を重ねて沼沢地は埋没している。最下部は黒灰色泥土層。弥生土器や土師器の他、骨片などが若干混入している。厚さ40cm前後の堆積。その上に暗黒灰色泥土が60cm、次いで淡黒灰褐色泥土が20cm余堆積する。両層中には、緑釉・灰釉陶器片それに馬の骨などが混入している。そして最上部に黒灰褐色粘質土が乗る。この層は、どうやら沼沢地を整地するための客土と考えられ、遺構の広がる微高地上の土が運ばれたためか弥生時代以降の名期の土器細片が混入していた。

掘立柱建物（ＳＢ01）

弥生時代を中心とした遺構密集地のやや南東、各期の溝が錯綜する地点で検出した掘立柱建物である。N－6°－Wとほぼ正南北に近い方位を保つ。狭長なトレンチ調査であるためその全容は把握していないが、現状で２間以上×１間以上を数える。掘り方・柱穴とも大型である点が留意される。掘り方は、一辺が0.8―1.0m四方の隅丸長方形、柱穴は直径0.3m前後を計る。Ｐ03・Ｐ04・Ｐ05について断面観察を行っているので、その結果についても概観すると、掘り方として⑨－⑤の５層、柱穴内に④－①の４層が識別される。⑨は灰褐色泥土層、⑧は茶褐色粘質土層、⑦は暗黒灰褐色粘質土層、⑥は暗黒褐色粘質土層、⑤は黒灰褐色粘質土層をそれぞれ呈す。⑤層中には地山（黄褐色粘質土）のブロック状混入が著しく、地山を混ぜて築き固めたのかたいへん良く締っている。柱穴内の④は暗黒灰色泥土層、③は茶褐色粘質土層、②は暗黒灰褐色粘質土層、①は黒褐色粘質土層である。掘り方の土に比べて全体に黒色味が強い。柱筋は良く通っており、柱間は正確に各1.6mである。溝ＳＤ10を切り込んで構築されている。

掘立柱建物（ＳＢ02）

ＳＢ01に重複し、そのやや南東で検出した掘立柱建物である。方位をＳＢ01に同じくN-6°-Wに保つ。現状で各１間以上の規模が確認される。掘り方は長径0.5mの円形に近い楕円形、柱穴は直径0.2～0.3mを計る。掘り方・柱穴ともＳＢ01に類する色調の土層で埋まる。ＳＢ01に近い時期の構築物と予想される。柱筋は現状で良く通っており、柱間はいずれも1.8mである。

掘立柱建物（ＳＢ03）

ＳＢ01・ＳＢ02に一部重複する掘立柱建物。方位をN-18-Wに保つ。ＳＢ01・ＳＢ02と比べてわずかに西に偏している。現状で２間以上×１間以上を計る。掘り方は一辺0.4～0.6mの隅丸長方形、柱穴は直径0.2～0.3m。掘り方に黒灰褐色粘質土層、柱穴に灰褐色粘土層が充塡されている。柱穴の土層は粘性が強い。柱筋は良く通り、柱間は1.8m又は2.2mである。ＳＢ02や溝ＳＤ10に切られる形で存在する。

掘立柱建物（ＳＢ04）

調査地区の南東端近くで検出した掘立柱建物。方位をN-26°-Wに保ち、桁行１間以上、梁行２間を計る。掘り方は径0.4m前後の楕円形、柱穴は直径0.2m。柱筋は比較的良く通り、柱間は桁行1.6m、梁間1.1mである。Ｐ07の底部には礎板が残っており、又、周辺のＰ06には根石が、Ｐ08には柱根がそれぞれ遺存していた。

土壙（ＳＫ01）

沼沢地のすぐ東で検出した円形土壙である。過半を調査域外に置く。径1.3m、深さ0.5m、断面は深い椀状を呈している。覆土は５層が識別され、⑤茶黒色粘質土、④茶灰色粘土層、③茶灰色粘質土層、②地山のブロック状混入層、①黒色包含層がそれぞれレンズ状堆積を示す。③・②・①各層より弥生中期後葉の土器片若干が出土している。

土壙（ＳＫ02）

ＳＫ01の南で検出した土壙。一部、現代の撹乱溝により破壊されている。一辺0.7mの隅丸長方形を示し、深さ0.2mの浅い皿状である。床面に火を受けた痕跡が認められる。壙内は黒褐色粘質土の単純層で埋まる。層内には焼土塊や炭化物片を多く含み、弥生中期後葉の土器片が若干混入している。

土壙（ＳＫ03）

南北に連続する３つの土壙の最も南に位置する土壙である。径1.1m、深さ0.3mを計り、断面は皿状を呈す。壙内は２層が識別される。②暗黒灰褐色粘土層、①黒褐色粘質土層である。②層中には炭化物片の混入がみられ、両層より弥生中期後葉の土器片が数点出土している。

土壙（ＳＫ04）

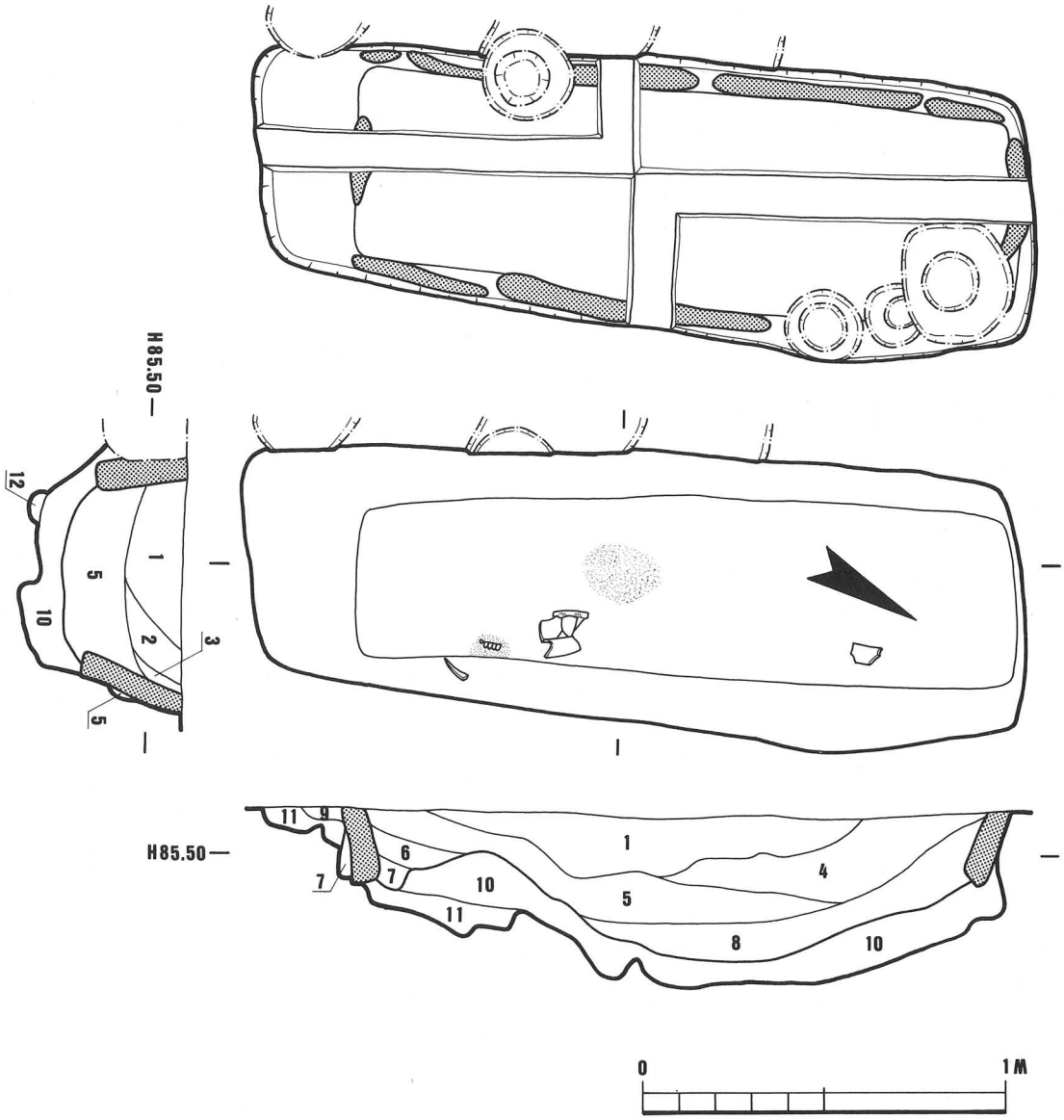
長軸2.6m、短軸1.5mの小判形を示す土壙。深さ0.3mの浅い椀状を示し、覆土として15層が識別される。⑮黒褐色粘質土層、⑭灰褐色粘質土層、⑬暗灰色粘質土層、⑫黄灰色粘質土層、⑪暗黄灰色粘質土層、⑩黒色炭化層、⑨黒灰色炭化層、⑧淡灰色粘質土層、⑦灰褐色粘質土層、⑥暗灰色粘質土層、⑤茶灰色粘質土層、④茶褐色粘質土層、③暗茶灰色粘質土層、②茶灰色粘質土層、①淡茶灰色粘質土層の各層が薄いレンズ状堆積をなす。⑮～⑮層中には、地山のブロック状混入が認められる。⑨・⑩層中からは、両層内に貼り付くように弥生中期中葉の壺・甕などが、比較的まとまった形で出土した。⑥～①の各層内には、炭化物片の混入が認められる。

方形土壙（ＳＫ05）

一辺0.7m、深さ0.7mの方形を呈する土壙。わずかに断面が袋状となる。当初、柱穴かとも考え、断面観察を行なったが、柱根が検出されず、覆土として５層が確認された。⑤暗黒灰色泥土層、④明黒灰褐色粘質土層、③暗黒褐色粘土層、②黄灰褐色粘質土層、①黒褐色粘質土層が層を重ねる。⑤・③・①より弥生中期と思しき土器細片が出土している。②層は地山の一括流入であろう。

木棺墓（ＳＫ06）

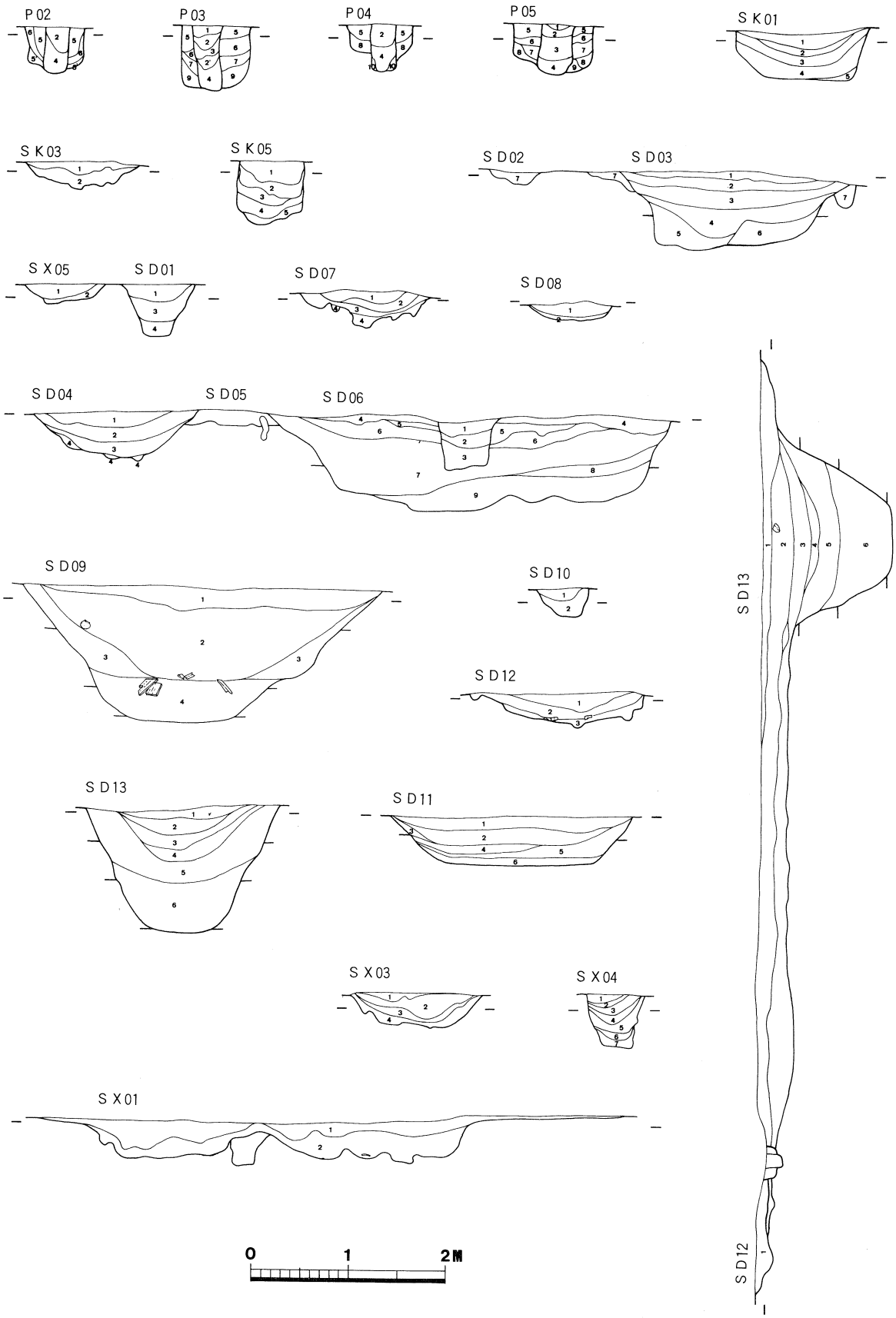
ほぼ南北方向に長軸を置いた木棺墓である。周囲に周溝等はみあたらない。墓壙は長軸2.1m、短軸0.8m、深さ0.5mを計り、そのやや北に偏して木棺が埋置されていた。棺材の木質はすでに土にかえり、痕跡のみ追認でき



第５図　木棺墓ＳＫ06実測図（小川）

る。その痕跡から判断すると、木棺の側板および木口板は明瞭に確認できるものの、蓋板および底板は未確認である。蓋板については、その遺存状態からすでに削平された可能性が高い。一方、底板については、断面をみても棺底が椀状に弧を描いて落ち込んでおり、当初より存在しなかった可能性が考えられる。板材に替えて植物質のものを敷いていたのではないだろうか。木棺の痕跡から推定すると、棺の長さ1.8m、幅0.7m、最深部0.4mである。棺内は精査にもかかわらず、人骨を検出しなかった。わずかに歯の一部、そしてその近くで骨粉が若干認められたにすぎない。歯は鑑定を依頼したが、遺存が悪く、人間の歯である以上のことは不明であった。ただ、歯の位置から、被葬者が南枕であったことは推察できよう。

断面観察の結果、墓壙の掘り方として⑫～⑨の４層、棺内堆積土として⑧～①の８層が識別される。両者を画る棺材の痕跡は、暗黒褐色粘質土である。掘り方は、⑫黒灰色泥土層、⑪灰褐色粘質土層、⑩暗灰褐色粘質土層、⑨淡黒灰褐色粘質土層が層を重ねる。⑪・⑩両層中には地山のブロック状混入が著しい。棺内は⑧黒灰褐色泥質土層、⑦黒灰色粘質土層、⑥黒灰褐色粘質土層、⑤黒褐色粘質土層、⑨淡黒褐色粘質土層、③暗灰褐色粘質土層、②黒灰褐色粘質土層、①暗黒灰褐色粘質土層である。⑧・⑤両層の最下部には、炭化層の薄い層状介入が認めら


P02
P03
P04
P05
SK01
SK03
SK05
SD02
SD03
SX05
SD01
SD07
SD08
SD04
SD05
SD06
SD09
SD10
SD12
SD13
SD11
SX03
SX04
SX01
SD13
SD12
0
1
2M

第6図　遺構断面図（小川）

れ、先述の底板材に替わる植物質敷物の存在を推論付けている。⑤層最下部では、既述の歯や骨粉を確認する。その他、各層とも炭化物片や焼土痕の混入があり、⑤層の甕を始めとする土器片もしばしば出土した。いずれも弥生時代中期後葉の所産である。

溝（ＳＤ01）

東から西へ向かう１条の溝である。不定形の落ち込み（ＳＸ05）を切って流れる。幅0.8m、深さ0.6m、断面はＶ字状をなす。覆土として④暗黒灰色泥土層、③黒灰色粘質土層、①黒褐色粘質土層が識別される。④層に炭化物片、③層中に地山のブロック状介入が著しい。

溝（ＳＤ02・ＳＤ03）

両溝とも東から西へと流路を刻む溝である。ＳＤ02はＳＤ03に切られる形で存在する。ＳＤ02は幅0.5m、深さ0.2mの浅く小さな溝である。黒灰褐色粘質土層の単純層で埋まる。ＳＤ03は幅2.8m、深さ0.8m、断面椀状を呈す大型の溝。７層が識別される。⑦黒灰褐色粘質土層、⑥暗黒褐色粘土層、⑤青灰黒色粘土層、④黒灰褐色腐植土層、③暗黒灰色粘土層、②黒灰色粘質土層３①灰褐色粘質土層が順次層状堆積をなす。④層は植物遺体が多量に混入した腐植土層。②層中には酸化マンガンの沈着が著しい。又、⑥・②両層からは須恵器片などが出土している。

溝（ＳＤ04・ＳＤ05・ＳＤ06）

互いに相接しながら東から西へと流路を刻む３条の溝である。ＳＤ04とＳＤ06がともにＳＤ05を切り込んでいる。いずれの溝も現畦畔と並行関係にあり、条里遺構との関連が留意される。ＳＤ04は、幅1.7m、深さ0.5m、断面椀状の溝。各堆積層が綺麗なレンズ状堆積をみせる。④層は黒灰褐色粘土層、以下③黒褐色粘土層、②暗黒灰色粘質土層、①黒灰色粘質土層である。ＳＤ05は、左右よりＳＤ04とＳＤ06に切られてその面影をとどめないが、黒褐色粘質土の単純層で覆われた深さ0.2m余の浅い溝である。そしてＳＤ06は、この３条の溝の中では最大のもの。幅4.2m、深さ1.0m、断面はやや深い椀状を呈している。断面観察では、そのほぼ中央を新しく土壙が切り込んでいる。土壙は、③黒灰緑色粘土層、②淡黒灰色粘土層、①黒灰色粘土層の３層よりなり、以下⑨～④の各層がＳＤ06の覆土である。⑨は暗黒灰緑色粘土層、⑧淡黒褐色粘土層、⑦暗黒褐色粘土層、⑥黒褐色粘土層、⑤淡黒灰緑色粘土層、④黒灰褐色粘質土層である。⑦層中からは、木製品の他、歴史時代の土器片が出土している。

溝（ＳＤ07）

東から西へ流れる１条の溝である。幅1.2m、深さ0.4m、断面は椀状を呈す。覆土として４層が識別され、④黒褐色粘土層、③淡黒褐色粘土層、②黒灰色粘土層、①黒灰褐色粘質土層が順次層を重ねる。溝底は凹凸が著しく、そこに堆積したのが④層である。②層中には地山のブロック状混入が認められる。セクション帯近くの北側③層中より須恵器提瓶などが出土している。

溝（ＳＤ08）

ＳＤ07のすぐ南に位置し、ＳＤ07と同方向の流れを刻む溝である。幅0.8m、深さ0.3m、断面は浅いながらも明確な椀状を示す。溝中には２層の堆積をみる。②層は黒褐色泥土層、①層は黒灰褐色粘質土層である。②層の最下部には灰褐砂泥が薄く層状に堆積しており、ゆるやかな流れのあったことを物語っている。

溝（ＳＤ09）

流路を東から西へ保つ大型の溝である。幅3.7m、深さ1.4m、断面は外に大きく開いた椀状を呈す。溝は、通常地山と称している黄褐色粘質土より切り込まれ、そのグライ化層、次いで灰褐色泥土層を経て灰白色砂層中に

その底部を置く。黄褐免粘質土は比較的粘性に富んだ湿地性の泥土である。その下の灰白色砂層は粒子の細かい砂の層で、湧水が著しい。この溝の覆土は4層が確認される。④暗茶褐色腐植土層、③黒灰緑色粘土層、②暗黒灰色粘土層、①黒灰褐色粘土層の各層である。④層中には上部で木製品が集中していた他、若干の土器片の混入が著しく、土器が最も集中して出土した層である。①層でも若干土器が出土する。出土土器は、いずれも弥生後期のものであるが、調査時にはその取り上げに留意し、④層をⅢ層、③・②両層をⅡ層、①層をⅠ層に分層して取り上げた。ところで、この溝は、その構築時期を考慮しても、集落を画す環濠であった可能性が高い。

溝（ＳＤ10）

南東から北西へと若干弧を描いて流れる溝である。掘立柱建物のＳＢ01・ＳＢ02に切られ、ＳＢ03を切り込んでいる。幅0.5m、深さ0.3m、断面はＵ字状を呈している。覆土は2層が識別され、②黒灰褐色粘質土層、①黒褐色粘質土層の両層により埋没する。

溝（ＳＤ11）

流れを北東より南西に刻む溝である。幅2.5m、深さ0.5m、断面はやや浅い椀状を示す。6層の覆土が識別される。⑥層は淡黒褐色泥土層、以下⑤暗灰褐色泥土層、④青灰緑色泥土層、③暗灰褐色泥土層、②灰褐色泥土層、①淡黒灰褐色粘質土層の層順である。⑥はやや腐植味を帯びた泥土。④は地山の一括流入と考えられる。②層には炭化物片が多く含まれ、砂の層状介入が認められる。流れの存在を暗示している。

溝（ＳＤ12）

やや不規則ながら北より南へ流れる1条の溝である。幅0.8m、深さ0.3m、断面は浅い皿状を示す。覆土として3層が確認される。③淡黒灰色粘土層、②黒灰色粘土層、①黒灰褐色粘土層である。③層中には地山のブロック状混入が認められ、①層には酸化マンガンの沈着が著しい。又、②層には須恵器片の他、丸瓦・平瓦が若干混入している。調査地区南方一帯に広がるとされる小川廃寺との関連が留意される溝である。

溝（ＳＤ13）

ＳＤ12の南で検出した溝である。流路を東より西に刻む。幅0.2m、深さ1.4m、断面は深い椀状を呈す。ただし、溝の北側では、その上部が直角方向に大きく張り出している。この溝も、先述のＳＤ09と同様、黄褐色粘質土より切り込まれて、灰白色砂層中にその底部を置く。断面観察の結果、覆土として6層が識別された。⑥茶褐色腐植土層、⑤灰褐色粘土層、④黒褐色粘土層③暗黒褐色粘土層、②暗黒灰色粘土層、①黒灰褐色粘質土層の各層である。⑥層は広葉樹を主体とした葉枝が薄く粘土と互層をなした腐植土層である。⑤層中には若干の炭化物片が認められる他、リン分の小粒子を多く含んでいる。④～②の各層は炭化物片の混入著しく、古墳時代前期の土師器が多数出土した。①層は上部に酸化マンガンの沈着があり、古墳時代前期の土師器の他、須恵器の混入が認められた。遺物の取り上げに際しては、⑥層をⅣ層、⑤層をⅢ層、④～②層をⅡ層、①層をⅠ層に分層の上、取り上げた。ただし、Ⅳ・Ⅲ両層はほとんど無遺物層であり、この溝に遺物が流入し始めるのは、Ⅱ層以降のことである。

不定形落ち込み（ＳＸ01）

土壙（ＳＫ03）の南に位置する不定形の落ち込みである。東側はＳＸ02に連接し、西側はトレンチ外に伸びる。最大幅6.0m、最深部で0.4mを計る。断面観察の結果、②淡黒灰褐色粘土層、①黒褐色粘質土層の2層が識別された。②層中には、地山のブロック状混入が認められ、層中より弥生中期の土器片などが若干出土している。①層は酸化マンガンの沈着が著しい。用途不明の遺構である。

不定形落ち込み（ＳＸ02）

西のＳＸ01に連接する不定形落ち込み。最大幅2.2m、最深部で0.3mを計る。断面は皿状を呈す。覆土は黒褐色粘質土の単純層。弥生中期の土器片が若干混入している。

不定形落ち込み（ＳＸ03）

ＳＫ04の北に位置する不定形落ち込み。最大幅1.4m、深さ0.4m、断面は椀状を示す。落ち込み内は、④暗黒灰褐色粘土層、③黒色炭化層、②暗灰褐色粘質土層、①黒灰褐色粘質土層の４層が確認される。③層中には炭化物片のほかにも多量の焼土塊が含まれており、弥生中期の土器片が混入する。

不定形落ち込み（ＳＸ04）

ＳＸ03の北にあり、それを直交する落ち込みである。ＳＸ03とともに、陸橋部のある方形周溝墓の周溝であった可能性を残すが、その主要部がトレンチ外に伸びているため、想定の域を出ない。落ち込みは、幅0.6m、深さ0.6m、断面はＵ字状を呈し、覆土として７層が識別される。各層ともレンズ状の薄い堆積を示す。⑦層は暗黒灰色泥土層。以下⑥黒灰色粘質土層、⑤暗黒灰褐色粘質土層、④淡黒灰褐色粘質土層、③黒灰褐色粘質土層、②明黒灰褐色粘質土層、①黒褐色粘質土層である。⑦層下部には炭化層が薄く層状介入しており、層中より弥生中期の土器片が出土する。③・②両層でも炭化物片の混入が認められる。

不定形落ち込み（ＳＸ05）

ＳＤ01に切られる形で検出した不定形の落ち込みである。幅0.8m、深さ0.2mの浅い皿状を呈す。覆土として②淡灰褐色砂泥層、①黒褐色粘質土層の両層が確認される。②層下部では、底部に貼り着く様相で弥生中期の土器片が若干出土した。

(2)　出土遺物

道路敷地区で検出した遺構は、遺構内から出土した土器の分類から、弥生時代中期を主体に、弥生時代後期、古墳時代前期、古墳時代後期以降に大別される。まず、各時代ごとの遺構を列挙することから始めよう。弥生時代中期の遺構として、土壙（ＳＫ01・ＳＫ02・ＳＫ04・ＳＫ05・ＳＫ08）、土壙墓（ＳＫ06）、溝（ＳＤ01）、不定形の落ち込み（ＳＸ01・ＳＸ02・ＳＸ03・ＳＸ04・ＳＸ05・ＳＸ08）などをあげることができる。又、建物跡としてまとめることはできなかったが、柱穴（Ｐ９・Ｐ10・Ｐ11）内から同期の遺物が出土している。弥生時代後期の遺構は、土壙（ＳＫ03・ＳＫ07）、溝（ＳＤ09・ＳＤ11）、不定形落ち込みとしてＳＸ06がある。古墳時代前期の遺構は、溝（ＳＤ13）に限られるが、出土品の量としては豊富である。古墳時代後期以降の遺構には、掘立柱建物としてまとまった（ＳＢ01・ＳＢ02・ＳＢ03・ＳＢ04）の他にもＰ01から出土した土師器の皿や、Ｐ12から出土した古式の須恵器坏蓋などがある。その他、溝（ＳＤ02・ＳＤ03・ＳＤ04・ＳＤ05・ＳＤ06・ＳＤ07・ＳＤ08・ＳＤ10・ＳＤ12・ＳＤ14）や不定形落ち込み（ＳＸ07・ＳＸ09・ＳＸ10・ＳＸ11）など比較的豊富である。もちろん、以上に一応時期分けした遺構の内には複合遺跡の宿命として、時期を異にする遺物の混入もしばしば存在しており、時期決定に不安を残している。

次に列挙した遺構の中で、出土遺物として注目されるものを掲げておこう。まず、弥生時代中期の関係では、全体として後葉の土器が多い中で、土壙（ＳＫ04）からのものはそれより古く、しかも同一層内のいわゆる一括出土品である点で好資料といえる。弥生時代後期の溝（ＳＤ09）と古墳時代前期――庄内期～布留期の溝（ＳＤ13）からは、ともに豊富な出土品を得た。器種もバラエティーに富んでいる。土器の取り上げに際しては、ＳＤ09を３層、ＳＤ13を４層に分層のうえで取り上げた。それが意味ある分層であり得たかどうかについては、今後の研究の成果を待ちたい。又、古墳時代以降の遺物の中では、溝（ＳＤ12）などが小川廃寺との関連の中で留意

されるところであろう。

(3) 小川遺跡の獣骨について

小川遺跡の宮の前地区より出土した獣骨31点、小川地区（沼沢地）出土のもの８点について、その種類および部位について観察を行った結果を報告する。いずれも断片化しており、一部には人為的に破損させられたと思われるものが含まれている。宮の前地区のものはニホンイノシシ（Sus scrofa leucomystax TEMMINCK）を主とし、ニホンジカ（Cervus nippon TEMMINCK）および種属不明の小動物（ネズミ類？）が混在しているのに対し、小川地区（沼沢地）のものは、ほとんどウマ（Equus caballus LINNE）に限られている。

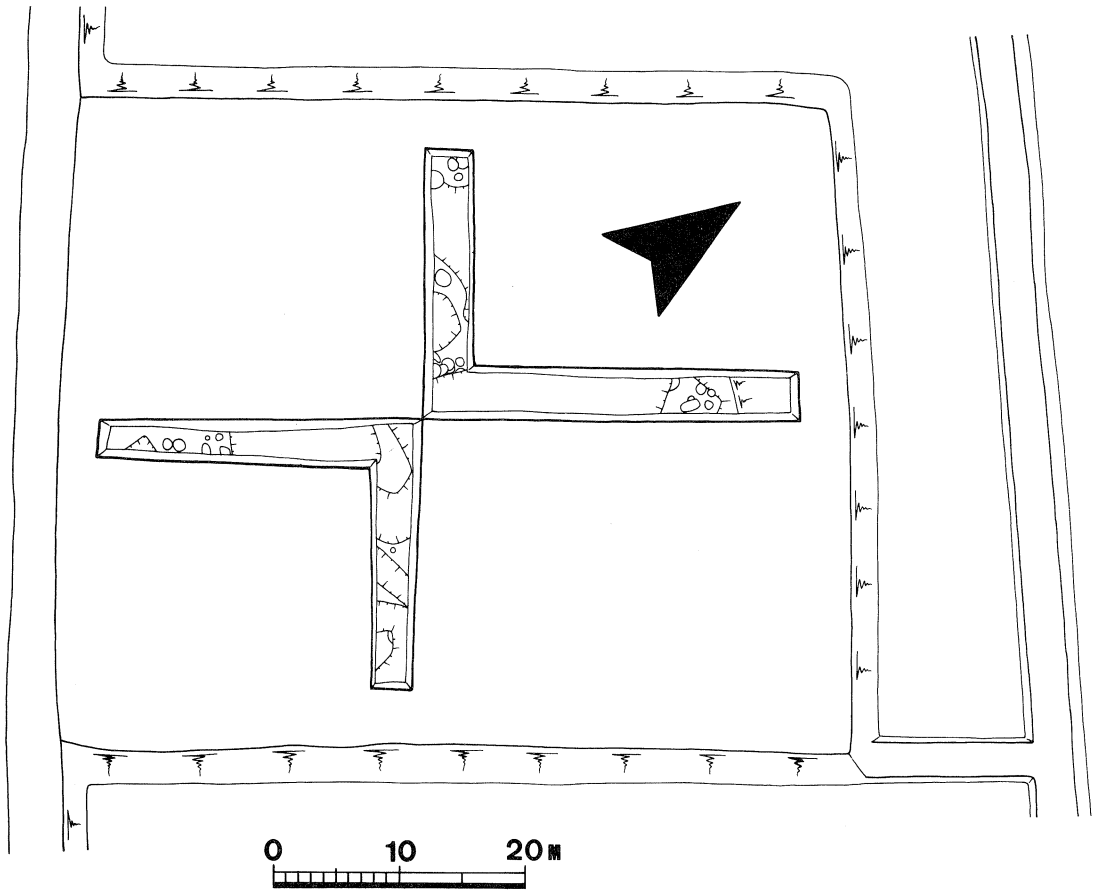
亀井節夫（京都大学）

(4) 小　　結

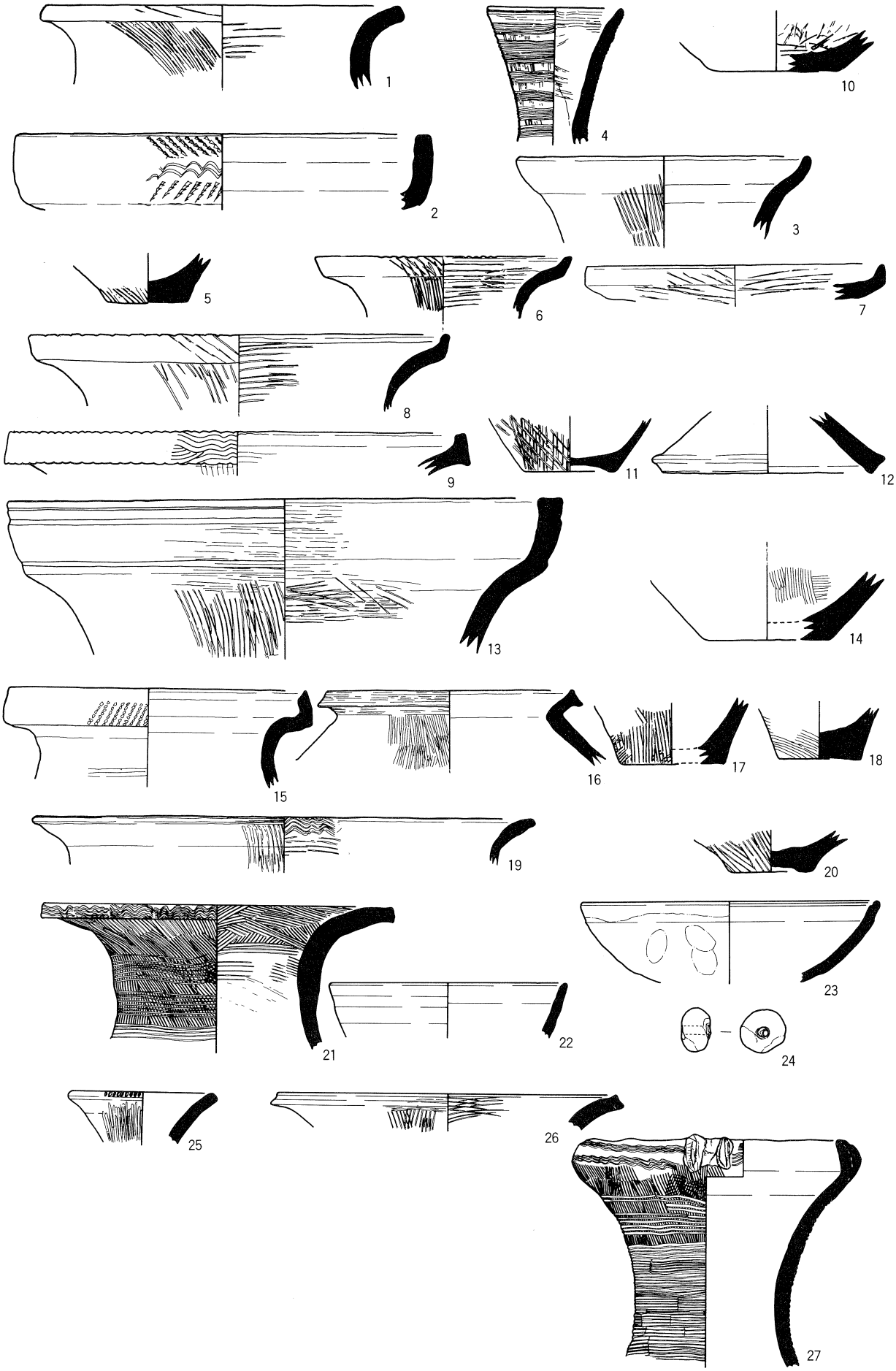
小川地区は、現在の小川集落の西側に広がる水田域である。今回は、ほ場整備事業に伴う道路敷部分について、発掘調査を実施した。調査の結果、当調査地区は、小川集落を頂点とする微高地の縁辺部に位置していることが判明し、西端では２m近く急激に比高を減じて沼沢地が広がっていた。この地に、人がその痕跡を残したのは、弥生時代中期にさかのぼる。人々は微高地縁辺に居を構え、沼沢地で原始的な水稲農耕を営んでいたものと思われる。その後、古墳時代を経て歴史時代に至るまで、人々は永々とこの地を生活の場とし、やがて近隣に小川「廃」寺の建立をみることになる。

今回の調査は、狭長なトレンチ調査という調査上の制約にもかかわらず、遺構・遺物にいくつかの貴重な発見があった。能登川の歴史、さらには湖東、近江地方の歴史を解明する貴重な資料になるものと思われる。

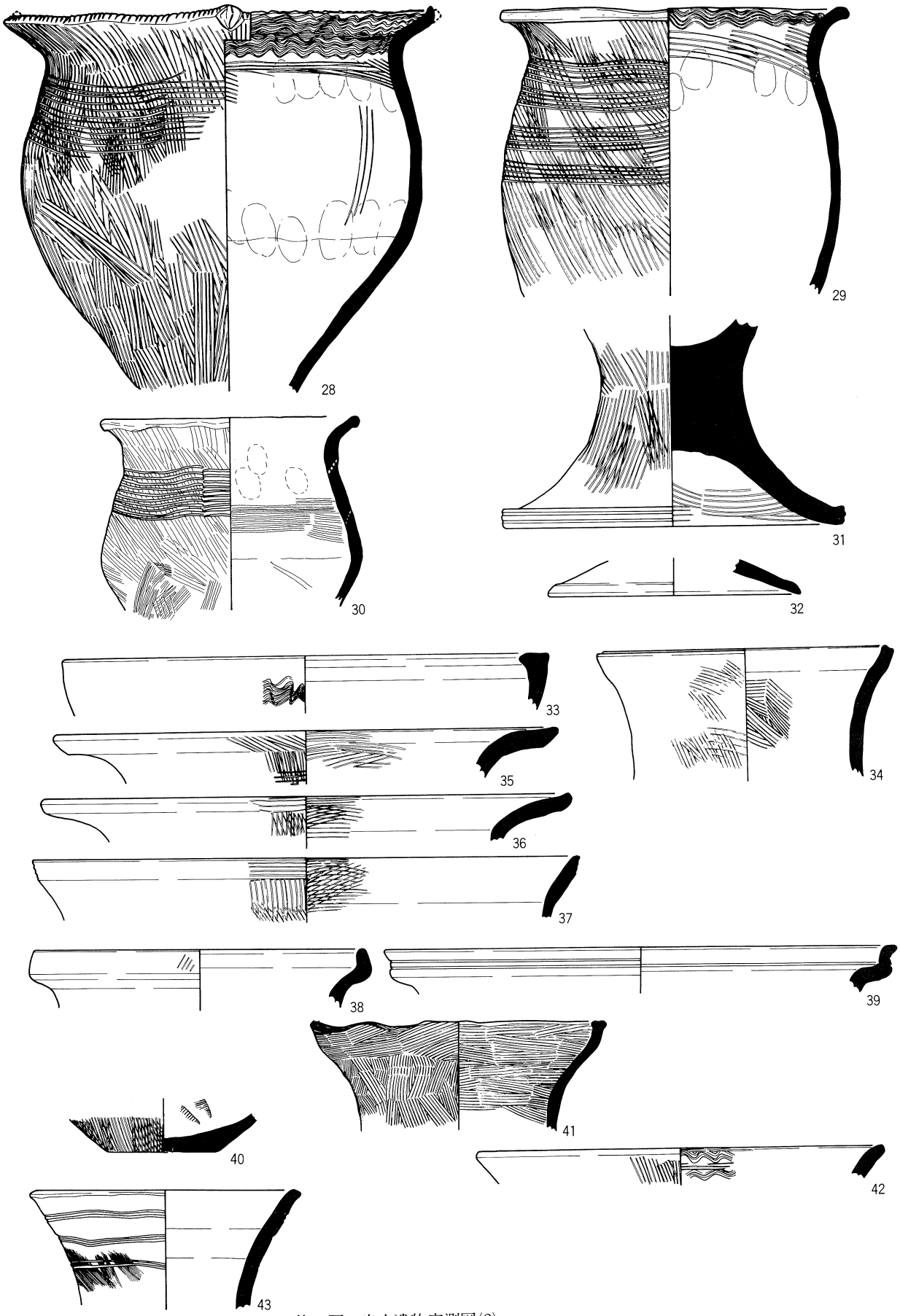
畑地の試掘調査



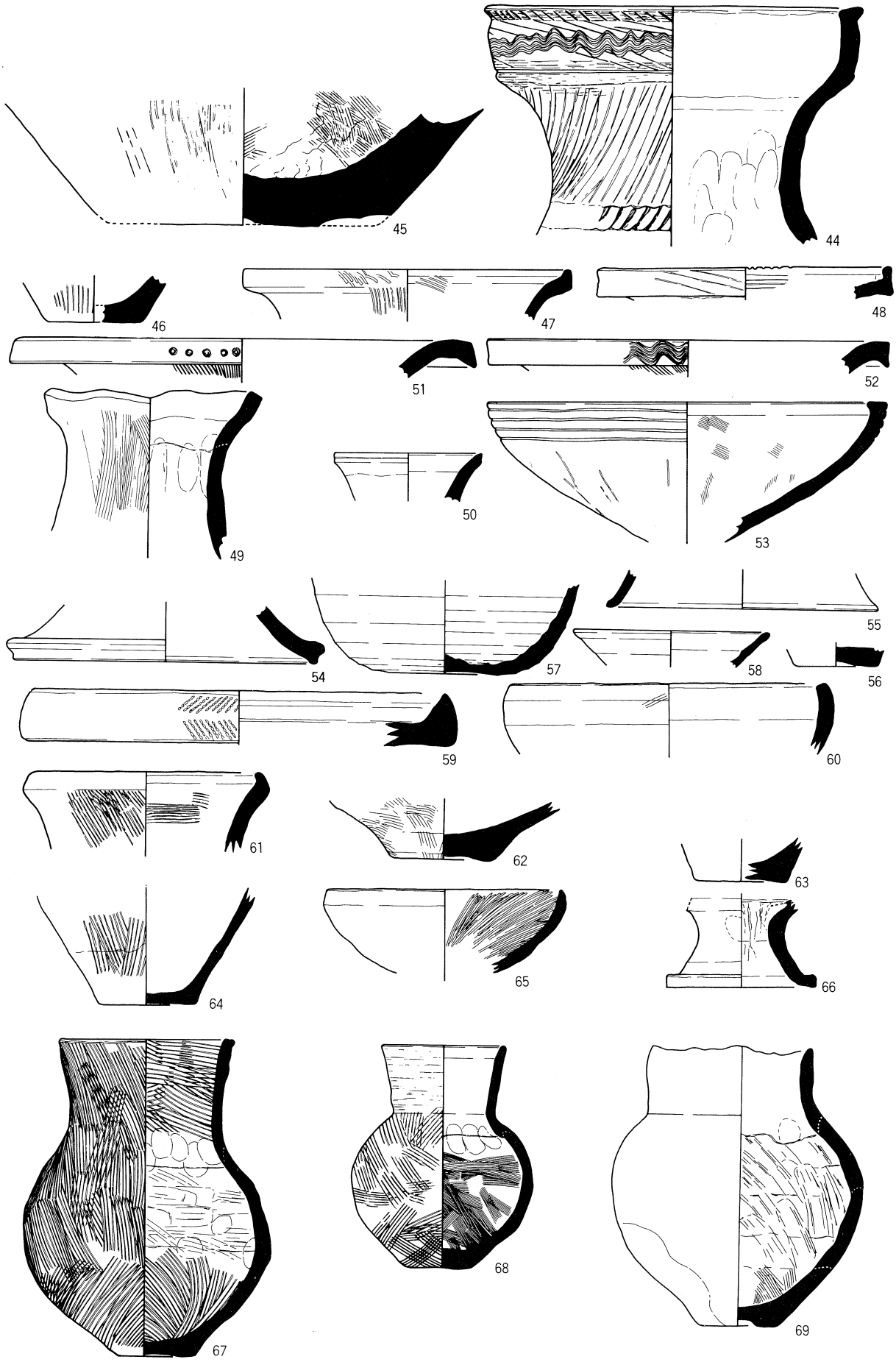
第７図　畑地試掘調査実測図



第８図　出土遺物実測図(1)
ＳＫ-06(1～12)，ＳＫ-01(13～18)，ＳＫ-11(19.20)，ＳＸ-01(21～24)，ＳＸ-02(25.26)，ＳＫ-04(27)

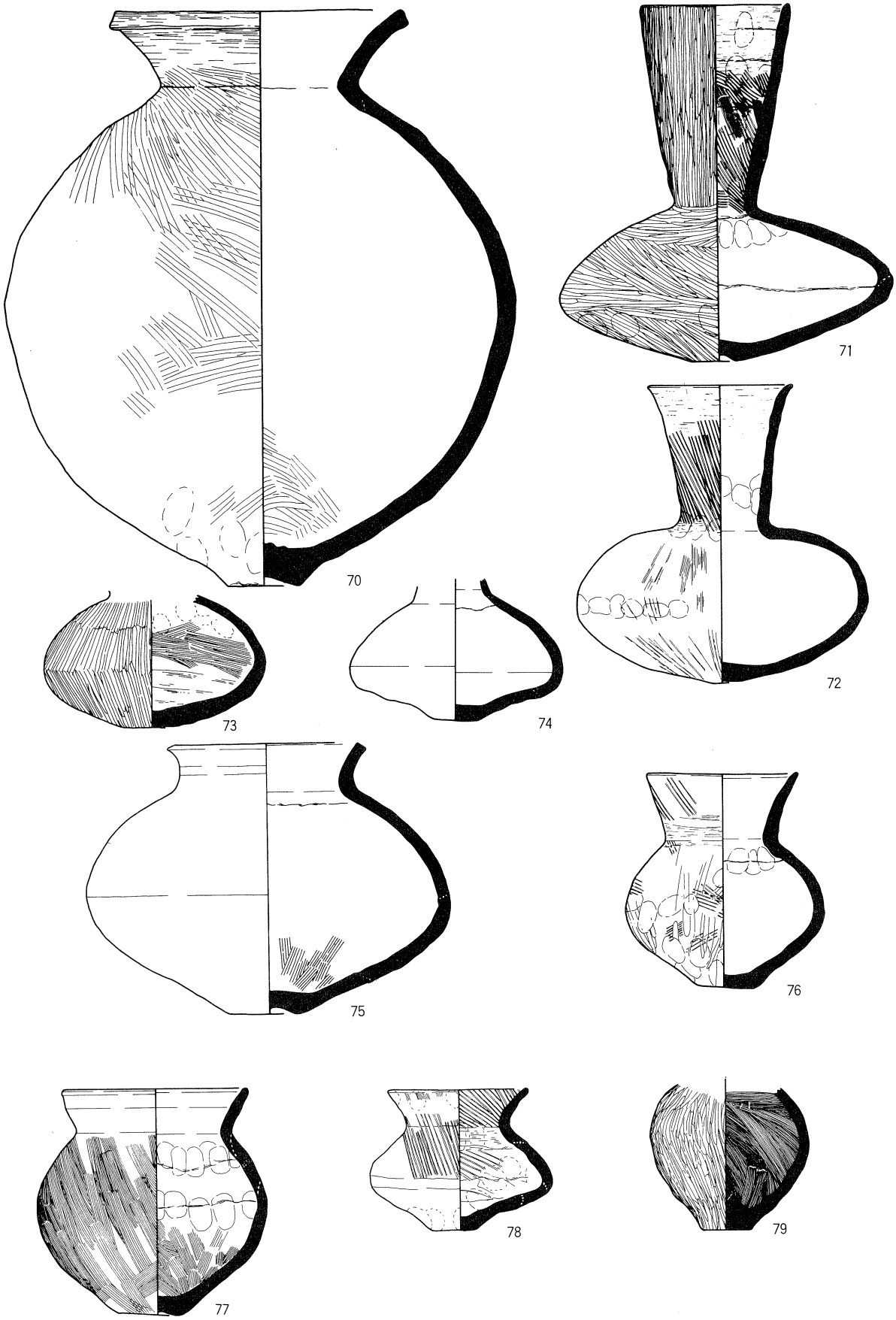


第９図　出土遺物実測図(2)
ＳＫ-04(28～32)，Ｐ-11(33～40)，ＳＸ-04(41～42)，ＳＸ-08(43)

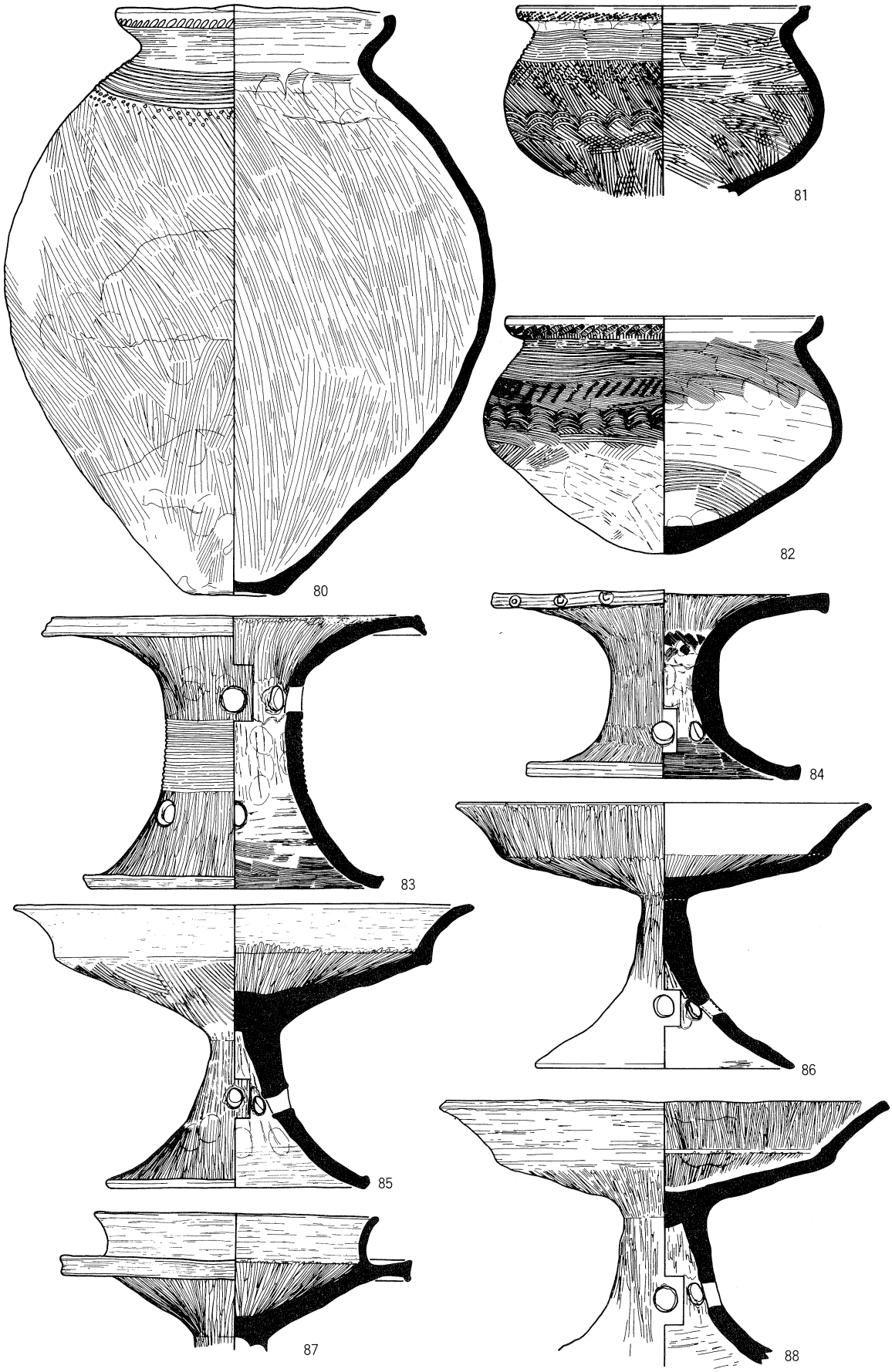


第10図　出土遺物実測図

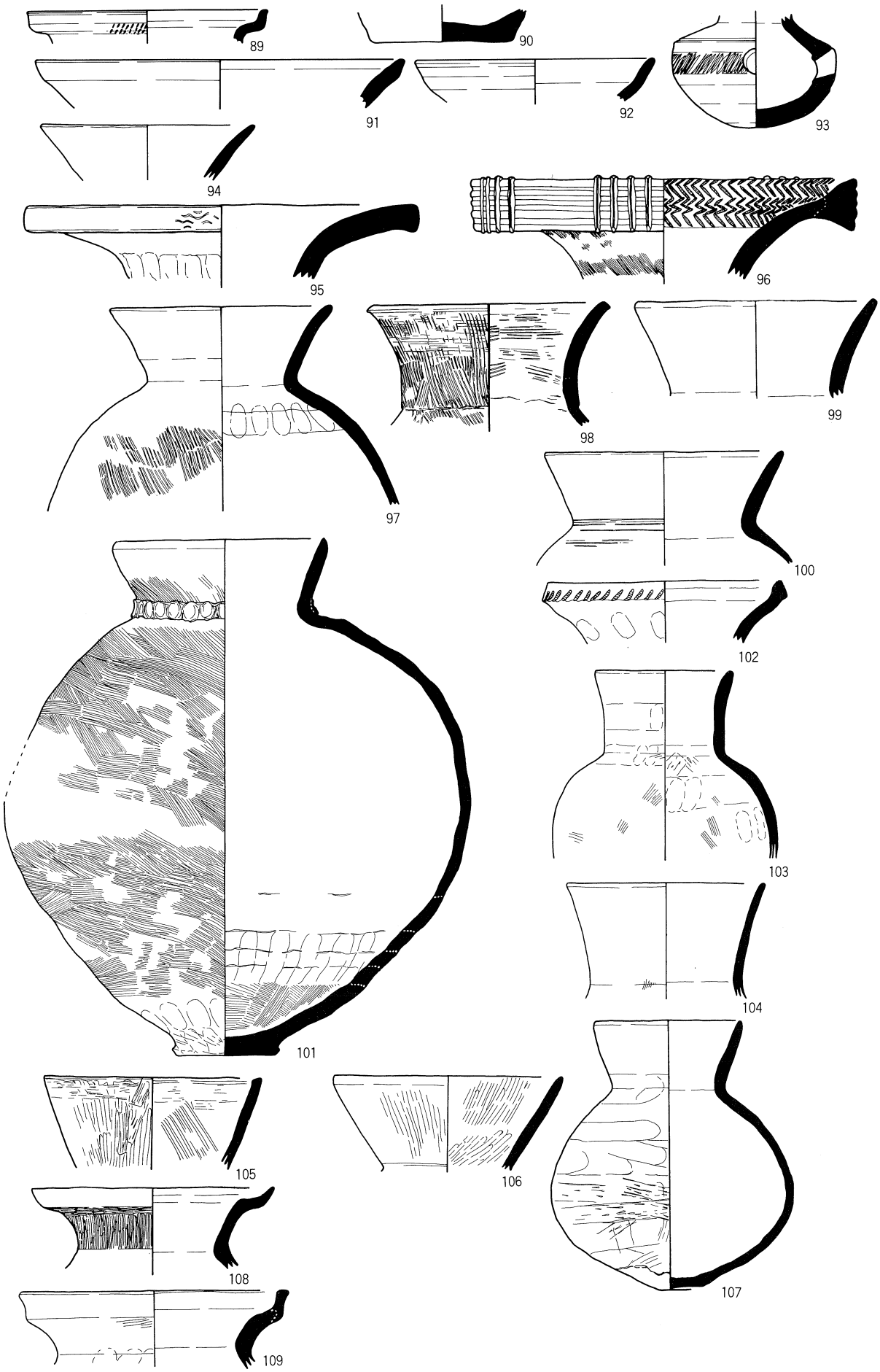
ＳＸ-08(45～46)，ＳＫ-05(47～48)，ＳＤ-01(49～58)，ＳＫ-03(59～65)，ＳＫ-07(66)，ＳＤ-09(67～69)



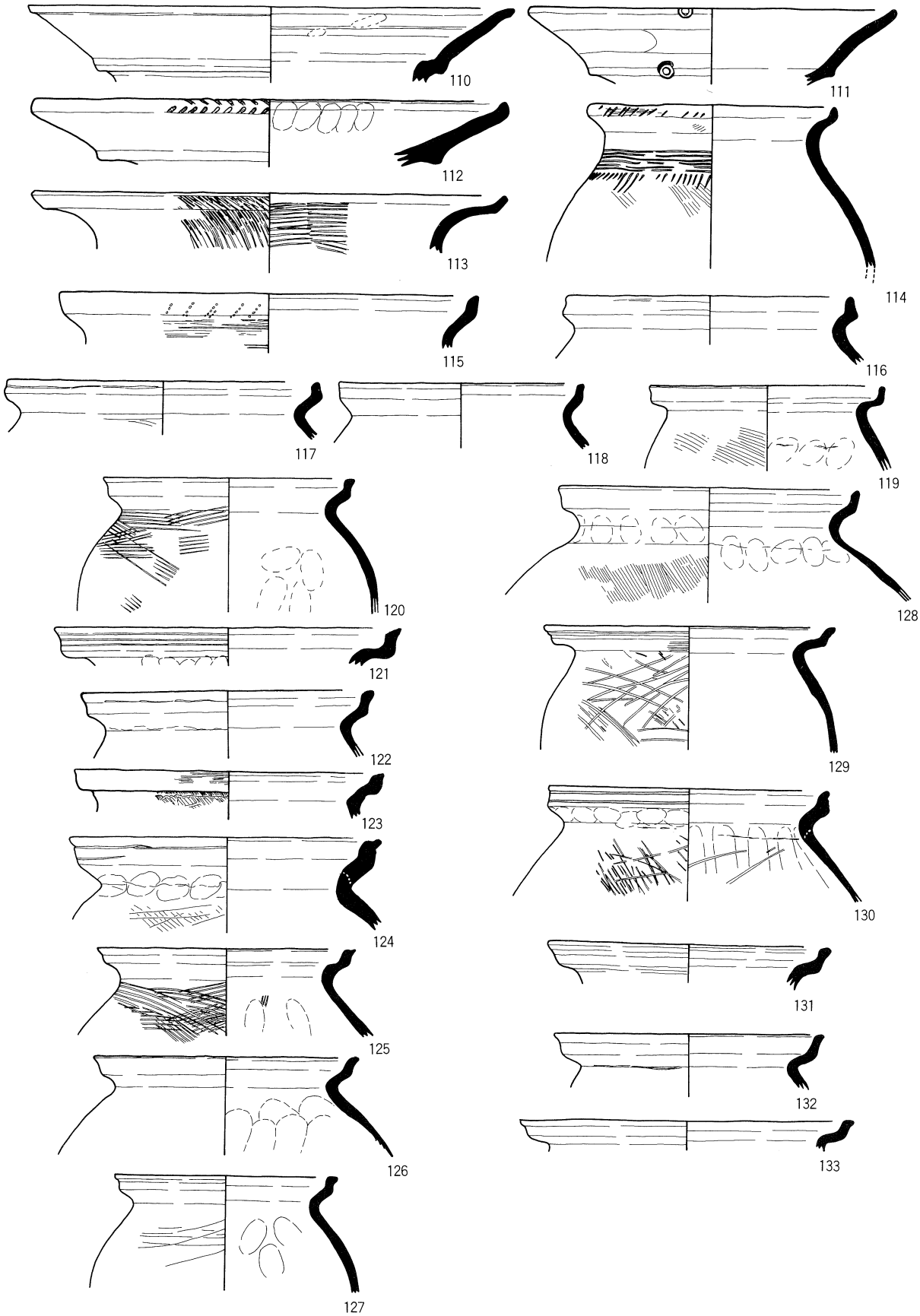
第11図　出土遺物実測図(4)
ＳＤ—09土層(70，76)，Ⅱ層(71～75，76～79)

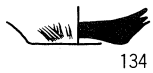


第12図　出土遺物実測図(5)
ＳＤ-09(80～88)



第13図　出土遺物実測図(6)
ＳＸ-06(89～93)，ＳＤ-11(94)，ＳＤ-13層(97.101.103～105.109)，Ⅱ層(95.96.99.100.106～108)，Ⅲ層(98.102)



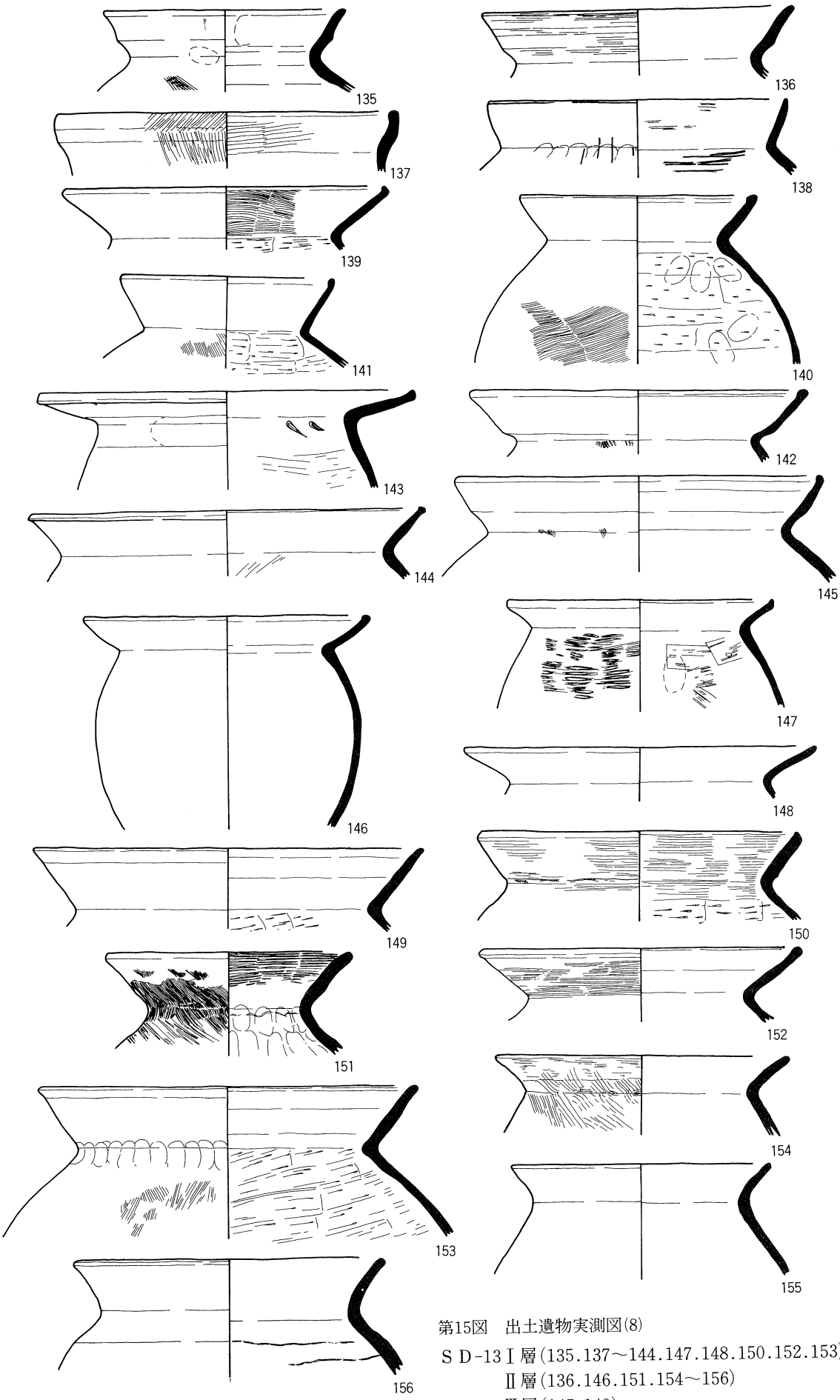


第14図　出土遺物実測図(7)

ＳＤ-13Ⅰ層(110.113.119～121.124.126～128.130.131.134)

Ⅱ層(111.112.115～117.122.125.129.132)

Ⅲ層(114.118.123.127.133)

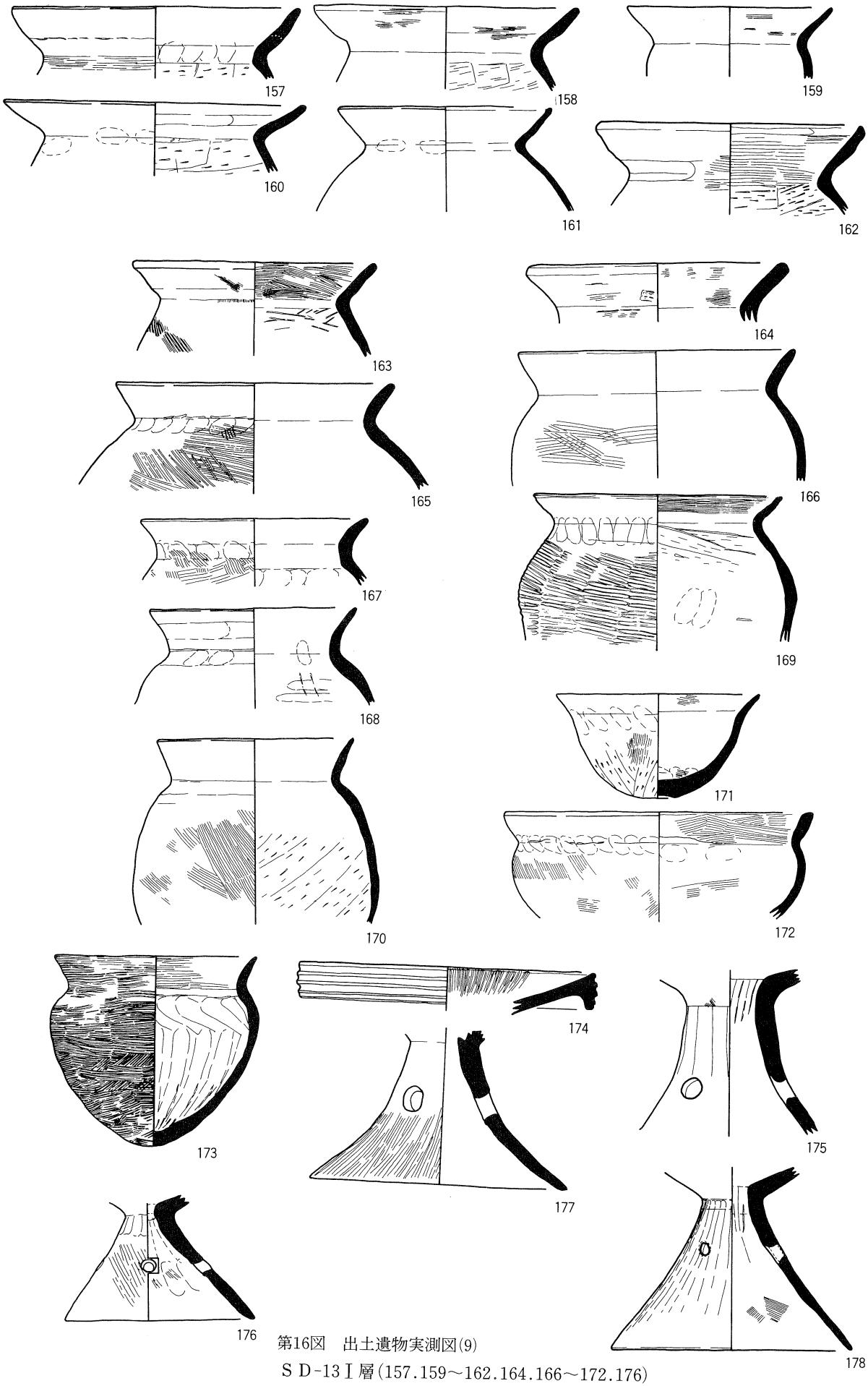


第15図　出土遺物実測図(8)

ＳＤ-13Ⅰ層(135.137～144.147.148.150.152.153)

Ⅱ層(136.146.151.154～156)

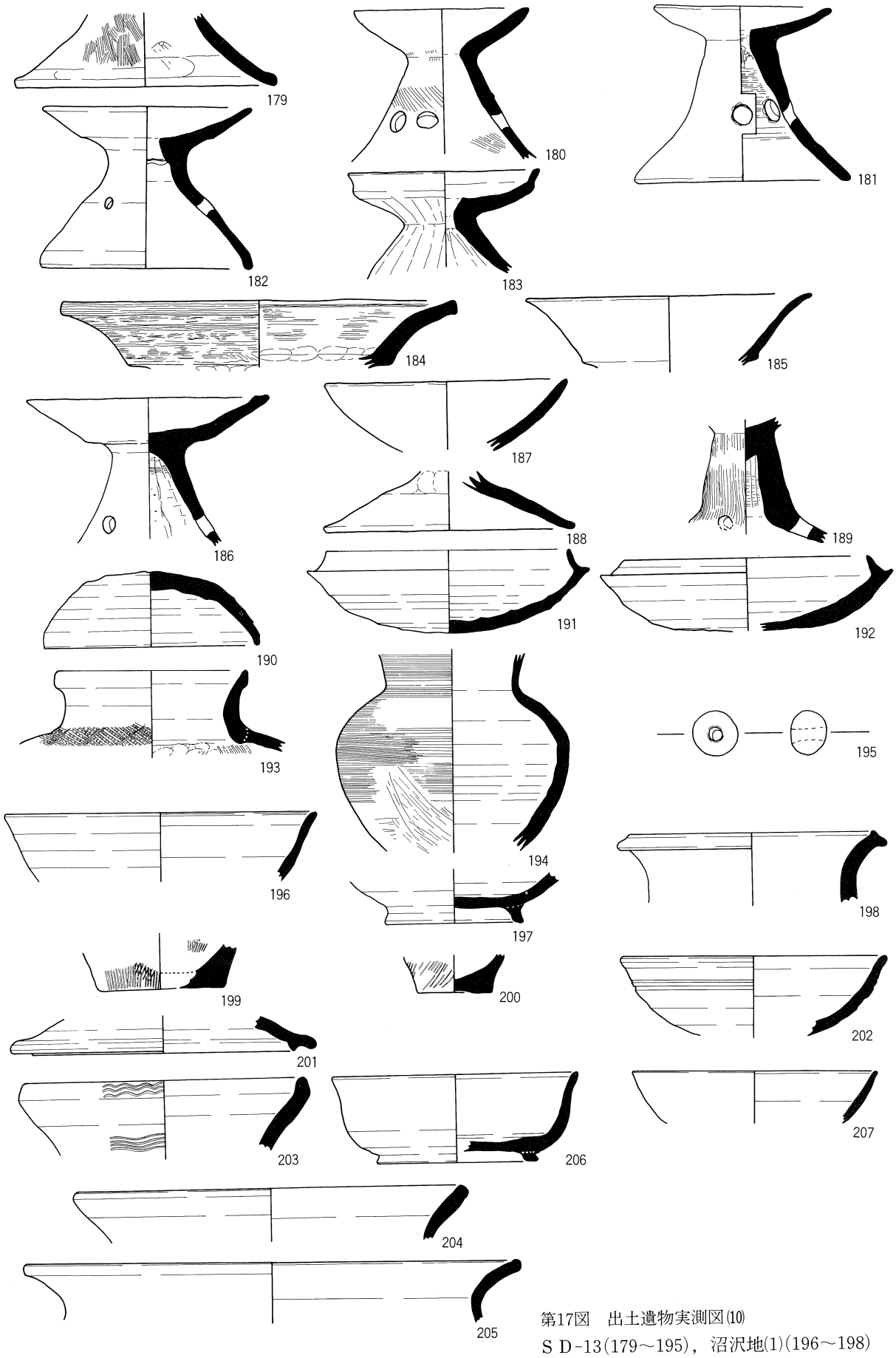
Ⅲ層(145.149)



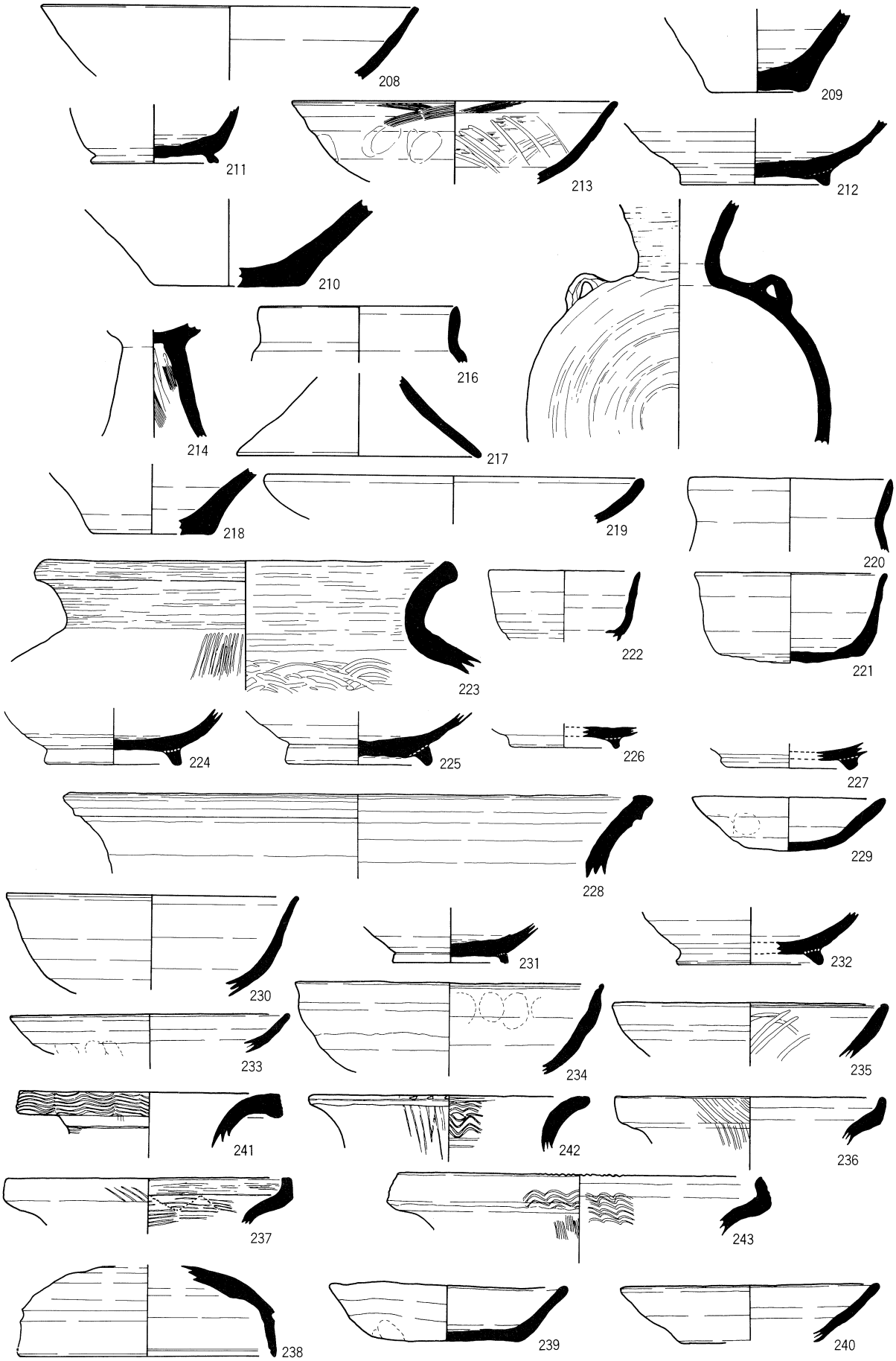
第16図　出土遺物実測図(9)

ＳＤ-13Ⅰ層(157.159～162.164.166～172.176)

Ⅱ層(163.165.177.178)，Ⅲ層(158.173～175)

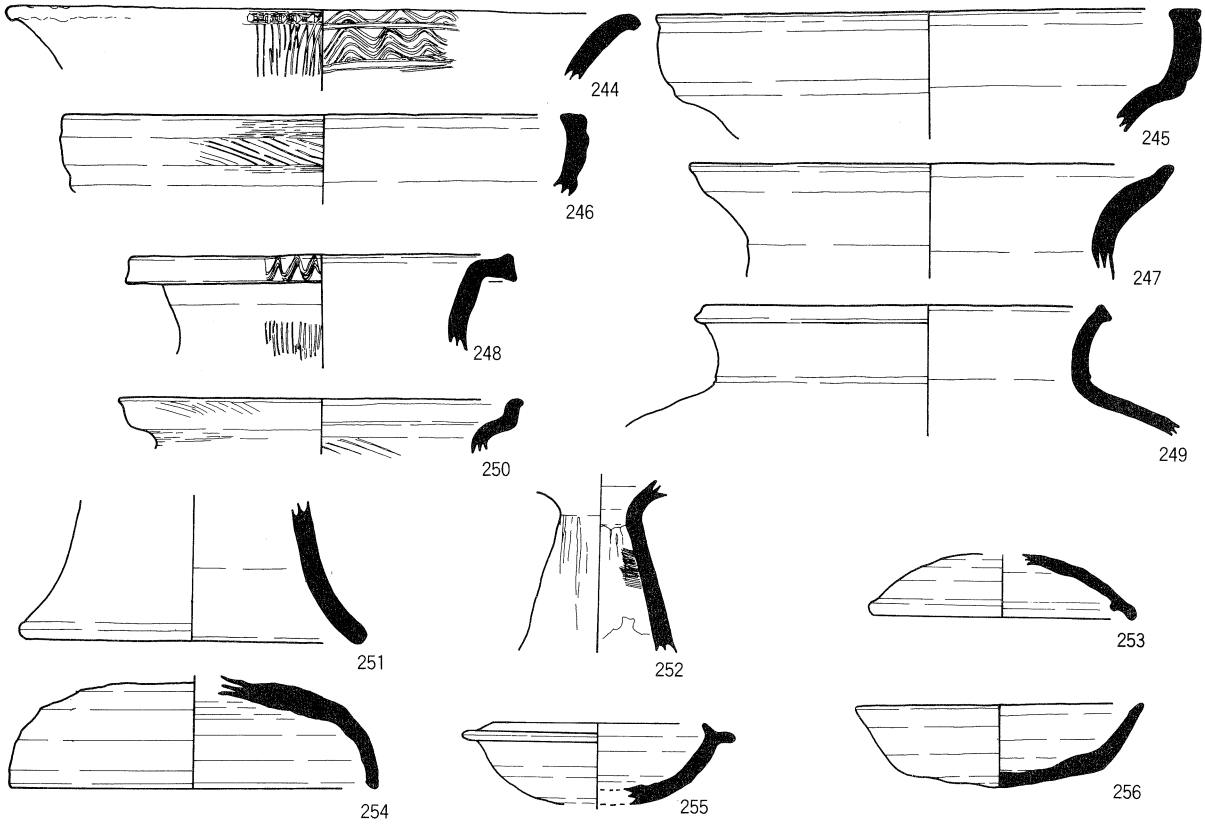


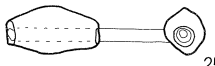
第17図　出土遺物実測図⑽
ＳＤ-13(179～195)，沼沢地(1)(196～198)
ＳＸ-07(199～202)，ＳＤ-03(203～207)



第18図　出土遺物実測図(11)

ＳＸ-09(208.209)，ＳＤ-06(210～213)，ＳＤ-07(214.215)，ＳＸ-10(216.217)，ＳＤ-08(218.219)，ＳＤ-10(220.221)，ＳＤ-12(222～228)，ＳＤ-14(229)，沼沢地(2)(230～234)，ＳＫ-12(235)，Ｐ-10(236)，Ｐ-9(237)，Ｐ-12(238)，Ｐ-1(239.240)，Ｐ-括(241～243)

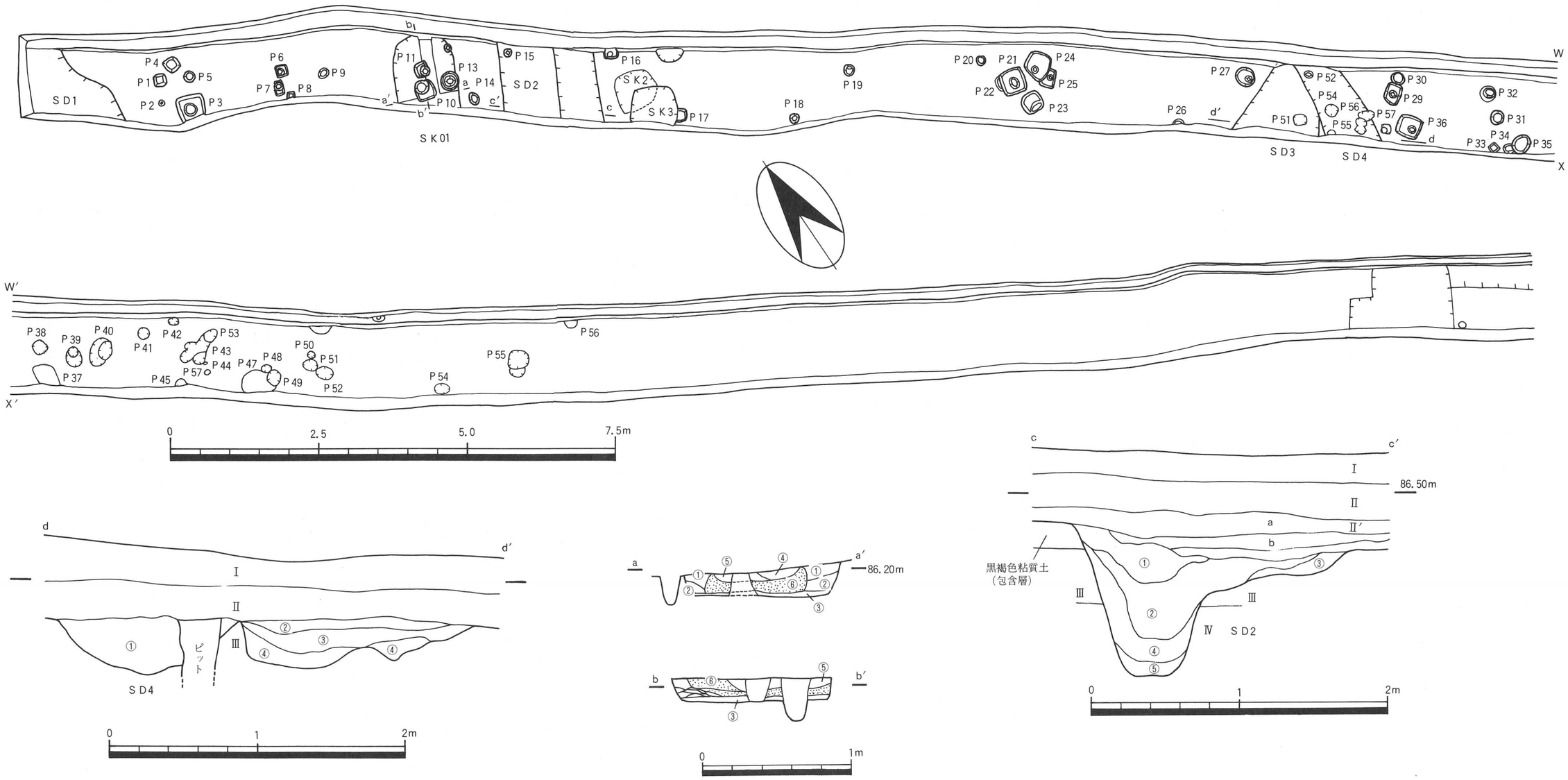




第19図　出土遺物実測図(12)
遺構面(244～257)

小川地区の北方にある畑地についても、今回のほ場整備事業によって削平が予定されたため、十字に試掘トレンチを設定して、削平による遺構破壊の有無を確認した。調査の結果、畑地を1.0m前後掘り込んだ時点で、黄褐色粘質土を地山とする遺構面が検出され、柱穴や土壙・溝など他域と同様の遺構の存在が確認された。ただ、検出したレベルは、削平レベル下0.4mであり、削平による破壊はまぬがれるものと判断し、調査を試掘にとどめた。

なお、地山の上に堆積する畑地の土壌は、いずれも茶褐色を基調とする砂質土で、他域からの客土と予想された。ただ、地山直上には旧耕土が存在することを考えると、比較的新しい客土と思われる。



溝（SD03）断面図

① 淡黒褐色粘土層
② 赤褐色砂質土層（MnO2，FeO3の沈着が層状に堆積）
③ 黒灰色泥土層（遺物多含）
④ 淡灰色泥土層（地山Ⅲのブロック状混入がみられる）

土壙（SK01）断面図

① 茶褐色粘質土（土師粉混入）
② 暗茶褐色粘質土
③ 灰褐色粘土
④ 茶灰色砂質土
⑤ 茶灰色砂質土（地山土混入）
⑥ 灰黒色～茶黒色粘質土
（主体＝木棺？）

溝（SD02）断面図

基本土層	Ⅰ	耕作土
	Ⅱ Ⅱ′	旧耕作土（Ⅱ′はFe2O3の沈着のため黒味をおびる）
	a	赤褐色砂質土（MnO_2の層状堆積）
	b	灰色粘土
	Ⅲ	黄褐色粘土（遺構面）
	Ⅳ	青灰褐色粘土（Ⅲグライ化）
		地山

SD－2
① 黒灰褐色粘質土層（若干土器片を包含し、炭化物片の混入がみられる）
② 黒褐色粘土層（地山Ⅲのブロック状混入がみられる若干の土器片を検出）
③ 淡黒褐色粘土層（地山Ⅲのブロック状混入が著しい）
④ 暗黒灰色泥土層（土器片、植物査体多含）
⑤ 淡黒灰色泥土層（遺物カイ無）

第20図　暗渠用水路遺構実測図

4．宮ノ前遺跡

(1) 検出遺構と遺物

宮ノ前遺跡としての調査区は躰光寺集落の弘誓寺北にある小学平地・几文町を通る第2号支線排水路(幅5m×延長138m)、小川集落の北にある小字東小田・西賀久堂・宮ノ前を通る第19号小排水路（幅3m×延長185m)、それに第11号支線道路（小川遺跡調査区）の横に並行して埋設された暗渠用水路（パイプライン）より東側の小字西賀久堂地区へのびる南北方向のパイプライン（幅1m×延長62.5m）の3地区である。

調査の結果、第19号小排水路・南北用水路等において弥生時代中期から古墳時代前期にかけて遺構・遺物を検出した。以下には、各調査区ごとに項を分け検出された遺構・遺物の概要の一部を紹介することとする。なお、遺物については、その出土量が膨大なものであったため、その全てについて報告できる段階にない。よって、稿を改めて報告したい。

イ．第2号支線排水路

第2号支線排水路は、小川集落の中央を流れる水路と、小川集落の西側の水田の水を排水する幅5mの支線水路で、小字地蔵堂の南側の境を通り、小字平地・九文町へと続くもので、我々が調査に着手した段階では、既に躰光寺集落北部の弘誓寺の北端付近まで完成しており、小字平地の南東端より北西への約138mについて幅1mの断面観察用トレンチを設け、調査を実施した。調査により発見された遺構は、時期不明の一条の溝と一本の大畦（道）のみであった。

基本層序は、全体を通してみた場合、6層に分けることができる。第1層は、暗灰色砂質土層で、現在の耕土層である。第2層は、黄灰青色粘質土層で、数層に分層することができる。第3層は、マンガンの沈着が著しい黒茶褐色砂質土層で、第4層上部に薄く堆積しており、全線にはみられないものである。第4層は、マンガン沈着が著しく砂礫や弥生土器の細片を含む、灰茶褐色砂質土層である。第5層は、淡灰青色粘質土層で、北西部ほど厚く堆積する。第6層は、周辺地域で一般的に縄文時代晩期以降の遺構がその上面において発見される黄褐色砂質土層で、北西部ほどグライ化して青灰色に変化していた。

このトレンチ調査により明らかとなった地形は、遺構面と考えた第6層上面のレベル変化によってみると、南東端で85.50m、北西端で85.00mとなり、比較的緩やかな下がりで内湖に向かっているものの、各土層の堆積状況からみて、南側の躰光寺川の影響によると思われる堆積が上層（第2・3層）において認められた以外は、そのほとんどが小川集落と躰光寺集落の間の東側の旧河道による堆積と考えられるものであった。

検出された遺構が二つある。一つは、小字平地と小字九文町を限る用水路（第3A地点）で、この下部やや東よりこの用水路よりも古い溝跡が一条、さらに用水路の下より大畦状の土の高まりがみられた。これらは、いずれも遺物が出土しておらず、年代の決め手を欠くが、21坪と27坪の坪境を限る遺構と考えられる。あと一つは、北西から南東への小畦下に存在する、やや大きめの幅1m余りになる大畦（道か）と考えられるものである。これについても遺物の出土がなく、年代については明らかにできなかった。

ロ．暗渠用水路

暗渠用水路（パイプライン）は、第11号支線道路の北東側に並行して埋設された暗渠用水路より北東へ分岐する用水路で、小字下入道から小字東小田を通り、小字西賀久堂までの間で、1m幅で約62.5mを調査した。

基本層序は、これ以降の第19号小排水路等と共通するものであって、基本的には6層に分けることができ、特

に第４層については２層に分離して考えることが可能であろうと思われた。第１層は、暗灰色砂質土層で、現在の耕土層である。第２層は、暗灰青褐色砂質土層で、床土層といわれるものに当る。第３層は、暗灰褐色砂質土層で、マンガンの沈着が著しく、炭化物や土器片を包含する。第４層は、黒茶褐色粘質土層で、主に遺構内の堆積層であって、２層に分けることができる。第４－１層は、マンガンによる黄褐色化が著しく、第４－２層よりも砂質である。第４－２層は、マンガンの影響が少く粘質で、弥生時代の遺物を単純包含することが多い。第５層は、第４－２層の下にあって、第４－２層中に次の第６層の黄褐色砂質土層をブロック状に含むもので、これも弥生時代の遺物を単純包含することが多いものである。第６層は、弥生時代の遺構面を形成していた黄褐色砂質土層で、小字西賀久堂付近で最も黄褐色化し、小字宮ノ前ではややグライ化し黄灰色化する。この第６層については、今回の調査中一点のみ縄文時代中期の遺物が採集されており、さらに下層においてこの時期の遺構が存在する可能性のあることを示しているものと思われ、今後注意を要する。

このトレンチにより明らかとなったことは、遺構面である第６層上面に、弥生時代以降～平安時代末までの諸遺構の全てがみられることで、この上層の第１～３層は土壌化しており、第４－１層についても土壌化しているものがみられた。この第６層上面のトレンチでのレベルは、第11号支線道路側で85.6m、東側で85.8mで大きな変化はみられないものであった。しかし、第11号支線道路側の南西端より約３m余りから西側が急に落ち込む地形となっており、この落ち込みが旧河道を示す右岸の肩部であることが第11号支線道路側との調査により明らかとなった。このことは、小字でいう下入道部分が旧河道であることを示すもので、この旧河道が弥生時代には適度な開発地となっていて、水田開発が容易な状況であったものと理解されるのであった。この旧河道は、現在躰光寺集落の南西を流れる躰光寺川の旧河道で、垣見集落の東側から国領集落の西側を通り、現在の能登川町役場周辺より躰光寺集落に至り、ここで集落を囲むように両側に分れ、小川集落との間を流れて北流している旧河道跡がこれに当るものと思われた。

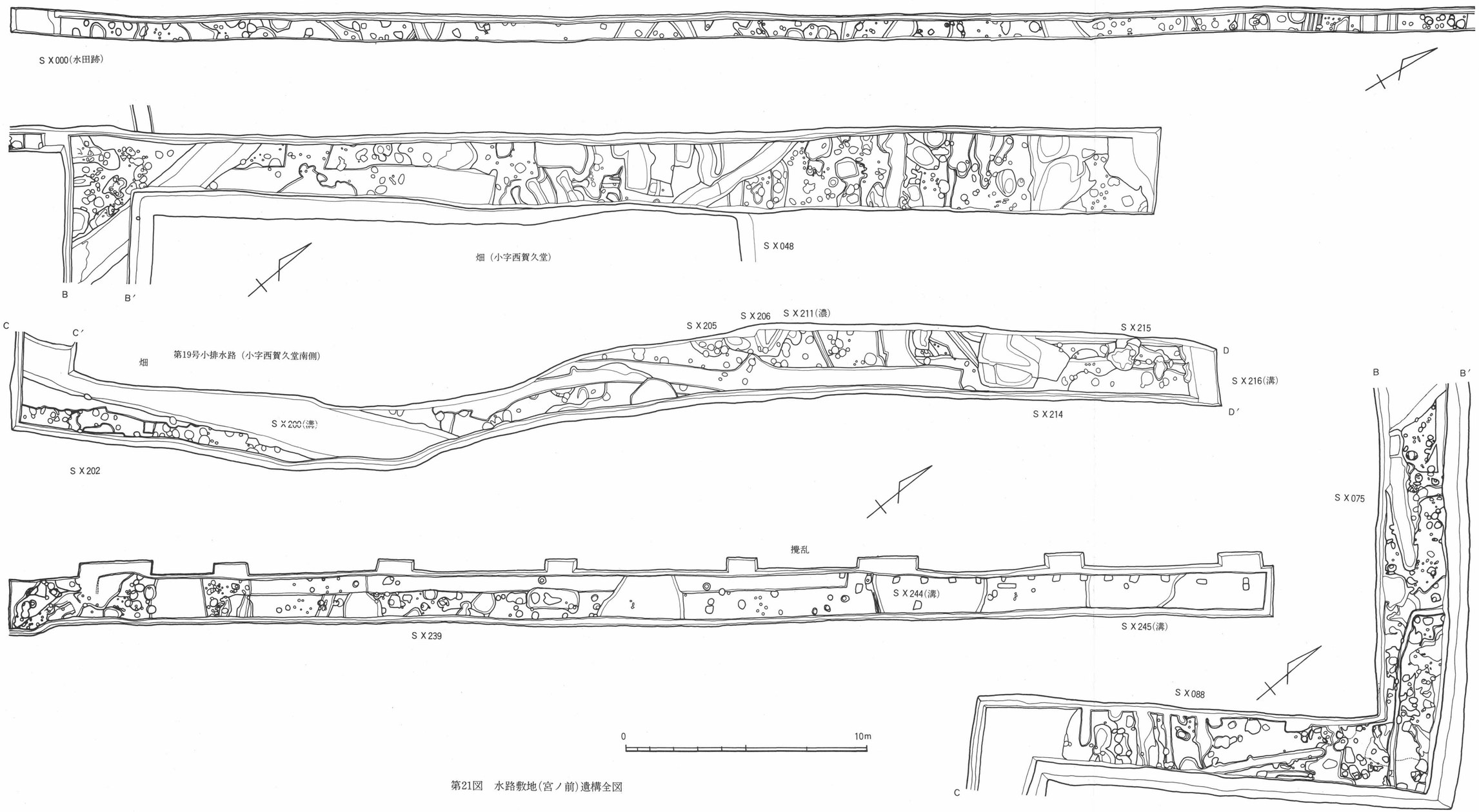
次に遺構であるが、その大部分が弥生時代中期中葉以降のもので、古墳時代前期の遺構は極端に減少する傾向にある。検出された遺構は、調査トレンチの幅が狭いこともあって、溝であるのか土壙であるのかも明確でないものが多いが21遺構、それと多数の柱穴がみられた。しかし、竪穴式住居と思われるような遺構は、特に検出されなかった。

ハ．第19号小排水路

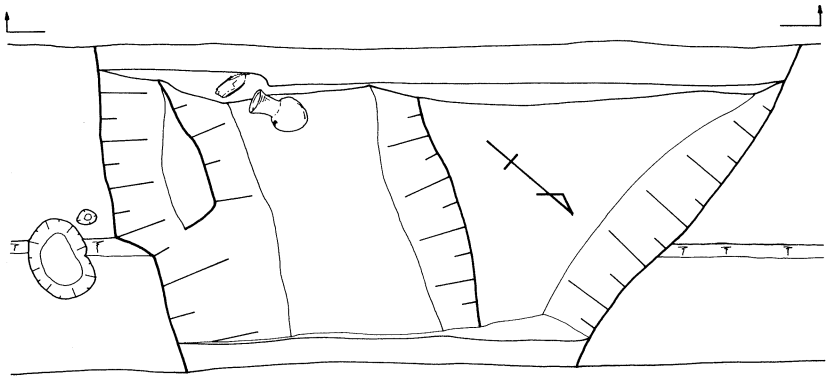
第19号小排水路は、小字西賀久堂と小字東小田、小字宮ノ前を通る、延長約185mの小排水路である。よってその調査幅は、実質的に２m幅となった。

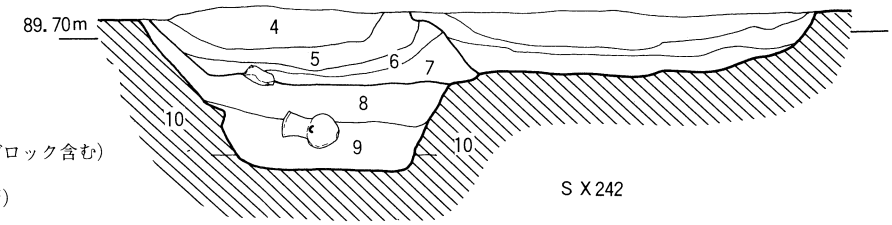
調査地における地形は、暗渠排水路で述べたように、小字下入堂側に低く、小字西賀久堂・宮ノ前地域が最も高い小微高地となっているもので、東の小川集落との間にも僅かに旧河道状の下がりが小字地蔵付近から八宮赤山神社北側に向かってのびているのがみられる。ただし、これについては、大河道とはならないようである。

検出された遺構は、遺構面である第６層が見えないほどにあって、特に小字西賀久堂周辺部では著しく、南側の小字宮ノ前周辺では遺構の数が減少し、溝が主な遺構に変化するようである。このことは先の地形状況からも首肯される。溝・土壙等の遺構は、84遺構で、これに多数の柱穴がある。これらについても竪穴式住居と思われる遺構は検出できなかった。遺構の時期幅は、最も古いもので縄文時代中期の土器片を除くと、弥生時代中期前葉（第Ⅱ様式）のものでこれ以降間断なく続き古墳時代前期前葉のもの以降急激に減少していく。これ以降の遺物では、古墳時代中期末の遺物が、小字宮ノ前周辺で弥生時代の溝の最終の埋土中に僅かに出土するのみである。その次に量的に増えるのが、７世紀中葉以降で、これは、南側の小川廃寺（性格不明）との関係で考えねばなら

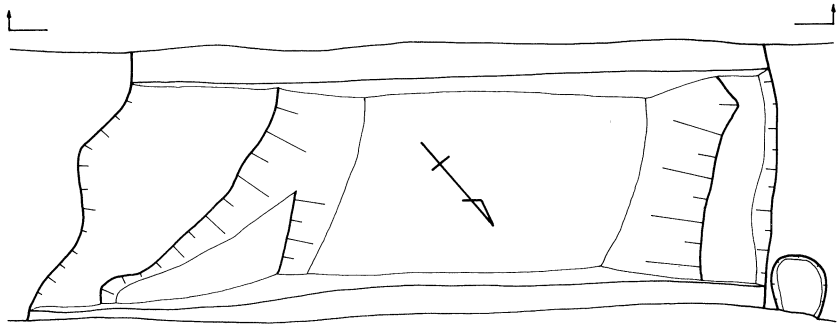


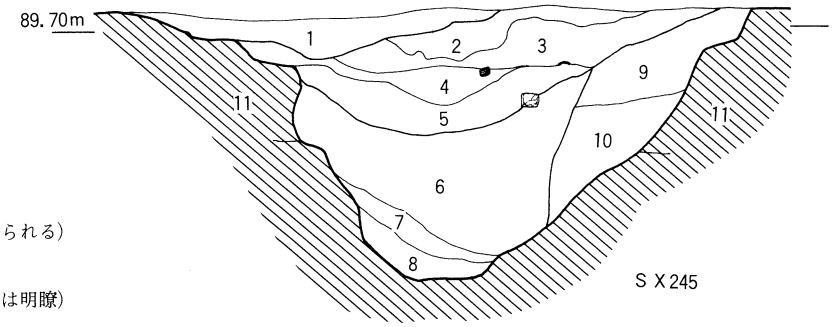
第21図　水路敷地(宮ノ前)遺構全図



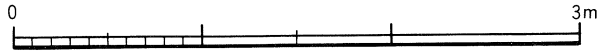


1　灰茶褐色砂質土層
2　灰茶褐色粘質土層
3　茶褐色砂質土層
4　暗茶褐色砂質土層（10層の大きなブロック含む）
5　茶褐色砂質土層
6　５層中に10層のブロック粒を含む層）
7　灰茶褐色砂質土層
8　灰黄黒色粘質土（10層微粒ブロック念む）
9　灰黒色粘質土層
10　黄褐色砂質土層
※　わたしとも２回の切り込み有り

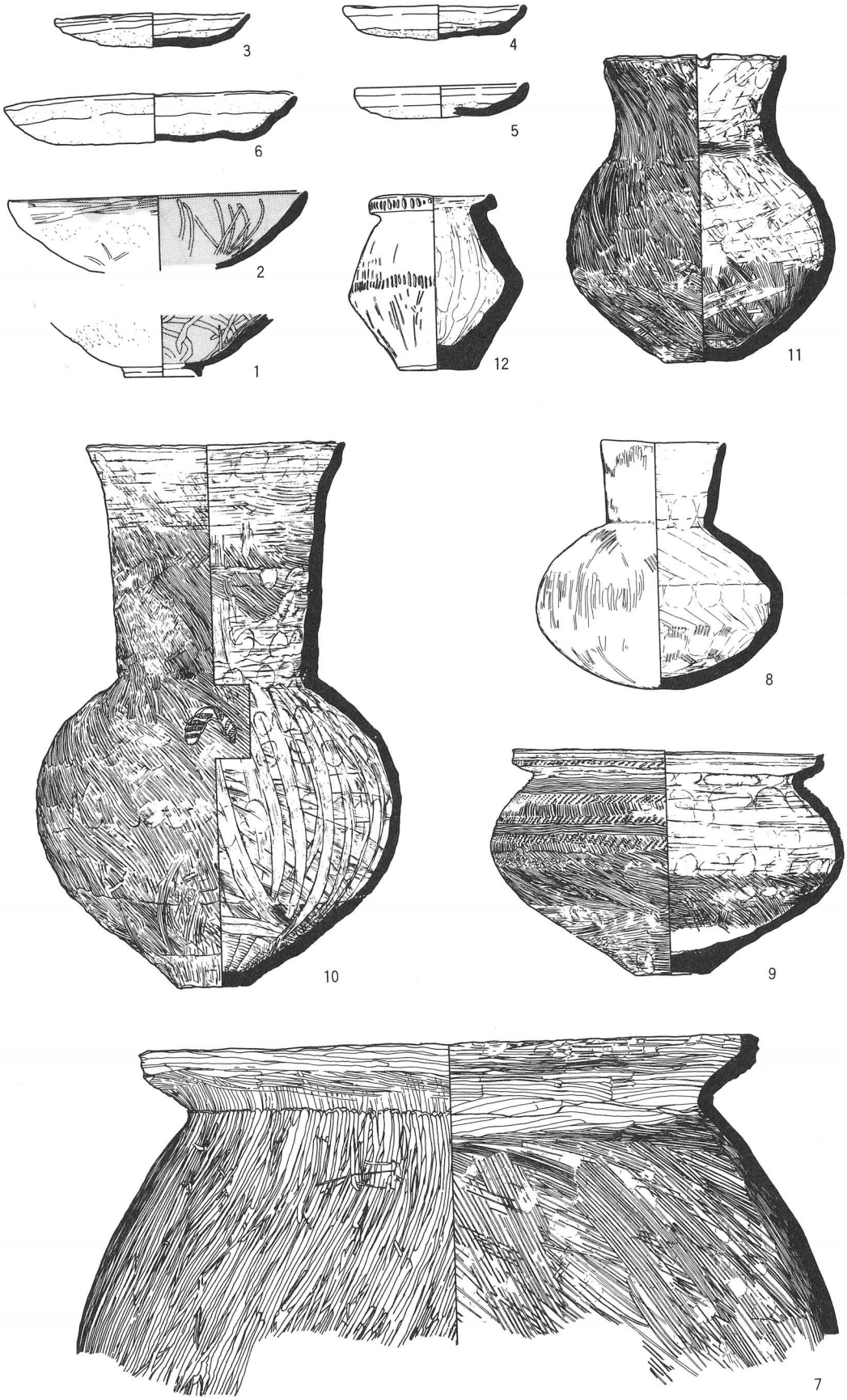




1　暗灰茶褐色粘質土層
2　暗灰茶褐色砂質土層
3　黄茶褐色砂質土層
4　暗灰黒色粘質土層（炭化物多く含む）
5　暗灰色粘質土層
6　灰色粘質土層（スクモの薄層が数層みられる）
7　茶褐色有機物層（スクモ層）
8　灰青灰色粘質土層
9　黄茶褐色砂質土層（３層より明るく墳は明瞭）
10　淡灰黄色粘質土層
11　淡黄褐色砂質土層（大部グライ化）
※　少くとも３回以上の切りこみ有り
※　ＳＸ244と似た土層であり、同時併存の
　　可能性が高い



第22図　ＳＸ242，245平面図及び断面図



第23図　出土遺物実測図
（1～6　ＳＸ200，7　ＳＸ213，8．9　242上層，10　ＳＸ242下層，　11　ＳＸ245上層，12　ＳＸ245下層）

ないが、この調査区ではこれについても量は少い。その次に量的に増えるのは、小字西賀久堂周辺の12世紀～13世紀にかけての遺物であろうと考えられる。これについては、南北方向の幅１m余りの水路が発見されており、これに伴うこの時期の柱穴もあることから、その性格は不明であるが建物の存在したことが明らかである。なお、この溝より出土した黒色土器埦の底部外面に「大吉」の文字を入れたものがみられた。以下には、この内の一遺構であるＳＸ242とした溝についてのみ概要を説明しておくこととする。

ＳＸ242（第22図）

ＳＸ242は、小字宮ノ前地区の多数の溝（５条）の一つで、微高地を廻るような溝の一つと考えられる。遺構検出面は、85.80mで、大略６層の埋土によって埋まっていた。溝の規模は、幅約２m、深さ0.8mである。第23図の１～９は、上層として取り上げた第１層から第４層までの遺物で、10は下層とした第５層・第６層より取り上げたものである。この内、上層より出土した鉢タイプの浅甕９は、この中より小型の壺８を入れた状況で出土した。また下層より出土した長頸壺10は、肩部に粘土紐の貼りつけになる文様をもつものであった。これらの遺物は同じ後期の土器であるが、上・下層にて時間幅をもつものである。

以上他にも詳述したい遺構や遺物があるが、整理作業が進んでいない現状では問題があり今後に期したい。

(2) 小　　結

本調査は、ほ場整備事業という工事との競合による調査であって、十分な調査が成し果たとは言えない。また、調査区内の限られた知見であって、遺跡の全体像を知りえたと言えるものでもない。さらに、調査後の整理作業が進んでいないこともあって、遺物について十分語ることができなかったが、調査中に感じた本遺跡のことに添えてまとめとしたい。

まず本遺跡の範囲と立地であるが、これは先にも述べたように、小字でいうところの東小田・西賀久堂・宮ノ前を中心とした、南北約200m、東西約130m余りの卵形の微高地上にのる集落で、宮ノ前地区の溝のどれかが、この周辺部を廻るような環濠となる可能性が高いと思われる。この微高地周辺には、旧河道の埋まりかかった所を利用した、水田が広がっていたものと予想されるのである。また同じ対岸の微高地である第２号支線排水路周辺においてこの時期の遺構がみられないのは、この周辺が住居域としてではなく、生産域として利用されていたことを示すものと考えられるのである。また、このすぐ北側には、この当時内湖の汀線が入りこんでいた所と考えられ、この集落が農耕ばかりでなく、内湖の漁業をも生業の一つとしていた可能性が高い。

次に本遺跡の画期についてであるが、第Ⅰ期は、弥生時代中期前葉～古墳時代前期で、住居域、生産域としての利用のあった時期であるが、古墳時代前期を境に集落は崩壊したものと考えられる。第Ⅱ期は、７世紀～８世紀で、小川廃寺を中心とした建物群の一部が建てられたようである。第Ⅲ期は、12世紀～13世紀で、この遺構の性格については明らかでないが、新たな湖岸部の開発との関係で考えるべき遺構であろうと思われる。以上の３期が主たる本遺構の時期といえる。

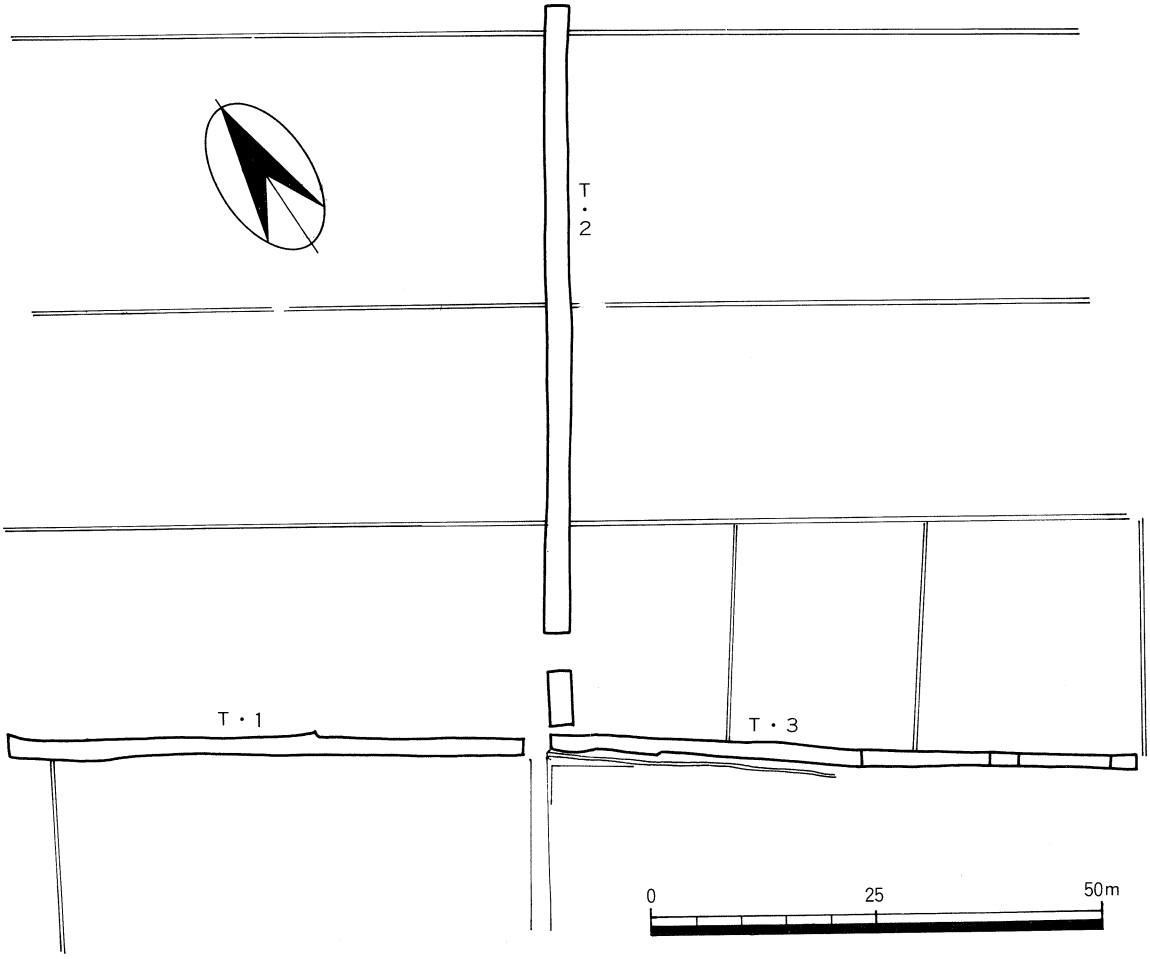
今後、本報告が当地域の本格的な古代史の解明が進むための、端初とならんことを願うものである。

（辻　広志）

5. 庄地遺跡

(1) 検出遺構と遺物

県道以北の調査地とした庄地では、水路予定地を対象に東西方向と南北方向に大略T字型のトレンチを設定した。全体としては南の小川、宮ノ前地区と対比すると遺構の量は極めて少なく、溝状遺構と若干の建物群に伴うと思われる柱穴、および土壙群から形成されていた。また土壙群の一部には火を受けて焼けた、いわゆる焼土壙や、埋土に炭化物、焼土の混入したものが見られ、遺物の中にも板塔姿の出土や、黒色土器の出土があった。

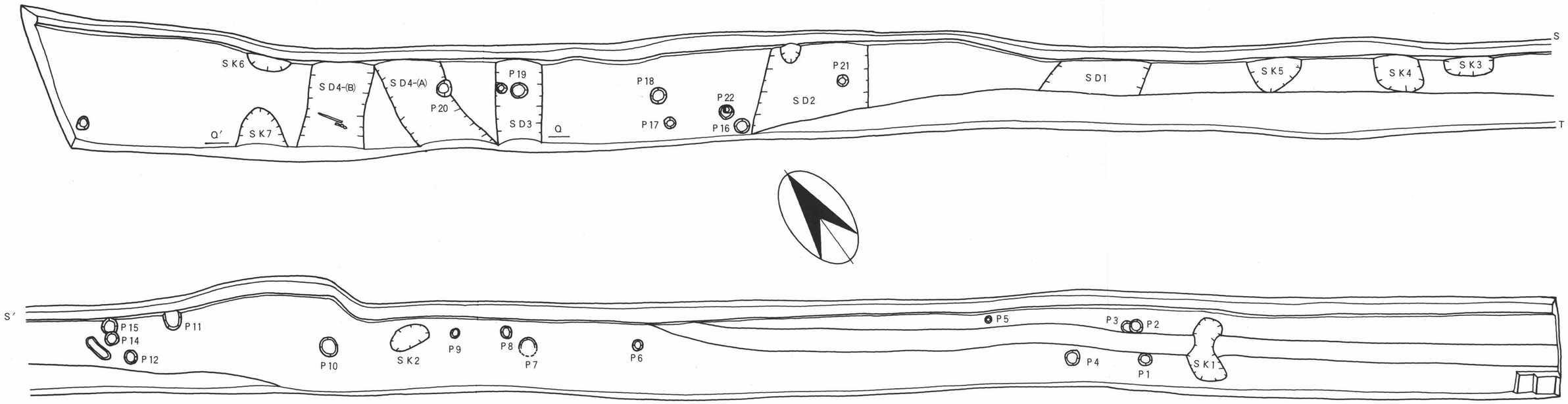


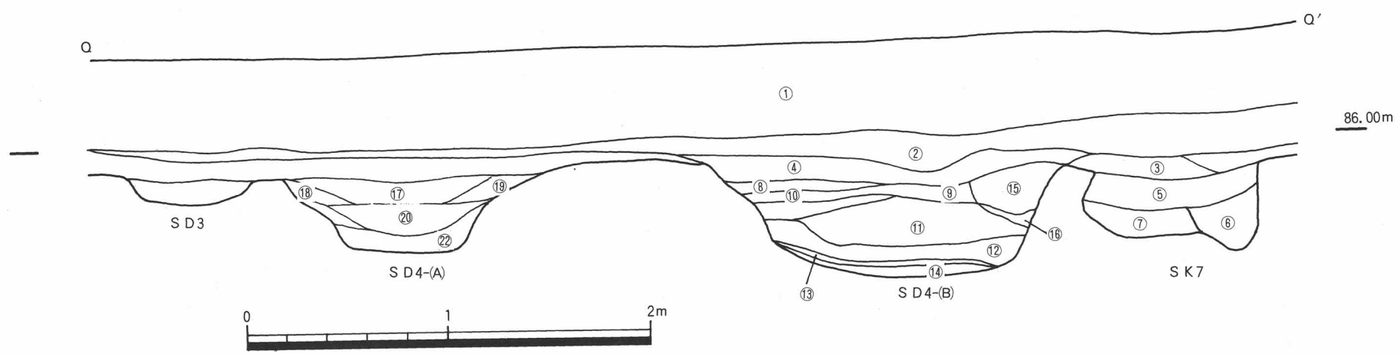
第24図　トレンチ配置図（庄地）

(2) 小　　結

全体としては検出遺構の分布状況から小川集落から離れるにつれ遺構量が少なくなる傾向にあり、このことは小川・宮ノ前の調査例と合せて考えると舌状微高地の端部に位置していることが明らかである。また溝遺構の多くは条里区画に伴うものが多いようであるが、自然流路状のものも多く、小川集落の北側は、しばしば大同川の氾濫等の影響下にあったと考えられる。なお検出された焼土壙等不整形土壙は、遺物のないものが大半であるため断定はし得ないが、蔵骨器を伴わない火葬に伴なう墓壙の可能性が高い。この場合、火葬場そのものは別途周辺部にあって、埋納用の土壙として掘られたものであるため、無遺のもの、小量の炭化物、焼土を含むもの、不整形であること等、バラエティーに富んだ土壙群となったと思われる。

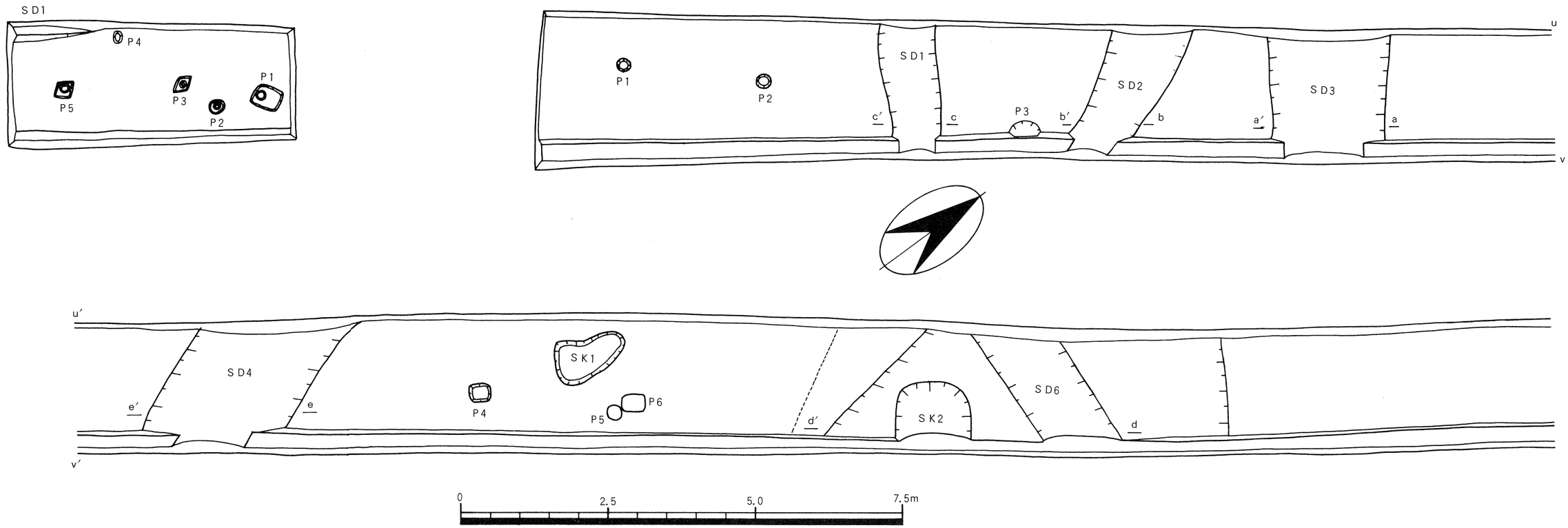
（近藤　滋）

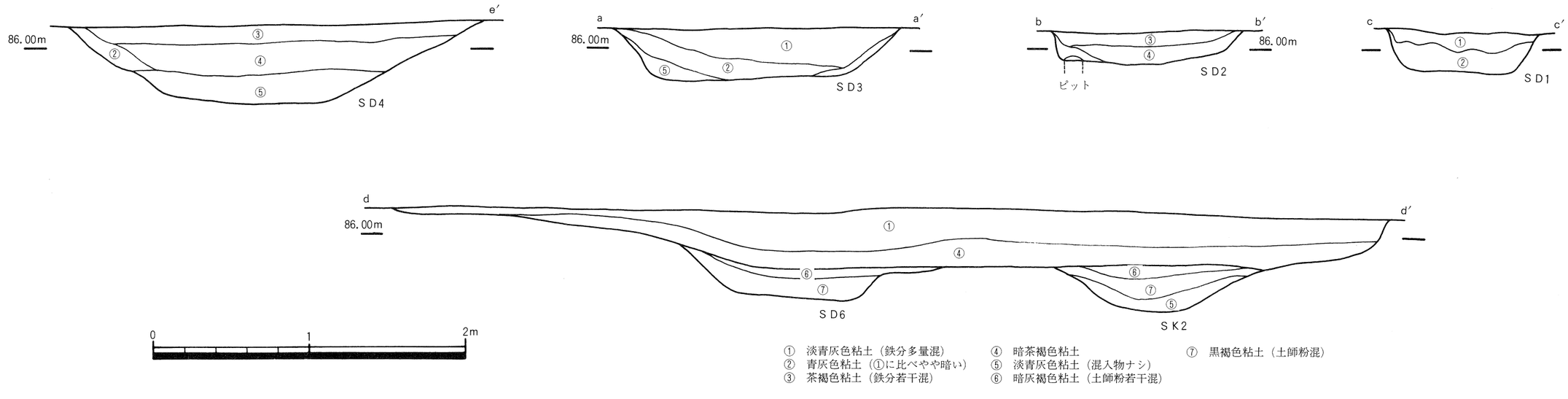




① 耕作土又は表土
② 旧耕作土又は表土
③ 淡灰茶色粘質土（Mn.Fe多量混入）
④ 淡灰青色粘土（Mn.Fe若干混入）
⑤ 淡灰青色粘土（地山土、Fe混入）
⑥ 暗灰色粘土（炭化物若干混入）
⑦ 灰色粘土（地山土混入）
⑧ 灰褐色粘土（Mn.Fe若干混入）
⑨ 暗黄褐色粘土
⑩ 褐色灰粘土
⑪ 暗褐灰色粘土
⑫ 灰褐色粘土
⑬ ピート層（腐植土）
⑭ 暗灰褐色粘土
⑮ 地山ブロック
⑯ 地山土(緑灰色砂)ブロック
⑰ 暗茶褐色粘質土（土師粉・土器混入）
⑱ 暗茶褐色粘質土（やや上層より薄い）
⑲ 灰茶色粘質土
⑳ 淡茶褐色粘質土（土器含）
㉑ 淡黄灰色粘質土（地山土混）
㉒ 灰褐色粘土
㉓ 灰褐色粘土

第25図　T・1遺構平面・断面図





第26図　T・2遺構平面・断面図

6．ま　と　め

各調査区ごとには簡単に小結でまとめたがここでは全体として改めて整理すると、各々の調査区でのトレンチが極めて狭長であったことから、多数の遺構を検出したにもかかわらず、全体の一部であったため、それが具体的遺構として判じ得なかったものが多い。その中で少しでも理解出来たものを若干触れることでまとめとしたい。

今調査での第１義的なものとしては宮ノ前遺跡の集落としての実態把握であり、前者については弥生時代中期からの集落であることは改めて言うまでもないが、住居跡としての明確な遺構は確認できず、明確なものとしては木棺墓がある。つまり地形的に判断して東から延伸してくる舌状微高地端部と言うことで、現集落下に集落の中心部が重複し、その西での墓域の一端が、今調査区であったと考えられる。このことは庄地の調査結果からも同様に判断できるし、弥生時代集落だけではなく、古代末、中世においても同様の結果と云えよう。

後者については溝遺構の一部に寺跡との関連を知り得るものがあったが結果としては具体的範囲、位置等を明らかにできなかったし、少量の瓦片の確認に終った。これに関連して若干の私見を、ここで加えると古代近江国は12郡で形成されていたが、平安時代以降24郡制、つまり１郡が東郡・西郡、北郡・南郡等に分割されていたことは文献から判断できる。そして当神崎郡は東郡・西郡であり、当地は神崎西郡となる。そこで現躰光寺集落端の西郡神社であるが、境内地に周辺では少ない平野部での古墳を有すること、白鳳時代の寺跡が付近に想定されること、蛇足であろうが、神社の東に「東殿衛」「西殿衛」の小字が見られること、そして社名が西部であり、弥生時代から中世にかけて連綿と続く安定集落を持つことなどから、当地周辺に神崎西郡の郡街が衙在したと想定できる。この意見では今調査での遺構のうちでの掘立柱建物中に大型の掘方を持つものがあることなどから、寺跡もさることながら、官衙的遺構も合せて考慮する必要があって良いのではと考えられるからである。つまり、正南地方位を持つ大形建物、寺跡の実態が不明、隣接地での寺跡を持定した場合の瓦の出土量の少なさ、そして当時として瓦を使用する立場等が、その判断材料である。今後の周辺部の調査に期すことでまとめに変えたい。

（近藤　滋）

第27図
Ｔ・１ＳＤ４(B)出土板塔婆

図　　版

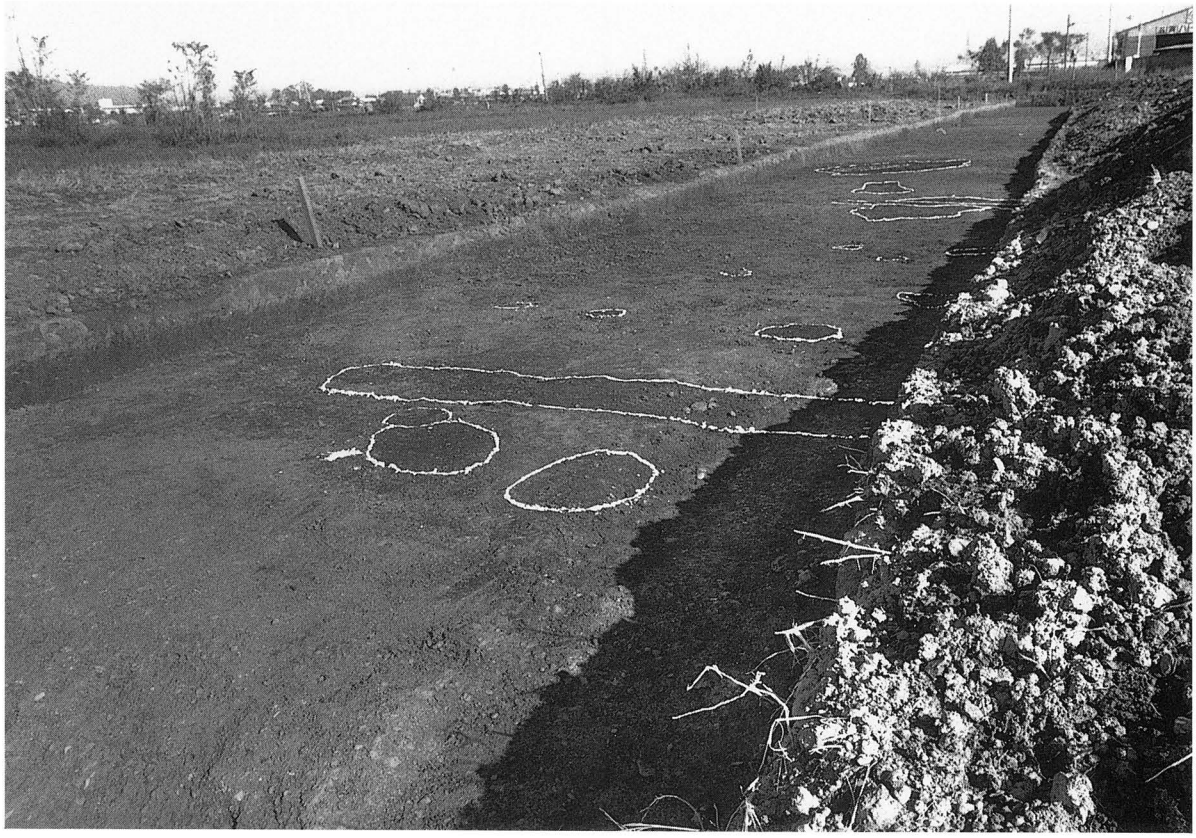
1　水路②トレンチ1区（東から）

2　同上（南から）

1　水路②トレンチ４区　ＳＤ－２（東から）

2　同上　６・７区（東から）

1　水路②トレンチ７区（東から）



2　同上　８区（南から）

1　水路②トレンチ８区（東から）

2　同上

1　水路②トレンチ９区　ＳＤ－５（北から）

2　同上（西から）

1　水路②トレンチ11区（北から）

2　同上　11区　ＳＥ－２（北から）

1　水路①トレンチ1区（東から）

2　同上　3区　SB—1（南から）

1　水路①トレンチ５～７区（東から）

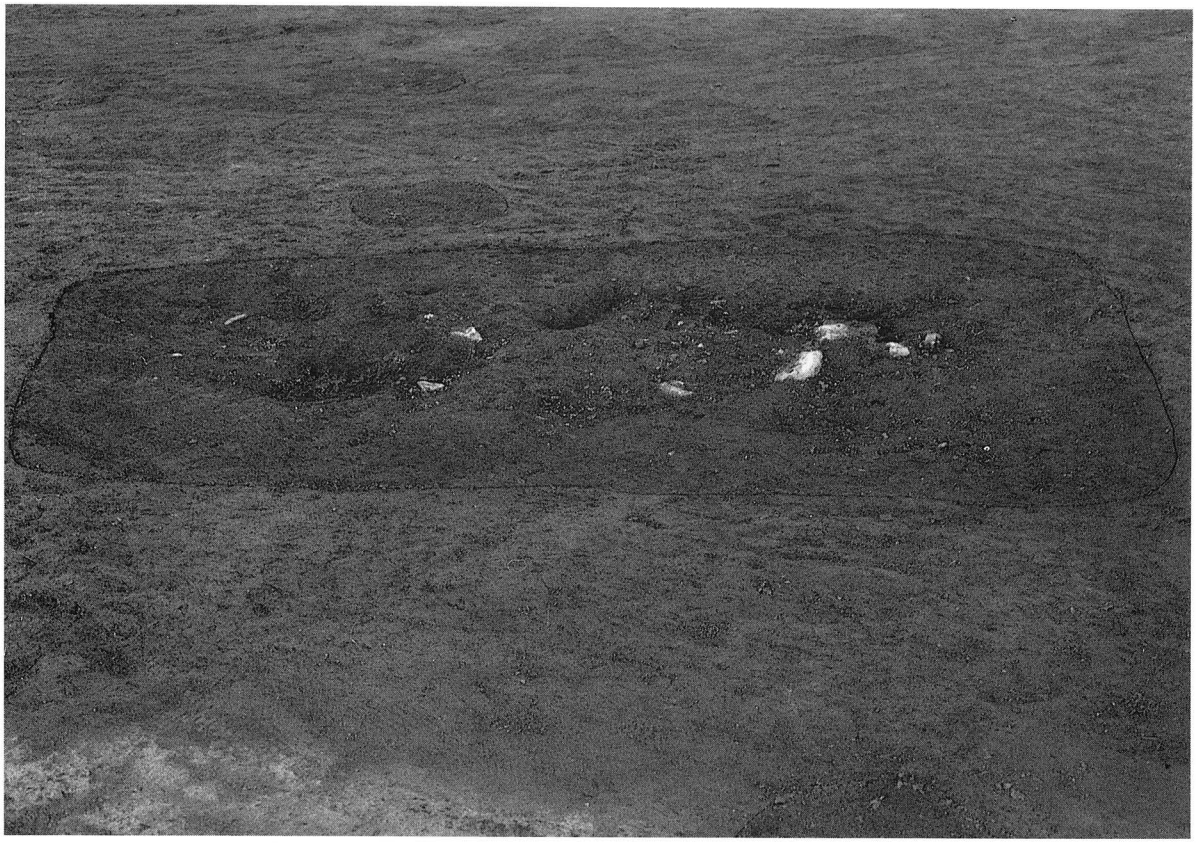
2　同上　６～７区（南から）

1　水路①トレンチ８～９区　ＳＢ－２（南から）

2　北拡張区１　ＳＢ－２（西から）

1　北拡張区１・２（南から）

2　同上　１（西から）



1　北拡張区１　ＳＫ－３（西から）

2　同上２（南から）

1　北拡張区２（東から）

2　第１～６トレンチ調査前風景（北から）

2

5

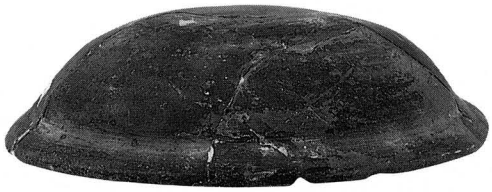
1

4

3

出土遺物

27



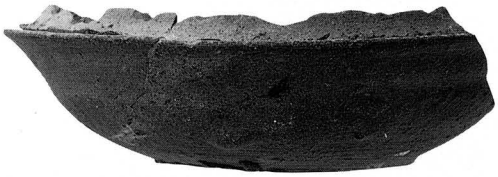
17

29

18

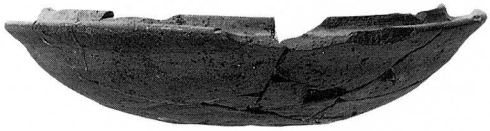
26

30



25

19

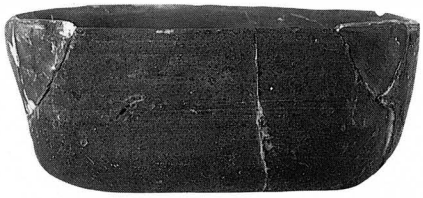


34

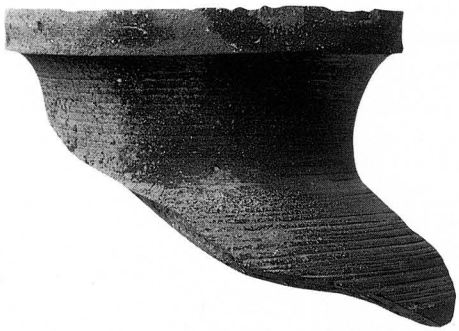
28

11

出土遺物

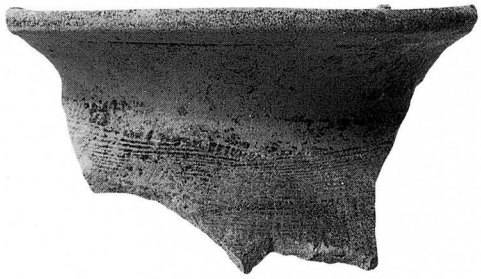


20

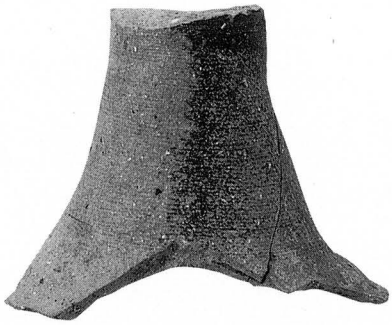


32

24



33



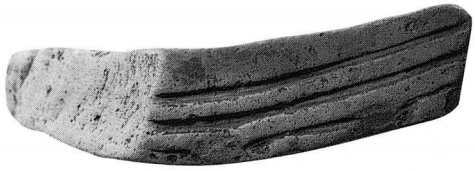
40

31

36

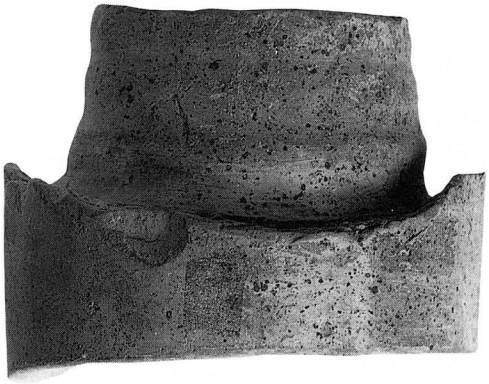
出土遺物

15



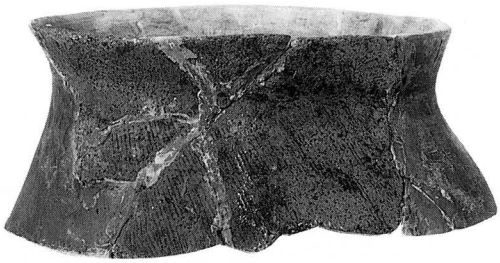
14

13

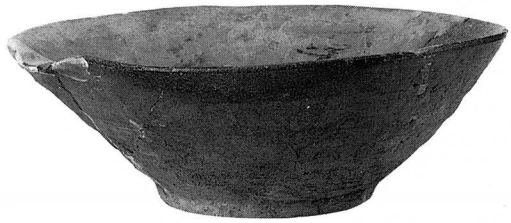


16

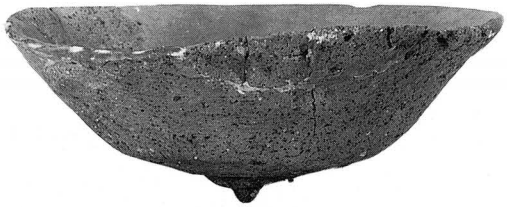
出土遺物



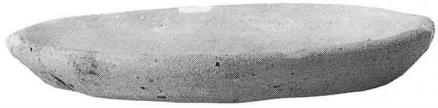
37



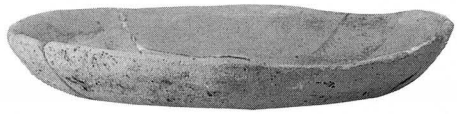
8



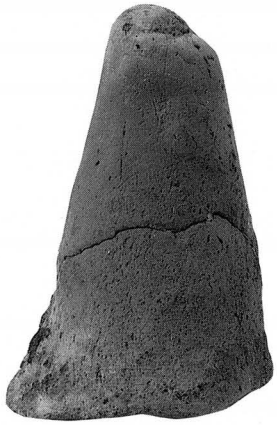
38



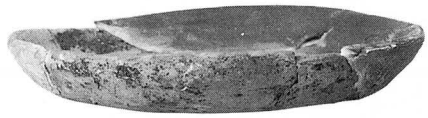
12



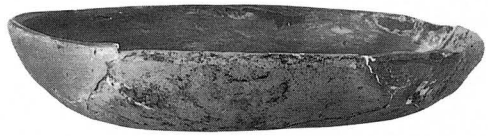
21



39



22



10

35

9

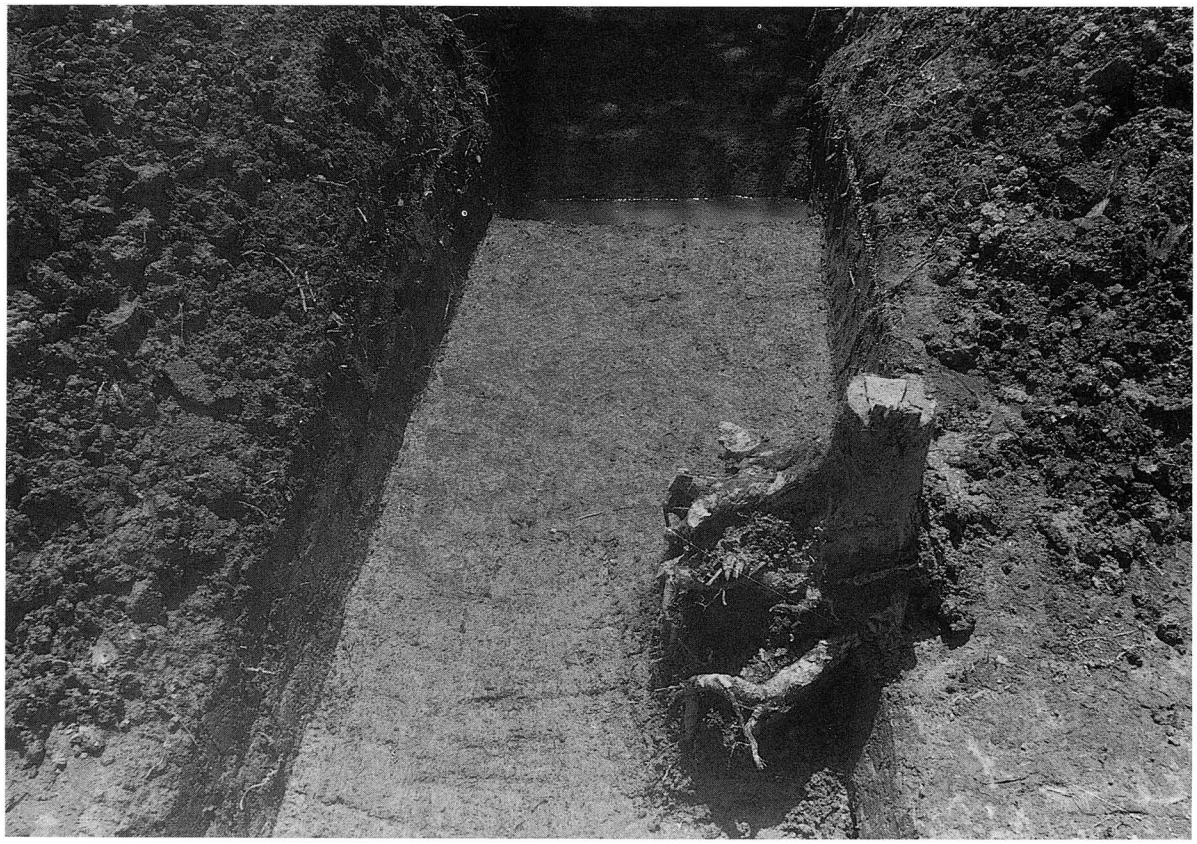
出土遺物

1　N－0北壁断面

2　N－1東壁断面

1　N－0須恵器大甕(8)出土状況

2　N－0須恵器坏蓋(7)出土状況



1　N―10完掘状況

2　S―1須恵器坏蓋(1)出土状況

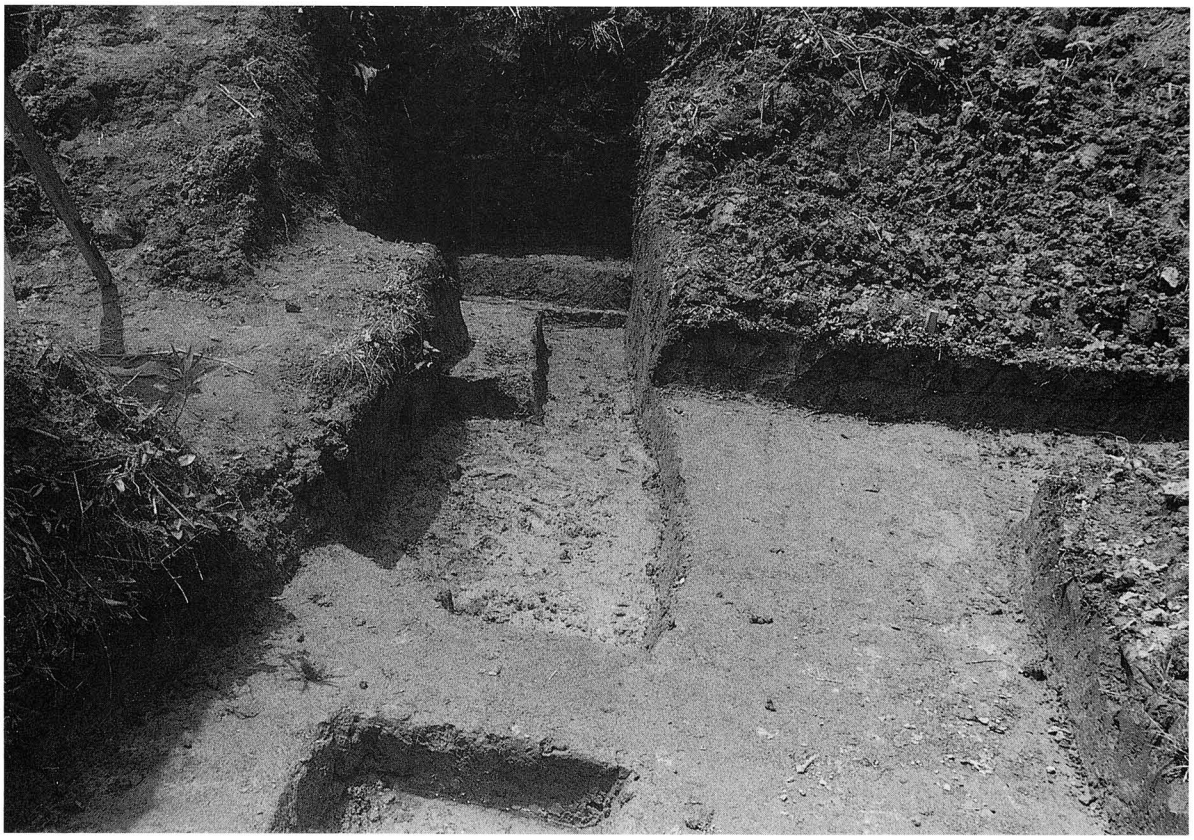
1　S－2須恵器坩出土状況

2　S－2須恵器坏蓋(4)出土状況

1　S－3須恵器坏身出土状況

2　S－4完掘状況

1　七ツ塚調査前状況



2　E－3完掘状況

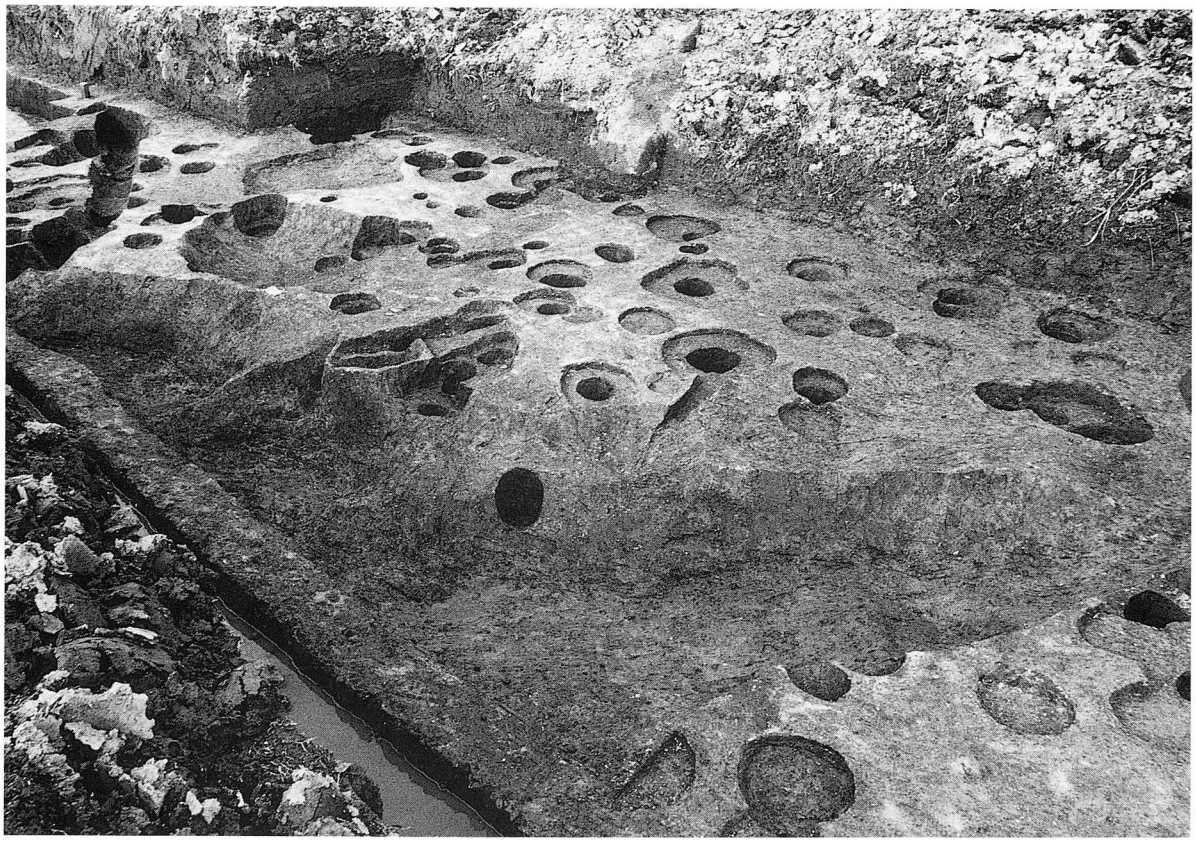
1　E－3周溝北東コーナー状況

2　E－4完掘状況

1　W－6トレンチ状況

2　W－6出土弥生式土器

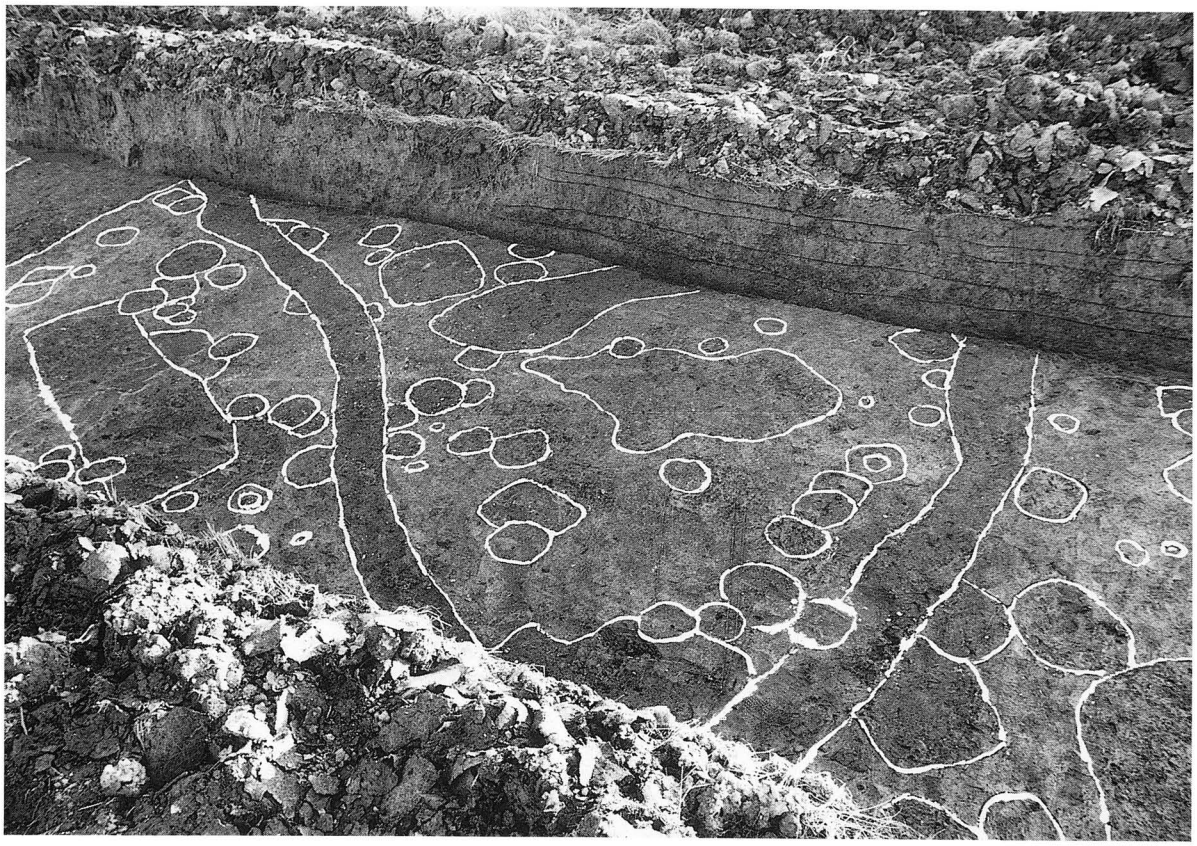
1　小川地区全景



2　土壙（ＳＫ03）・不定形落ち込み（ＳＸ01・ＳＸ02）付近　〈南より〉

土壙（ＳＫ03）・不定形落ち込み（ＳＸ01・ＳＸ02）付近　〈西北より〉

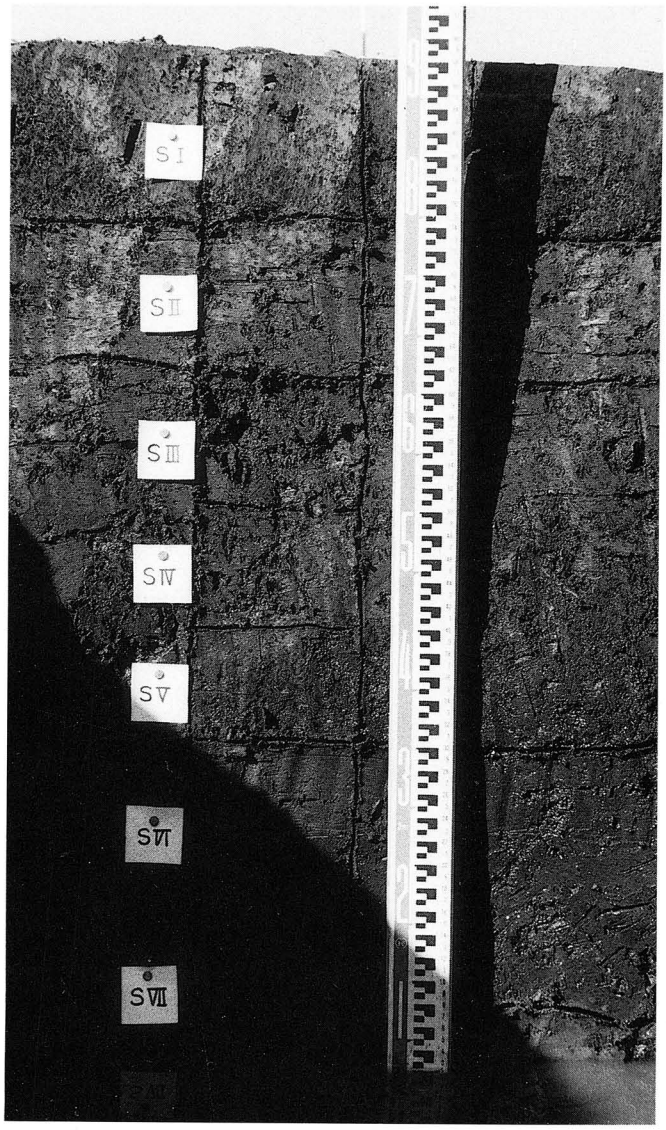
1　トレンチ中央付近　〈西北より〉



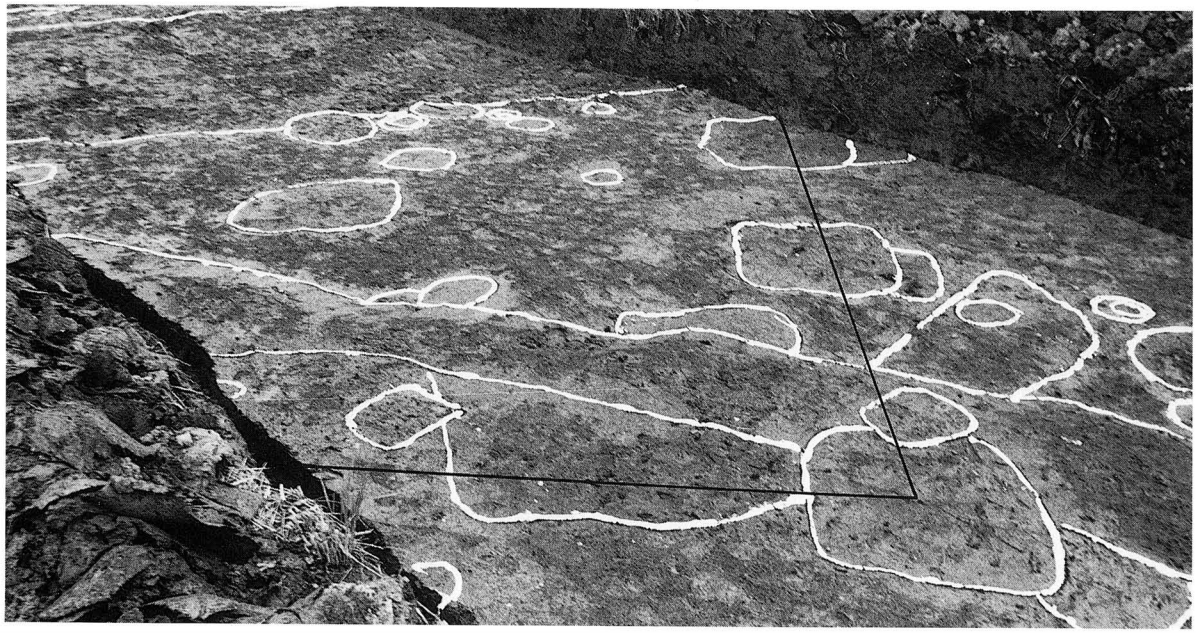
2　方形土壙（ＳＫ05）・土壙墓（ＳＫ06）付近　〈北より〉

1　溝（ＳＤ01）・方形土壙（ＳＫ05）・土壙墓（ＳＫ06）付近　〈東より〉

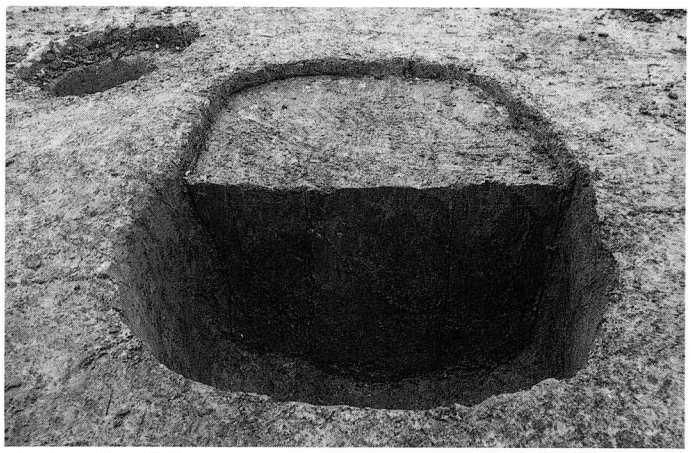
2　沼沢地・土壙（ＳＫ01）付近　〈西北より〉



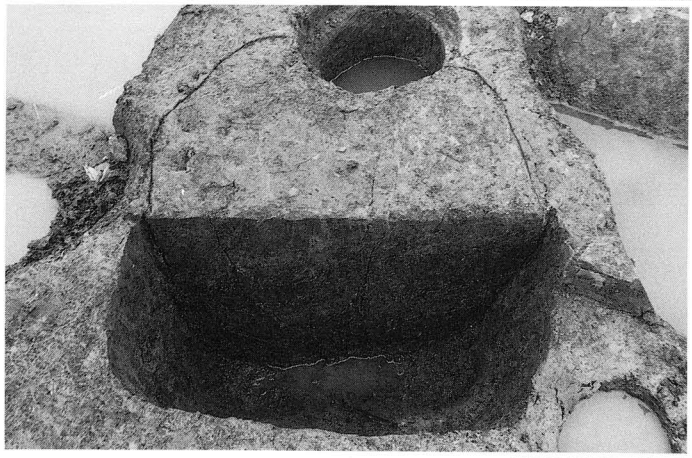
1　沼沢地土層サンプリング状況



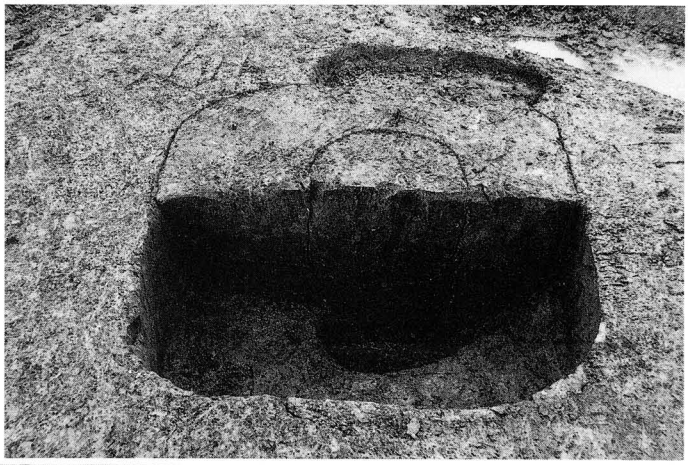
2　掘立柱建物（ＳＢ01）検出状況　〈南より〉



1　柱穴（P02）断面

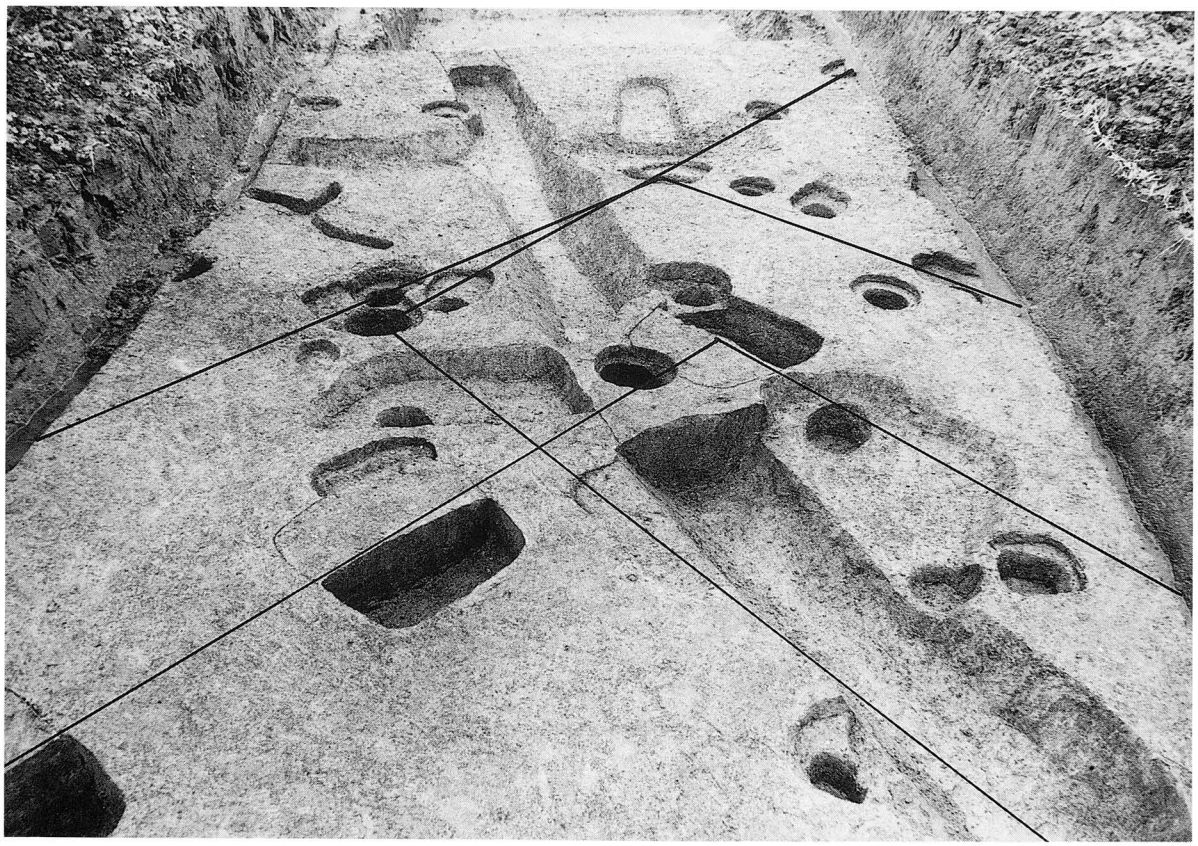


2　柱穴（P03）断面

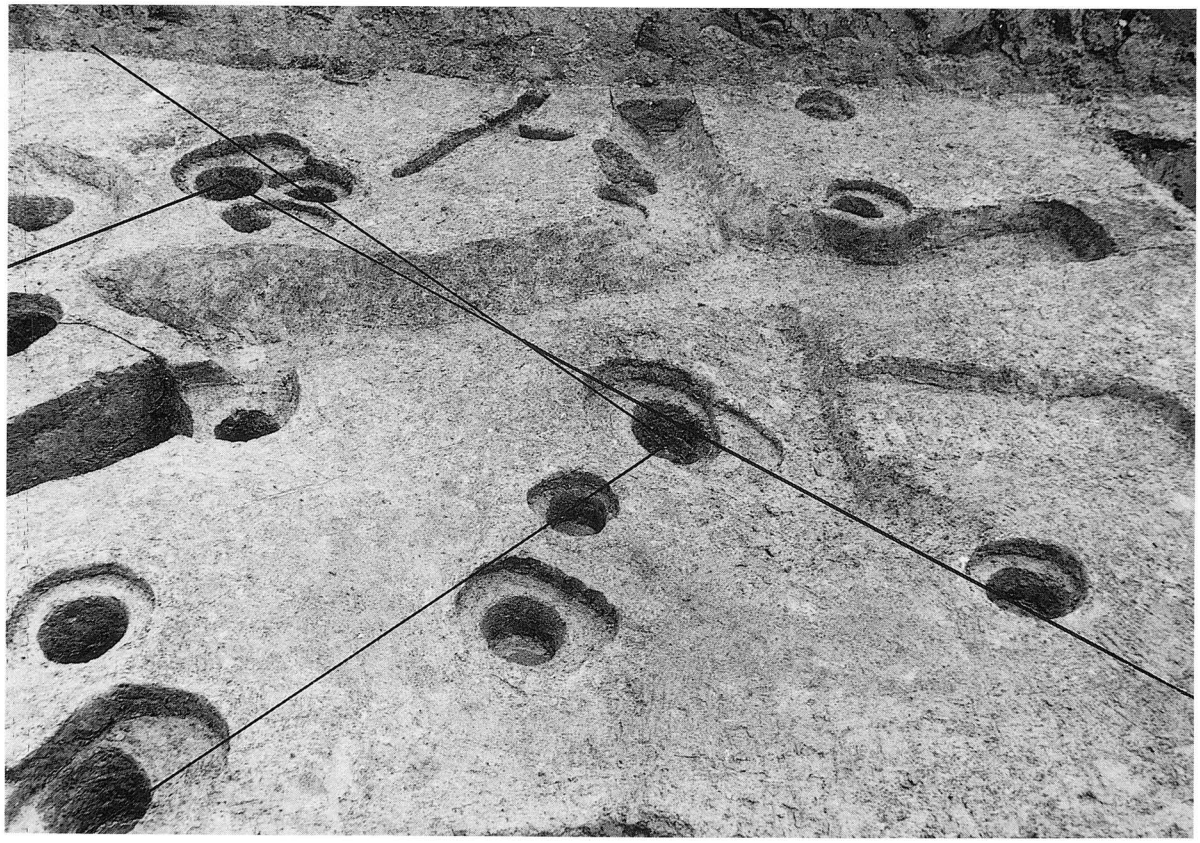


3　柱穴（P04）断面

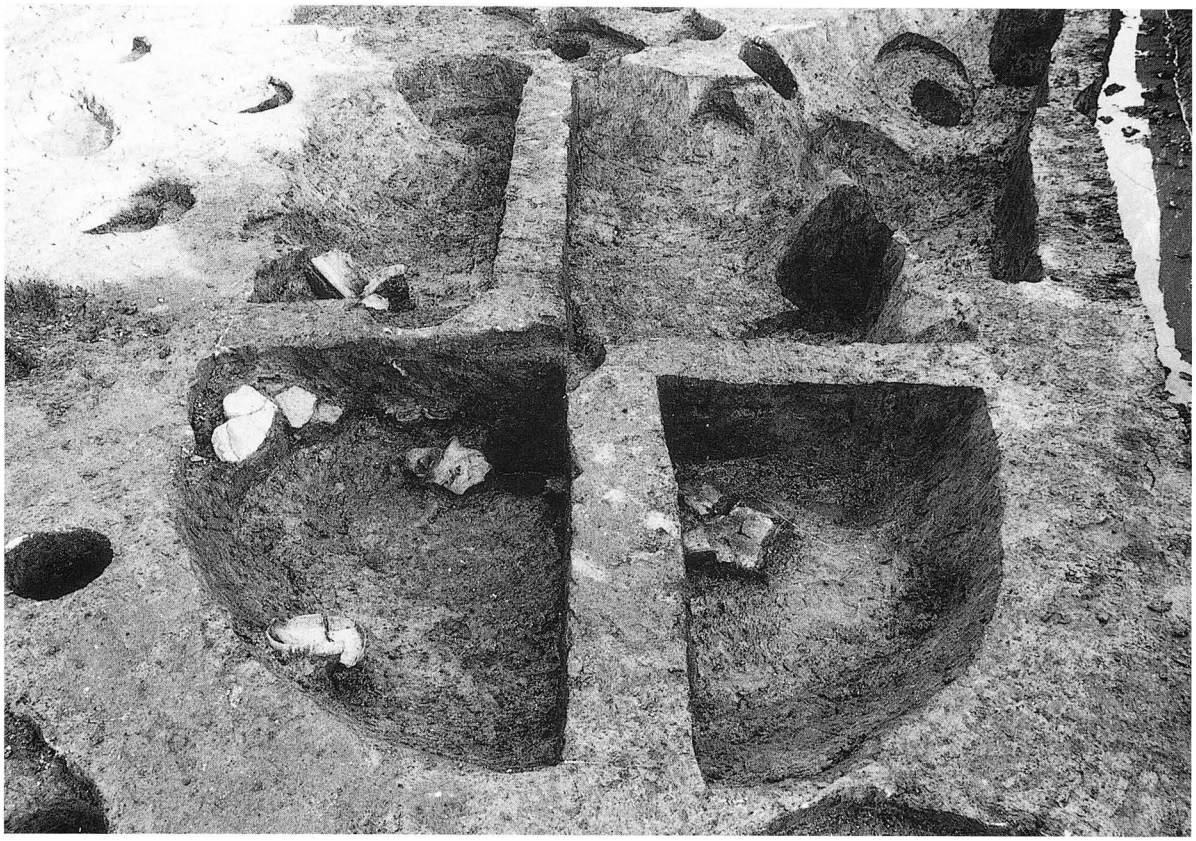
4　柱穴（P05）断面



1　掘立柱建物（ＳＢ01・ＳＢ02・ＳＢ03）検出状況　〈西北より〉



2　掘立柱建物（ＳＢ02・ＳＢ03）検出状況　〈南西より〉



1　土壙（ＳＫ04）全景

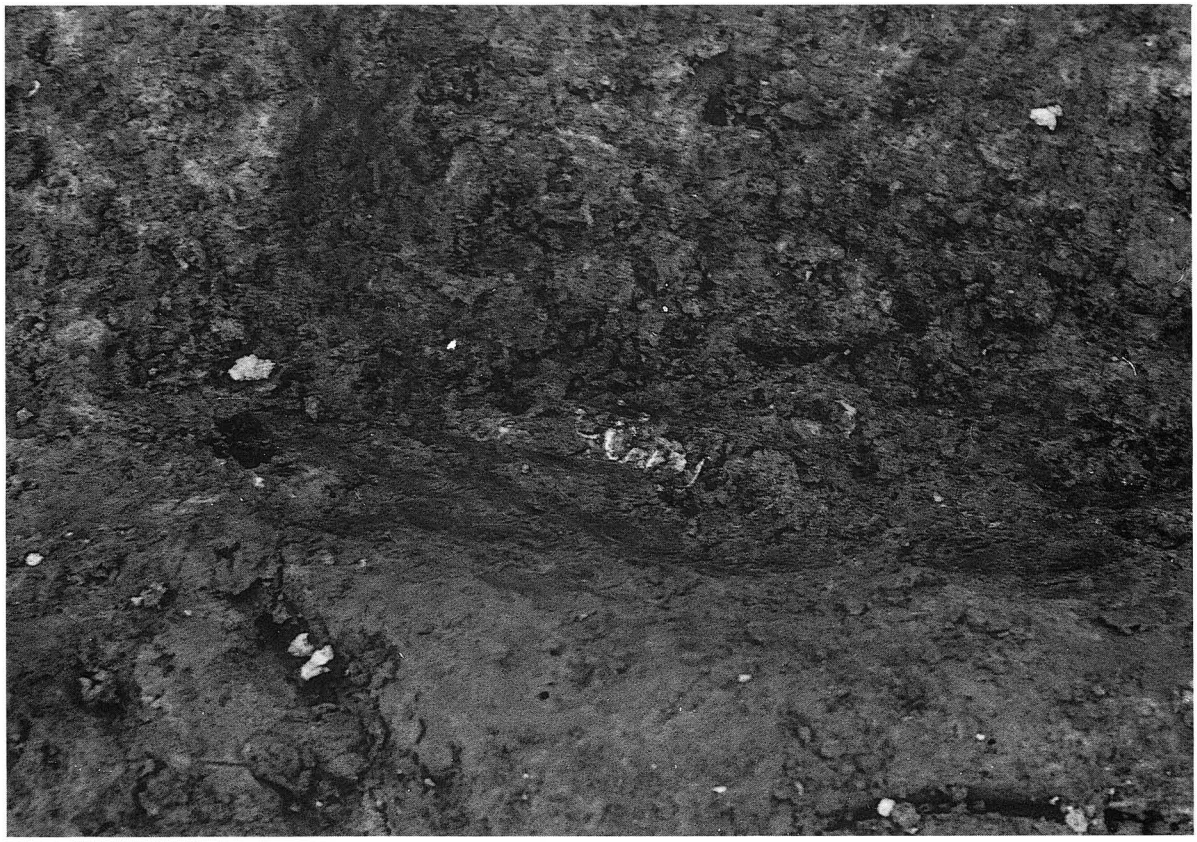
2　土壙（ＳＫ04）壺出土状況

1　土壙（ＳＫ04）甕出土状況

2　土壙（ＳＫ04）甕出土状況

1　方形土壙（ＳＫ05）〈北より〉

2　木棺墓（ＳＫ06）全景　〈南より〉



1　木棺墓（ＳＫ06）歯出土状況

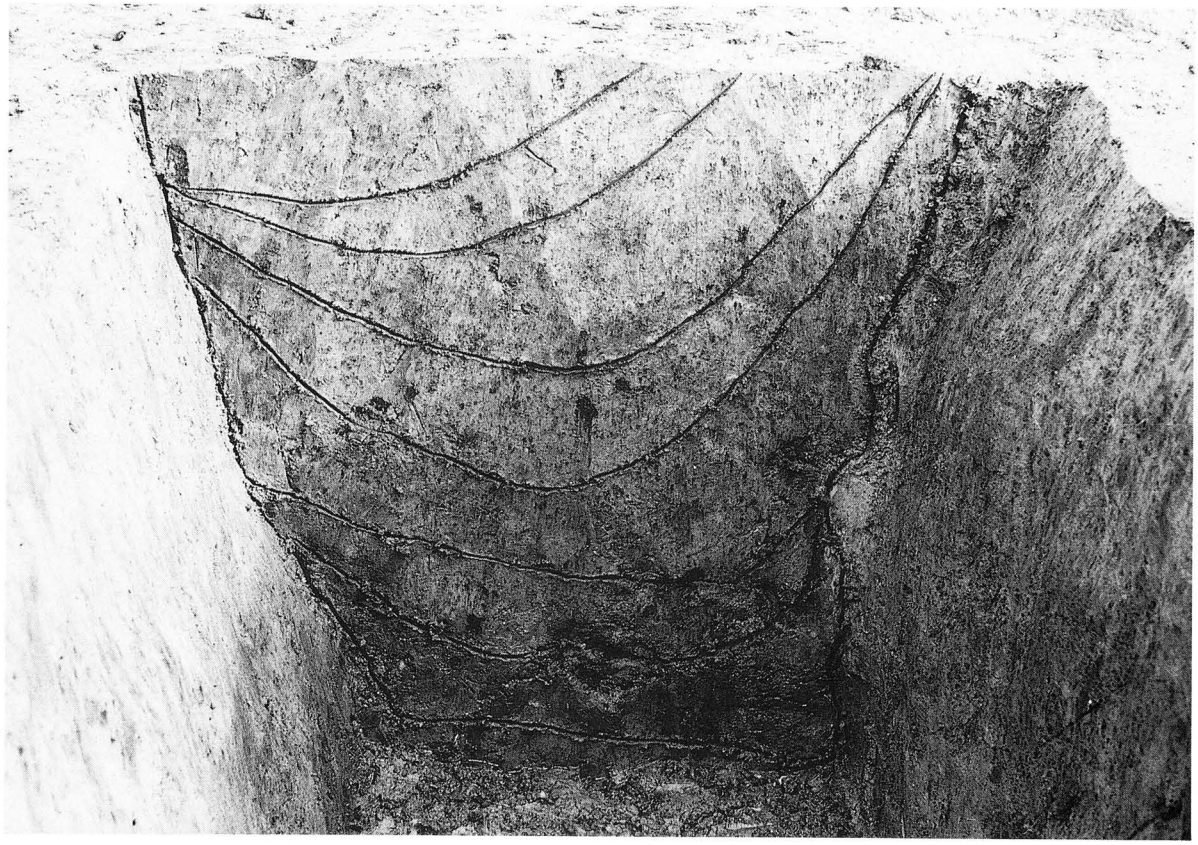
2　溝（ＳＤ03）断面

1　溝（ＳＤ09）断面

2　溝（ＳＤ12）全景　〈南より〉

1　溝（ＳＤ13）断面

2　溝（ＳＤ13）土器出土状況



1　不定形落ち込み（ＳＸ04）断面

2　畑地試掘トレンチ設定状況

27

28

29

30

67

31

図15　出土遺物　27～31（ＳＫ04）・67（ＳＤ09）

68

69

70

72

73

75

出土遺物　68～70，72，73，75（ＳＤ09）

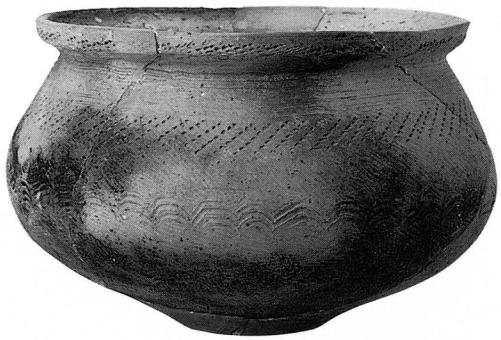
76

77

78

79

80

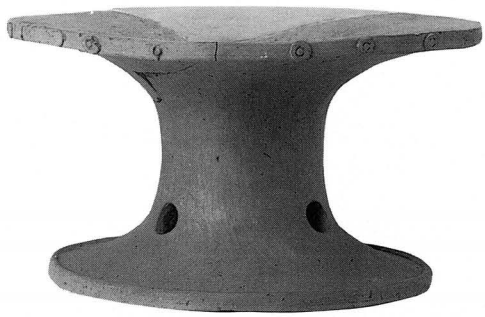


81

82

出土遺物　76～82（ＳＤ09）

83



84

86

87

88

97

107

101

出土遺物　83，84，86～88（ＳＤ09）・97，101，107（ＳＤ13）

125

126

173

180

出土遺物　125，126，173，180（ＳＤ13）

1　A区調査トレンチ全景（南西から）

2　同上（北東から）

1　C区検出遺構遠景（南西から）

2　同上　近景（西から）

1　C区検出遺構(ＳＸ200)近景（南西から）

2　C区検出遺構(ＳＸ200)近景（南西から）

1　C区検出遺構近景（北西から）

2　C区検出遺構近景（西から）

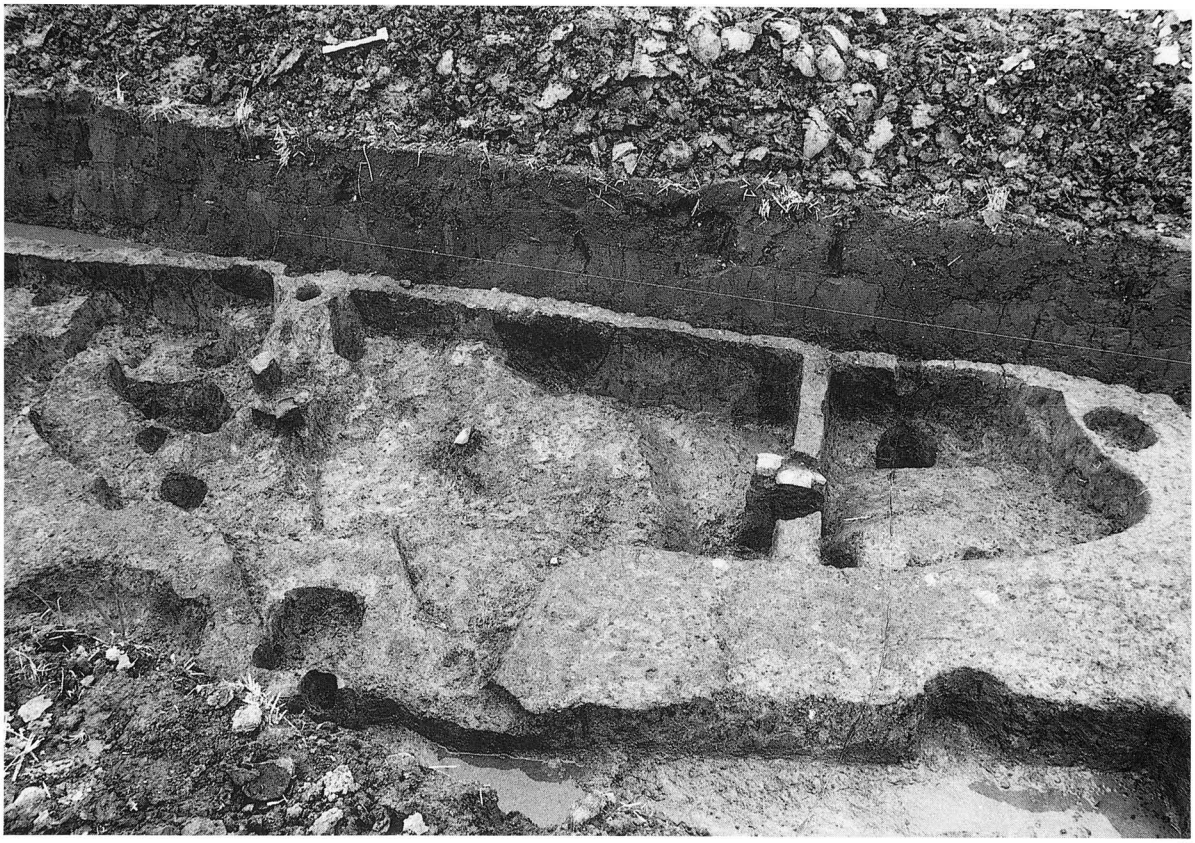
1　C区検出遺構上層（南東から）

2　C区検出遺構下層（南東から）

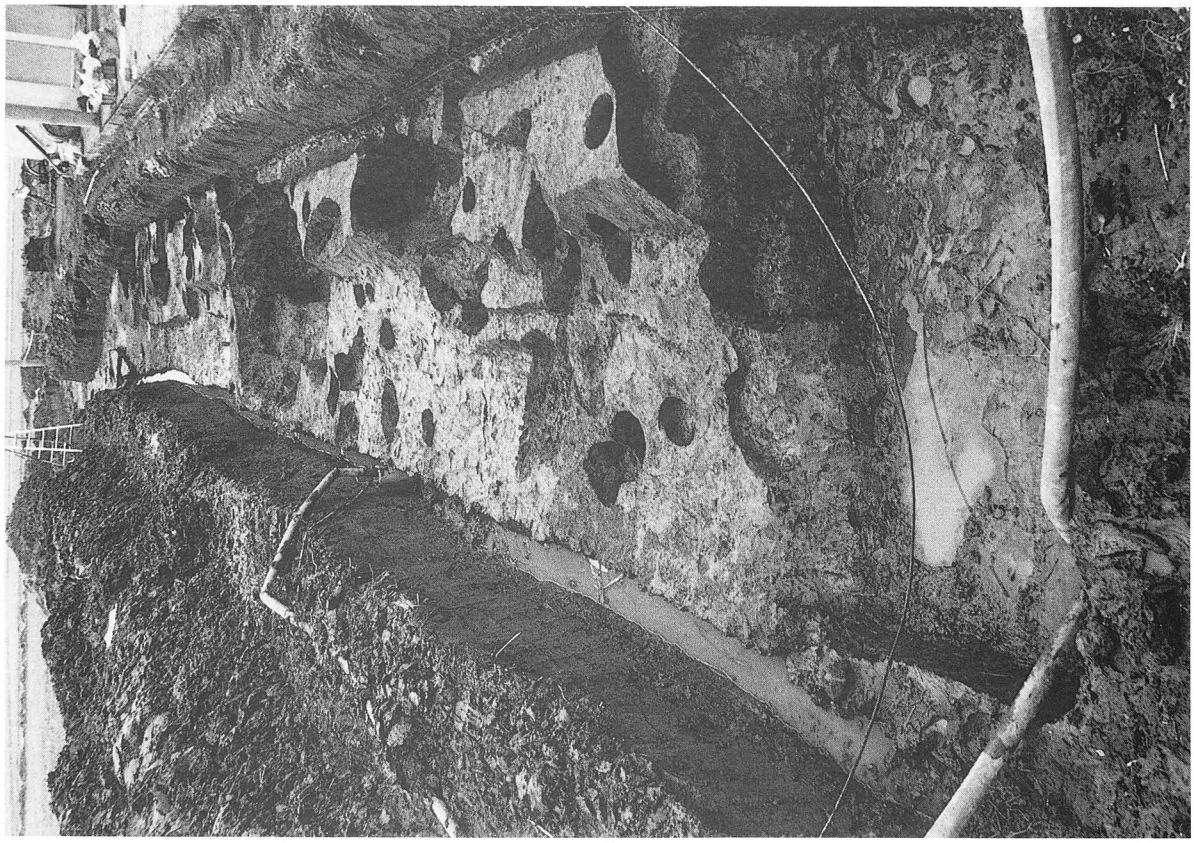
1　C区検出遺構上層（南西から）

2　C区検出遺構上層（南東から）

1　C区検出遺構上層（南東から）



2　C区検出遺構下層（南東から）



1　D区検出遺構近景（南東から）

2　C・D区境の平安時代の溝（北西から）

1　D区検出遺構近景（南西から）

2　D区検出遺構近景（南西から）

1　D区検出遺構（ＳＸ213）全景（西から）

2　D区検出遺構（ＳＸ213）断面（南から）

1　D区検出遺構上層（南東から）

2　同上　下層（南東から）

1　D区検出遺構(ＳＸ242)上層（北から）

2　同上　（ＳＸ242)下層（西から）

1　D区検出遺構（南西から）

2　D区検出遺構（南西から）

1　D区検出遺構（南西から）

2　D区工事着工後の状況（南東から）

昭和55年３月

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ－５

編　集　滋賀県教育委員会

発　行　滋賀県教育委員会
財団法人　滋賀県文化財保護協会

印　刷　有限会社　真陽社
京都市下京区油小路仏光寺上ル
ＴＥＬ　075-351-6034